

## 第七章 婺州

これからは『秦婦吟』とともに生きるようになるだろうと韋蘭が言い、韋荘も、『秦婦吟』が我が運命を変えようであってほしいと思ひもする。あり得そうになくとも、そうならなければ秦婦の願いは叶わない。

中和三（八八三）年初夏、揚州を発ち、長江の南の潤州に入り、伝を得て藹の筆になる『秦婦吟』を周宝に献じる。

周宝は、戦乱を避けて逃れくる人士を広く受け入れ、よい評判を得ている。幼少のころより宮中に入りし、長安の旧き良き日々を知り、皇室に強い憧憬を抱く。黄巢に占拠された長安で何があつたのか詳しく聞きたいと、韋荘は招かれる。

以来度々周宝の客になり、折りを見て言うには、朝廷は都の回復のために

沙陀族の力を借りる方針であるが、本来は唐朝自らが為すべきで、その先頭に立つと民衆が期待を寄せるのは他ならぬ周宝であると。いささか周宝を持ち上げ、『秦婦吟』を作った目的を果たす足掛かりを得ようとする。周宝はその言を喜び、幕客に迎えようと言う。『秦婦吟』が己の道を開いてくれる手応えを感じる。黄巢が長安に入ってから失うばかりであったが、住むに不足のない家と、家族を養うに十分な金品を手にする。藹は兄が世に認められたのを素直に喜ぶ。

「莊園のお坊ちやまも、人並みの辛抱をせねばなりませんかな」

蘭は笑う。

韋莊は四十八歳にして初めて人に仕える気苦労をする訳だが、実際には人並みというほどのものではない。定まった職務のない私的な客分で、周宝の話し相手になり、天下の情勢について時に進言し、詩書の類について問われれば答える、それくらいだ。周宝は礼儀正しく接してくれ、幕府には家柄のよい才子が大勢いて、そうした人々と交わるのは心地よい。

蘭はこれで安心と思ったのだろう、新たな商売の道を探る旅に出る。蘭に頼り切りにならずにすみそうだ。

『秦婦吟』は人々の間に流布し始め、韋荘の名も知られていく。『秦婦吟』が多くの人に読まれもし聞かれもするのは、周宝がそうであるように、都で何があつたのかに関心があるからだ。長安の状況は少数の脱出者から断片的にししか知られていない。『秦婦吟』は都のありさまを詳細に描き、優れた詩の表現は人々を感動させる。『秦婦吟』のよい評判を耳にすると、内心誇らしげになる。楊胆を供人として潤州の町を歩くとき、心なしか胸を張りたくなる。そのような韋荘を見る彩霞の目は相変わらずだ。

李克用率いる沙陀族の騎馬軍団が北の地を出て怒濤の勢いで都に迫った。迎え撃つ黄巢は敗北を重ね、都での決戦を避け、南東に逃亡した。韋荘が幕客となった同じ四月のことだ。黄巢は都を出るに際して宮殿に火を放ち、入城した沙陀と漢人の混成部隊が無秩序な略奪に耽った。長安に無傷の家屋は一つも残らぬと潤州に聞こえてくる。ここで安楽にしているは都の人々に申

し訳ないと、周宝の発奮を促す。秦婦のためにそうするのが己の責務だ。周宝は都のありさまを嘆き悲しみ、早急に何とかせねばと言う。

日々の暮らしには暇が多く、それを使って、虢州の荘園にあった種々の書物の復元に取り組む。子孫のためにと書き残してくれた多数の記録は全て灰になった。藹は目を通したものを記憶している。手がかりがあると弟は思い出せるので、記憶を引き出す工夫をして、文字に写していく。

周宝はどこから耳にしたのだろうか、朝廷の故事にまつわる面白い記録があれば見たいと所望する。周宝の好みそうな事柄を選んで書物にまとめる。その内容もさることながら、周宝は藹の筆を喜び、多大な褒美が下される。

周宝が皇室の伝統を重んじ、都を憂う気持ちは本物である。しかし、唐朝の再興のために立ち上がる意欲を持ち合わせているのかは疑わしい。韋荘の言うことはいつもうなずいて聞いてくれるが、行動に移す様子は見えない。優美な都の姿を取り戻したいと願ってはいても、困難な戦いに乗り出す覚悟を示そうとしない。むしろ、ありし日の唐を潤州において再現させようとの

考えに傾きつつあるようだ。

ある日、周宝は大規模な巻き狩りを催す。潤州郊外に大兵团を展開し、一日獲物を追い、「大戦果」を掲げて帰城する。大路を埋めた民衆が笙歌をもって迎える。州署の庭園で大規模な夜宴。韋荘たち客人が陪席し、周宝の求めに応じて即興の詩を競う。

十里旌旗十万兵　　十万の兵が十里を旗で埋め

等閑遊獵出軍城　　ゆるゆると城から獵の遊びへと出ていく。

韋荘は、華やかな字句を並べて狩の盛大さを歌う。美辞麗句を過剰なまでに連ねる。単純に言祝ぐのではない風諭の詩だ。披露すれば周宝の怒りを買う恐れもある。安楽な日々を貪ってばかりはいられない。己自身不本意であるし、彩霞にも、楊爺の生まれ変わりの春琴にも、我が身を恥じねばならない。「楊爺が一生尽くし続けた韋荘という人に何があるのか自分の目で見るのです」と彩霞が春琴に言った。周宝に媚びていると見られるようではいけない。

周宝は韋荘の詩に不快そうな顔をする。しかし、揚州の高駢に敵愾心を抱

き、我こそ唐朝の重鎮と自負する大物は違う。韋荘に恭しく謝し、

「今日の狩が消閑の遊び、あるいは虚勢を張るものと、人に見られるとしたら、それは我が不徳の表れです。今日は兵を出す日に備えての訓練。治にいて乱を忘れずの心です。我が真の思いを明らかにするときがいずれ参りましょう」

韋荘の作を第一等とする。これが周宝の本心なのか、韋荘には必ずしも判断がつかない。できれば、周宝が本物であってほしい。ともあれ、ささやかながらも一応の面目を施したことになる。

しかし、次第に『秦婦吟』は珍重されなくなっていく。黄巢が出て、長安の人々が四方に散り、数々の生の声で都内部の様子が聞かれるようになったからだ。それに、『秦婦吟』と同等かあるいはより悲惨な光景が身近な場所で頻々と現出するようになる。秦婦の嘆きは特別に耳をそばだてるべきものでなくなりつつある。

周宝は自身の幕府で行う種々の儀礼を朝廷のものに似せていく。韋荘が献

じた書物が利用される。周宝の邸宅に手が加えられ、いつしか豪華なものに変わる。多数の美女を集めた後宮まがいのものも設けられ、邸宅を中心に周囲二十余里にわたる牢固な城壁の建設が始まる。潤州を長安城に、自身を皇帝に擬していこうとの周宝の目論見は隠しようがない。

韋莊は周宝を諫める。全ては唐朝のためと、周宝は答える。もとより剛直な人間ではなく、婉曲な言い方しかできない。虚名を求めて上辺を飾るだけだと陰口が聞こえる。あるいは、困難な時代に、不本意ながらも権勢のある者に身を寄せるのは昔からよくあること、しばしの間は成り行きに任せるのも立派な知恵であると言う仲間もいる。いずれにしても、居心地は悪い。蘭に迷惑をかけたたくないとの思いは強く、潤州に留まって周宝の心を変える努力を続ける。

周宝の皇帝気取りの振る舞いが許される要因の一つは、潤州の豊かさである。潤州は江南の富の集積場所だ。長江の南東側に広がる低湿地は数百年をかけて開発が進み、唐の国家の基盤を支える一大穀倉地帯になった。収穫物

は縦横に発達した水路によって潤州に集められ、潤州から長江対岸の揚州に送られ、そこから大運河で、洛陽、長安へと運ばれる。黄巢が洛陽、長安を支配してから、周宝は産物を揚州に送るのを止めた。潤州に物が滞り、倉に積まれた米は腐るに任され、使っても使い切れぬ富が周宝の手にある。物が流れてこなくなつた揚州では、これまでの繁栄の維持が難しくなり、高駢は周宝を深く恨む。

それでも揚州はまだしも恵まれている。より北の地は悲惨さを極める。長安を追い出された黄巢は河南の地へと走り、それを迎え撃つはずだった秦宗権（しん そうけん）が黄巢と手を結ぶ。二人は互いに連携して、手当たり次第に荒らし回る。町を破り、ある限りを奪い、破壊を尽くすと町を捨て、次に向かう。黄巢本来の戦法がこれである。長安で閉塞状態に陥っていた黄巢軍は外に出て大いに息を吹き返す。黄巢に流動戦術を習った秦宗権は、残虐さにおいて師を凌駕する。勇猛な兵士を養うために、秦宗権は、春磨寨を発明する。人間を掠め捕らえ、丸ごと石臼に投じ、骨も砕いて挽き入れて塩漬け



肉を作る。それを塩戸と言ひ、石臼を備えた食糧供給基地が春磨寨である。行軍の際には塩戸を満載した車を必ず後に従える。

黄巢は攻撃の矛先を汴州に向ける。汴州には皇帝から節度使の任を授かった朱全忠が入っている。黄巢にとって朱全忠こそは憎むべき裏切り者。黄巢のもとを離れて朝廷に帰順した時に朱全忠を受け入れたのは王重栄である。王重栄は、朱全忠が多くの軍勢を汴州に連れていくのを望まなかった。朱全忠は、ならば裸一貫から出直してみせると、剛の者ばかり数百人を伴って汴州に入った。汴州周辺から若者を募って兵団を編成するとともに、農地の回復を急いだ。夏から秋の収穫が得られればひと息つけようかという矢先、黄巢の大軍が押し寄せ、汴州は十重二十重に囲まれる。

汴州がもし落ちれば黄巢の猛威はいつ止むとも知れない。朝廷は危機感を抱く。頼るは沙陀族の李克用しかない。都を回復させた後に北の地に帰った李克用に救援を要請する。沙陀の騎馬軍団は疾風のように黄河を渡って汴州に現れる。よもや李克用がくるとは思っていなかった黄巢軍は総崩れとな

る。黄巢は汴州の囲みを解き、故郷の地に戻って再起を図ろうとするが、狼虎の谷に追い詰められて自殺。中和四（八八四）年七月、挙兵から十年が経っていた。

朱全忠は命の恩人である李克用を上源駅に招き、酒宴を催す。片目が不自由で独眼竜と仇名される李克用の不敵な面構えを間近に見て、朱全忠はこの先きつとこの男が邪魔になると直観し、酔いつぶれたところを殺そうとする。李克用は、猛火の中、部下に担がれて難を逃れる。九死に一生を得て北に帰った李克用は、朱全忠の非道を皇帝に訴える。以来、朝廷は李克用と朱全忠の調停に苦慮するようになる。

光啓元（八八五）年二月、皇帝は長安に帰還する。黄巢に潼関を破られ、都を離れてから足掛け六年である。急ごしらえの宮殿が建てられたものの、広い都は荆棘に覆われ、わずかな人煙が立つばかり。余りの変りように皇帝は凄然と涙を流す。

黄巢は死んでも、春磨寨を考案した秦宗権はなお猛威を振るう。その部下

の孫儒（そんじゆ）が洛陽に突入する。数ヶ月にわたって徹底的な略奪をし、唐の東の都を廢墟にする。秦宗権は、皇帝が長安に戻ったのと時をほぼ同じくして、勝手に皇帝を自称するに至る。

その年の夏、蘭がふらりと潤州に帰ってくる。杭州に小さな店を構えるようになったと言う。

潤州にきて二年、周宝のもとにいるのがよいのか悩むところは多いが、蘭に世話はかけまいと、特には何も言わない。

「西湖で釣りをしませんかな」

蘭は、藹の息子の綜を誘う。西湖は杭州にある風光明媚な湖、韋荘も心ひかれるものがある。

綜は十三歳、伯父に儒学の經典を習い、父に書を教わり、それなりに勉学に励みはするが、何よりも釣りが好きである。

韋荘は、自分の思いを包み隠して綜を送り出す。

三ヶ月ほどして綜は帰り、見違えるほど大人びて、旅に出してよかったと

思う一方、

「潤州はもう終わりですな。いつまでこの息の詰まるところにいらっしやるのですか」

などと、蘭を真似たような生意気な口をきいて韋荘を苦笑させる。

綜が言うのは正しくもある。外の世界を見てきて、この町の異様さがわかったのだろう。周宝は後楼兵と称する親衛隊を編成した。若い選り抜きの千名の兵士に華麗な装備を纏わせ随時城内を行軍させる。後楼兵の足音が聞こえると、町の人は通りから姿を消す。何をされるかわからない。それだけでも十分に息が詰まるのだが、とりあえずは町に有り余る物資があるので辛抱している。後楼兵と他の兵士との間でいざこざが絶えない。後楼兵は新参者が多いのに待遇が格段によい。冷や飯食いに回された古参連中は面白くない。酔っての喧嘩は日常茶飯事、死人も度々出る。

周宝の皇帝気取りは日に日に進む。臣下の媚び諂い競争は激しい。周宝に気に入られることを考案し、財を費やし民を使役する。足の引き合いは醜い。

幕府内に派閥ができ、韋莊のような客人もその争いに巻き込まれる。超然と我関せずとしていれば、あらぬ讒言を周宝の耳に入れられる。幸いにも、周宝は『秦婦吟』の先生として韋莊を立ててくれる。それで好い気になっている訳では無論なく、忸怩たるものがあり、彩霞にはほとんど侮蔑の眼差しで見られていると感じずにはいられない。綜は周宝の似非皇帝ぶりを笑う。それが周宝の耳に入りでもしたらとびくつく己が情けない。

「杭州はどんなところだったんだい」

綜に尋ねると、

「人の世も悪いばかりではないと初めて知りました」

それは取りも直さず、杭州にいくまでは人の世は悪いことばかりだと思っていたのを意味するのだろう。考えてみれば、莊園の滅亡を目の当たりにし、洛陽、揚州と厳しい移動を余儀なくされ、やっと落ち着けた潤州が息の詰まるところであれば、人の世を好いと思わぬのも当然だろう。釣りに耽るのにはそのための理由がある。

杭州はこことはまるで違ふと綜は言う。

杭州は潤州よりさらに南、錢塘江の河口に位置する古くからの町だ。このところ發展が著しい。その多くは錢鏐（せん りゅう）という男に負う。

錢鏐は杭州の生れ、もとは親類間の鼻つまみ者だった。黄巢の反乱がまだ初期のころ、最初の洛陽攻略に失敗した黄巢は江南の地に逃れ、行き当たりばつたり町を荒らしていた。杭州にも狙いにつけ、町の人々は黄巢がくるとの噂に震え上がった。役人たちは右往左往するだけで為す術を知らない。そこに錢鏐がきて、小さな部隊を貸してくれば黄巢を追い払ってやると言った。鼻つまみ者の大言壯語を人々は笑った。それでも、他に手がなく、錢鏐に一隊を任せた。錢鏐は巧妙な作戦で敵の出鼻を挫いた。黄巢は杭州は手強いと見て進路を転じた。

錢鏐はこのとき何か思うところがあつたのだらう、人間ががらりと変つた。官に召され、町を救つた英雄のためなら労苦を厭わぬ多くの民衆がその下に集まつた。杭州の町の雰囲気も変わった。

ここで貫休が一役担うことになった。仏蕃のために羅漢図を描いて少々名を挙げた貫休は、故郷の婺州（ふしゅう）に帰っていた。婺州は杭州から内陸に入った町で、貫休は杭州にもしばしば出て、得意の画や詩で様々な人と交流を持った。錢鏐に会うと、意気投合したのだろう、政治と宗教の世界で二人は歩みを揃えるかのように出世の階段を昇った。貫休は名高い大禪師になり、錢鏐のことを「天下を治める相がある」と讚えた。

土地の英雄である錢鏐と異なり、周宝は古い唐朝の大物だ。民衆の間の人気はまるでなく、後楼兵で威圧して、無理矢理従わせている。

それでも、周宝もいつかは目覚めてくれるのではないかとの期待を抱き続けようとする。綜はそのような伯父に反発し、経典の勉強を一切投げ打ち、陸氏が何を言おうと知らん顔で一日中釣りばかりとなる。

そうこうするうちに、その年の十二月、都に帰って間もない皇帝が長安を出ていく。事の起こりは財政難である。皇帝の号令が及ぶのはせいぜい長安の周辺だけ、その他の地は、節度使が統治するか、戦争で荒れ果てたかどち

らかである。節度使は形式的には皇帝が任命するものだが、実質は半独立国の王である。民衆から取り立てた税を国庫に入れるかどうかは節度使の考え次第で、皇帝が成都に逃げて以降、皇帝の元に律儀に送る節度使はほとんどいない。皇帝は長安に帰ったものの、都を守る兵士を養う金にさえ事を欠く。何とかせねばと、「お父ちゃん」の田令孜は、河中の地にある塩池に目を付けた。河中を治めるのは王重栄で、その強力な軍団を支えるのが塩池の産物である。塩は富の源、黄巢も、闇で塩を商った父親の築いた財産があったから、旗揚げのときに人を集められた。

田令孜は河中の塩池を朝廷の直接管理下に置こうとした。むろん王重栄は猛反発する。王重栄は李克用にも睨みのきく実力者である。黄巢討伐の命を李克用に下すよう王重栄が皇帝に勧めたことから、李克用は恩を感じている。「お父ちゃん」の田令孜と、実力者の王重栄の対立が先鋭化し、そこに諸勢力の思惑がからみあって、都周辺は騒然となる。

混乱が激しくなれば、それを収めるのは、例によって李克用の役割である。



王重采の要請を受け、田令孜を除き去るとの大義を掲げ、李克用の大軍が都に向かう。李克用にこられては適わないと、田令孜は皇帝を抱えて長安を脱出し、西の鳳翔へと走る。

入れ替わりに李克用が長安に入る。都は破壊される。兵士を養うのに略奪は不可欠である。獲るものがなくなれば大軍を留めて置けない。翌年の春、李克用は北の地に引き上げる。

鳳翔に移った朝廷において、田令孜は人心の収攬に失敗し、居座れる状況でなくなっていく。唐朝が衰えたのは田令孜のせいであると憎悪が集中する。皇帝もいつまでも「お父ちゃん」の言いなりではないと反発する。田令孜は強引に皇帝を抱えて鳳翔を飛び出す。山道を落ちていく田令孜に追っ手が迫る。皇帝の間近に矢が飛ぶ。憎むべき田令孜を殺すためになら、皇帝を道連れにしても構わないとの勢いである。皇帝はここを生き延びるには田令孜に頼るしかない。二人の不思議な間柄だ。決死の逃避行も、背後からの攻撃は激しさを増すばかり、いよいよ年貢の納め時と田令孜は覚悟を決める。そこ

に前方からも槍を構えた兵士の一団が鬨の声を上げて迫ってくる。挟み撃ちにされこれで終わりだと田令孜は声を失う。現れたのは、田令孜を救いにくいた王建と韓建（かんけん）であった。

王建とは仏蕃が話していた賊王八。僧の処弘に「王道をもって天下を定め衆生を救おうと思われるのなら東に去って兵士となられよ」と諭され、その言葉に従って兵士になり、楊復光が率いる忠武軍の部隊長になった。楊復光は、王重栄に李克用の起用を提案した宦官である。黄巢が長安を出て間もなく楊復光は急死した。田令孜と楊復光は同じ宦官でも犬猿の仲、この機会にと、田令孜は楊復光の育てた軍隊を解散させた。兵士の行き場はなく、この窮状を直接皇帝に訴えようと、当時はまだ成都にいた皇帝のもとへと向かった。その指揮を執ったのが鹿晏弘である。韋愠を軍師に招いた男だ。鹿晏弘は道々略奪を重ねて兵士を食わせながら進み、軍事上重要な町である興元を占拠した。鹿晏弘としてはひとまずそれで満足で、興元に居座ると決めた。多くの兵士は不満だった。兵士の間に人気のある王建と韓建の二人を、鹿晏

弘は警戒し、不測の事態が起こる前に二人を騙し討ちにしようとした。王建と韓建は興元を脱出し成都に走った。田令孜は勇猛な武将を手なずけておけば何かのときに役立つであろうと、二人を仮子、すなわち養子とした。

その甲斐あって、皇帝とともに山中を逃げる田令孜の前に、王建と韓建が五百の兵を率いて現れたのだった。王建たちは槍を振るって追っ手を退ける。適わじと見た敵は、面倒な戦いをするよりも焼いてしまうのが簡便と、山に火を放つ。迫りくる猛火の中、王建は皇帝を背負って走る。一行はかろうじて興元に入る。先に興元を占拠していた鹿晏弘は兵士の心を掴めずに、東に流れて出ていた。

危難が去ると、田令孜と皇帝の関係は再び悪化し、田令孜は兄の陳敬瑄のいる成都へと去っていく。田令孜の後で実権を握ったのは、やはり宦官の楊復恭（よう ふくきょう）だ。楊復光の従兄だ。楊復恭にしてみれば、田令孜の仮子の王建と韓建は目障りである。皇帝を救出した功績をもってそれぞれに利州と華州の知事の職を授け、体よく外に追い払う。

一方で、皇帝を焼き殺そうとまでした勢力は、皇族の一人を皇帝として押し立て、我等こそが正当であると主張する。光啓二（八八六）年十月、鳳翔に唐朝のもう一人の皇帝が生まれる。ここでまたしても李克用が登場する。楊復恭と王重榮の要請を受け、李克用は鳳翔に進撃する。鳳翔で内紛が生じ、新皇帝は即位からわずか二ヶ月で殺される。

唐の皇帝は元通り一人に戻るが、もう一人皇帝を自称する秦宗權はなおも猛威を振るう。この少し前の七月に、興元を逃れ出て東の地に勢力を新たに張ろうとし始めた鹿晏弘を攻め滅ぼす。鹿晏弘の軍師になった韋愷がどうなつたかまでは、潤州には聞こえてこない。

こうして都の情勢は大きく動き、韋莊はそれなりに努力するが、周宝は依然として言を左右にするばかりである。幕府の雰囲気はますます悪くなる。諂い上手の小人が跋扈し、心ある人々は息を潜めるか出ていってしまふ。周宝に先生とまで呼ばれて二年余りを潤州で過ごしては、いささか恩義を感じずにはいられない。軽々に出ていくのはためらわれる。かと言って、周宝に

あくまでも忠義を尽くす気があるのかと問われれば、そのような覚悟はない。周宝の近くにいるのは、唐朝の再興を目指してのことで、周宝個人に我が身を捧げようとするものではない。そう割り切っては周宝に申し訳ない思いもある。

潤州に淹留するうちに、妙に身動きの取れぬ状態になり、いよいよ息の詰まる思いに、ここはたとえ恩知らずと謗られようとも、出ていくしかないかと考えもする。これ以上は我が身がもたない。しかし、潤州を去って、ではどこにいくのか。唯一あてがあるとすれば杭州の蘭の店だ。蘭の世話にはなるまいと揚州を出たときに心に誓った。ここはもう一度だけ頼るのを許してもらおうか。杭州にいったって、その先はどうするのか。ずっと蘭の店に厄介になつてしまうのか。この行き詰まりになった我が命運を『秦婦吟』が切り開いてくれるとは思えない。一篇の詩が何かをもたらしてくれると思ったのは間違いだつたようだ。周宝に気に入られて、結局は賓客の地位を食つただけだつたのだ。彩霞に侮蔑されて至極当然だ。

なおも逡巡するうちに光啓二（八八六）年も暮れが迫ったころ、蘭がふらりとやってくる。

「兄貴、これをどう読みますかな」

一通の手紙を取り出す。

書いた主は貫休。韋荘に宛てたものではない。錢鏐である。この手紙を携えてきた者にぜひ会おうようと記してある。

錢鏐はこの十二月に杭州知事になった。杭州一帯を治める節度使は董昌（とうしょう）である。董昌は、民衆から浮上してきた錢鏐を上から押さえるのは難しいとみて、「越州を取ってきたなら、杭州はそなたにやろう」と約束した。越州は杭州の南東にある大きな町で、朝廷の号令をきかない者の手の内であった。錢鏐は越州を征伐した。董昌は約束通り越州に移り、朝廷に申請して錢鏐を杭州の知事にした。

「これを持って、錢鏐どのに会いに行くようにと、大禪師さまはお考えなのかい」

「そういうことでしょうか」

蘭はとぼける。蘭の頼みに応じて貫休が書いてくれたに違いない。

「仏縁と考えればよいのかい」

「でしょうか。御仏のお導きなら悪いことにはなりませんでしょうか。

俺の風任せよりは幾分かましですか。大禅師さまもあれでなかなか癖のあるお方、良し悪しは俺にはわかりませんな」

あくまでもとぼける蘭の顔を見て心を決める。

光啓二（八八七）年が明けるとすぐに潤州を出る。周宝は送別の宴を催してくれた。さすがに去る理由をあらさまには言えない。従弟の誘いに応じてしばらく南の地を巡ってみるつもりであると告げる。

三年を過ごした潤州だが名残惜しさはない。ただ、淑娥ばかりは春を迎えた庭に未練を残す。潤州にきてから花を育て、ようやく庭が賑やかになってきたところである。楽しみにしていた春の花の盛りを前に去らねばならず寂しげだ。

城壁の外に出て、これで後樓兵の姿を見ないですむと思うと、せいせいした気持ちになる。それは淑娥も同じだろう。

途中、叔父の韜が一度は見ておきたいと旅に出た蘇州に立ち寄る。四世の祖、韋応物が最後に過ごした土地だ。『秦婦吟』によって韋荘も一応は詩人としての名を得たと言えるだろうか。『秦婦吟』があったからこそ周宝に客人として迎えられた。しかし、お上のためにも、民のためにも何もできずに終わった。詩人としての名は我が身の暮らしを助けただけ、先祖の韋応物に対して恥じずにはいられない。それに、周宝に対してさすがに不誠実な去り方であったかと、何やら後ろめたさもあり、潤州から早く遠くに離れようと、蘇州はわずか一晚であわただしく去る。

杭州に到着したのは一月の終わり。長安ならまだまだ厳しい寒さがしばしば戻る頃である。西湖の畔を歩くと、風は軽く、陽射しは暖かく、道は花で溢れる。嬉々として釣り糸を垂れる綜に誘われ湖で半日を過ごすと、晴れ晴れとした気分になる。確かに潤州は息の詰まるどころであったと改めて感じ



る。蘭の店は繁華な通りに面している。朝早くから夜遅くまで人通りが絶えない。どの顔を見ても活き活きとしている。

貫休の手紙を携えて州署を訪れる。周宝の似非宮殿と異なり、簡素な建物である。初めてきてすぐに知事に会えるはずがないと、出直すつもりで取り次だけを頼む。即座に錢鏐自身が会ってくれろと言う。誰とでも気さくに会うのが錢鏐の普段からのやり方で、これまた飾り気のない部屋に通されると、待つ間もなしに錢鏐がくる。

三十六歳と聞いていた年齢より若く見える。かつては鼻つまみ者だったらしいが、日焼けし、引き締まった顔、光沢のある立派な髭、きびきびとした動作、杭州の町の雰囲気そのままの澆漑とした知事である。切れ上がった目の澄んだ瞳の輝きが何よりも美しい。豪奢な暮らしに肥え過ぎて、病的にむくんだ顔、どんよりと濁った眼の周宝とは全てが違う。

錢鏐は貫休の手紙を一読すると、

「かの『秦婦吟』をお作りになったお方が、大禪師さまの旧き御友人であり

ましたとは」

と、しきりに感嘆する。

かつての汴州の大相国寺での出会いや、『秦婦吟』についていくつかを尋ねつつ、錢鏐自身がいかに多くを貫休の教えに負っているかを語る。

「自ずからなる不動の心と、大禪師さまはよくおっしゃいますが、某などにはまだまだわかりかねます」

都の言葉を使う周宝と異なり、錢鏐は土地の言葉そのままだ。韋荘にはよく通じないところがある。

潤州の様子を尋ねられ、慎重に答える。ここぞとばかりに周宝を悪しざまに言うのは品がない。錢鏐は周宝の大邸宅の様子を聞き、

「某が思いますに、周宝さまは何か思い違いをされておられるのでしょうか。民こそが第一です。その順序を間違えてはなりません。上に立つ者は、民を養い、天下を富ませるために働く。我が身を養うために民を使役し、我が身を富ませるために土地を得ようとしてはなりません。上に立つ者が専らそう

しているのを憤って、もともと黄巢は義を立てようとしたはずです。すぐにそれを忘れ、とりわけ都に入ってから、虚名を得、財を貪ることにのみ走りました。滅んだのは当然でしょう。潤州も憂うべき状況にあるようです。黄巢の悪逆ぶりを間近に御覧になった韋荘どのお言葉を、周宝さまがお聞きにならなかつたのはまことに残念です。ここ杭州は違ふと某は思っております。大禅師さまのこのお手紙がなくとも、某が周宝さまとは異なるところを韋荘どのに見ただけの機会を、近くお作りする所存です。しばらくの間は杭州の春を楽しまれ、潤州でお疲れになったお心を休められるがよろしいでしょう」

杭州にきてくれたことに錢鏐は礼を言い、別の用事があつてと詫びながら部屋を出ていく。

州署を後にすると、錢鏐の印象と重なって、杭州の町の好ましさが一段と増す。

「好い町だ。あんなに楽しそうに遊んでいる。このような光景はあちらでは

見られなかった」

子どもたちが歓声を挙げて走り回る。

「子どもがたくさんいますと、町も若く見えるようでございます」

後ろに従う楊胆が言う。

錢鏐も若く、杭州も若い。潤州とは何もかも違う。潤州で出歩くときには必ず楊胆を同行させた。いつ危険が及ぶかわからなかった。杭州ではそのような心配はもういらぬようだ。杭州には後樓兵のようなものはいない。錢鏐は数人の従者だけを連れて街を歩き、民衆と自由に話をしているという。錢鏐は民衆から父親のように慕われている。錢鏐はこれまでに見てきたどの人間とも違うようだ。

日を置かずして、韋莊は錢鏐の幕客として迎えられる。周宝のときと同様の身分であるが、錢鏐は、都などから流れてきた人々を、周宝とは違う観点から迎え入れている。周宝は家柄を重んじ、旧き都の風習に馴染んだ人間を好んだ。韋莊はその点で周宝の好みに合った。錢鏐は杭州の民のためになる

かならないかで人を選ぶ。『秦婦吟』を読み、民衆に人気のある貫休の推薦もあつて、錢鏐は韋莊を信用してくれた。『秦婦吟』が新たな道を開いてくれたとも言えるだろう。

錢鏐の幕府には、かつて都で若干の交渉のあつた皮日休の息子もいる。錢鏐は黄巢によつて処刑された皮日休を憐れみ、民衆の側に立とうとした父の精神を受け継ぐ息子を厚く遇している。

三月、潤州で反乱が勃発する。後楼兵との待遇の違いに対する古参兵の不満が原因で、薛朗（せつろう）という者が首謀者に祭り上げられたものの、多分に偶発的なものだ。奇妙なことに、後楼兵が反乱に同調した。皇帝気取りで贅沢に耽る周宝は後楼兵にも見限られ、身一つで南の常州に逃げ込む。周宝の凋落を揚州の高駢は手を打って喜ぶ。

「まるで時を計ったかのような幸運でした」

杭州の店の裏の小さな庭で、淑娥と花を植える陸氏が何気なく話しているのを耳にし、韋莊は内心忸怩たるものがある。

潤州を出るのがいまま少し遅かったならば反乱に巻き込まれていただろう。周宝の客分として優遇されていたながら、時を計ってさっさと逃げ出したと、反乱の巻き添えになった同僚は恨んでいるに違いない。決してそのようなつもりではなかった。しかし、何か事があつたときにあくまでも周宝に仕える気がなかったのは事実だ。要するに周宝に対して初めから誠実ではなかった。では、いま錢鏐に対してどう考えているのか。我が心に問うと、晩春の杭州の麗しい風光が韋莊を憂鬱にさせる。

この杭州のすばらしい季節に出会えたのもまるで時を計ったかのようだ。貫休の助けもあつて、錢鏐から鄭重な扱いを受けている。錢鏐は明らかに優れた資質を具える。遙かに見劣りする周宝に三年余り仕えた。錢鏐の幕客となつてまだひと月余りである。しかし、ここには長くいられないと考えずにはいられない。『秦婦吟』は必ずしも己を導くものではないと、あきらめのよくな思いも湧く。

杭州がとりわけてすばらしい町であるだけに、遠く離れた長安の春が偲ば

れる。この三月に皇帝は興元から鳳翔に移った。次は長安への帰還だが、都は荒れ果て、まだまだ帰れる状態になっていない。周宝の近くにいたときには、唐朝とのつながりがまだしも感じられた。周宝はついに皇帝のために動こうとしなかったが、それでも皇帝や都を心にかけていたのは確かであり、韋荘の助言に耳を傾けてくれた。

錢鏐は杭州に生まれ、土地の民衆と生きている。錢鏐も皇帝の苦難を憂い、皇帝の詔を尊重し、遠く皇帝のもとへと何がしかのものを送ってはいる。しかし、錢鏐が皇帝のために動くことはあり得ない。杭州が遠すぎるだけでは、錢鏐は元来が唐朝の人間ではない。韋荘が唐朝のためになる助言を何かしら錢鏐に対して行うことはまず考えられない。錢鏐が韋荘に求めているものは違う。杭州の民のために何ができるかだ。『秦婦吟』を作った本来の目的は長安の民を救うためだった。長安の民も杭州の民も同じだと思えばよいのか。それはできない。『秦婦吟』は都の民を思って作ったのだ。都の困苦を他所に、この町のために身を砕くのは己の為すことではない。

春の深まりとともに憂愁の度合いは増し、ふと婺州に行くことを思い立つ。杭州にきたのは貫休の手紙に導かれてのことだ。貫休に会って、己のこれから先を考えてみたい。あの羅漢像を描いた貫休だ、何かを指し示してくれるかも知れない。

錢鏐に婺州への旅を願い出る。貫休に礼を言いにくためであると、その理由を告げると、

「むしろ某からお勧めすべきでした」と、すぐに認めてくれる。

韋荘は、蘭ともども、一家全員を伴って婺州に赴く。

**光啓**三（八八七）年初夏、韋荘は小舟の上にいる。

舷側にもたれ、木漏れ陽が水面に千変万化する様に見入る。耳に触れるは、水の音、櫓のきしみ、鳥の声、そして舟上の静かな会話。



舟は緩やかに曲がる流れを遡って林の中へと入る。暑いと感じられていた日差しがほどよく遮られ、若葉の色に身が染まる。ほのかな風に軟らかな湿り気がまじる。

舟に乗るのは韋荘と蘭、それに三人の僧。

韋荘は五十二歳。頭巾より外に出る髪に白いものが目立つのは、齡相応であるよりも、ここ数年の労苦によるものだろうか。

水が泡立ちつつ去りゆくを見てみると、心の内の重みも消えゆくようだ。目を上げると、何やら懐かしさが湧き上がってくる。これまで幾度となくここで舟に乗ったことがあるかのように。林の木々の一本一本に見覚えがあると思える。ここにくるまでの間に見たどれも昔から馴染みであったかのようにだ。

舟に乗った最初のころは杭州での憂愁が残っていて、ここよりも細い流れの左右に見えるものにもさほど興趣を覚えずにいた。水辺で洗い物をする農婦たちの前を通り、人家の裏を抜け、時に遠景に婺州の町があった。やや広

い川へと滑り出て、遠く北に山々の稜線が霞み、その前に田圃が広がった。精を出す農民の姿、樹叢に群がる白鷺、いく筋かの白い煙、川辺の草に舞う蝶。様々なものに目を奪われるうちに、気持ちが変わったのだろうか。さらに大きな川へと乗り出し、悠々たる大地のただ中、舟は天地の間に自在に翻るかと思えた。このまま一気に大海にまで踊り出るのではと錯覚するばかりのときに、舳先はぐいと転じられ、細い川の入り口へと向かった。その土手に、粽と春琴が並んで釣り糸を垂れていた。舟に向かって二人が手を振った姿は、いつもそうしていることであるかのように感じられた。

むろんそうではない。韋家は長安南郊の杜陵の出、韋荘自身も長安に生まれ、南に遠く離れた婺州の土地に何の所縁もない。風の味わいも山のかたちも、北と似るところはない。まぎれもなく初めての土地、異質の風光である。にも拘らず懐かしいと感じている。

貫休のはからいで婺州の町に小さな住いを得たのはつい二日ほど前。当分の間、ここに住むと決めた。これからは婺州を我が本拠地とし、用のあると

きだけ杭州にいく心積もりだ。錢鏐が許してくれるかどうかはわからない。貫休は韋荘の望むままに事を進めてくれている。

頼れる貫休がいるから、初めてのこの土地が懐かしく感じられるのか。そうであるようであり、そうでないようでもある。

その貫休が舳先に座っている。揚州の仏蕃の寺で別れてから十七年ぶり。同じ人物とは思えぬまでに風貌が変わった。昔は痩せた長身、真直ぐに立った柱のような体型だった。今も背丈は同じでも、でっぷりと太って小山のよう、昔と比較できない貫祿だ。舟にあつて進みゆく前方の景色を大きく遮る。韋荘より幾分か歳上のはずであるのだが、肥えた肌に張りがあり、頬は照り輝き、鼻に油を浮かべ、声は太く艶があり、ひどく若々しい。顔つきは真を究めるようとする真摯な画僧のものから、得体の知れぬ妖僧のものに変わった。かつて仏蕃に似せて描いたと思われた十八羅漢図の一つに貫休自身が似てきている。

十年ほど前に、蘭が父親と旅の途中に婺州を訪ねたとき、画や書や詩に巧

みな禅僧として名が知られつつはあったが、墨を自由に買えないほどに貧乏で、小さな草堂を蘭が建ててやった。その草堂は、貫休の画から自ずと名の付いた婺州羅漢寺の広い境内の片隅に、昔を偲ぶよすがとしてひっそりと残っている。羅漢寺はこの近隣で今や第一の大寺院である。貫休は婺州知事の主持戒壇を勤め、最初に仏教修行をした蘭溪県の和安寺の総管主も兼ねる。錢鏐を初めとして多くの有力者の尊崇を集め、また民衆にも親しまれ、江南随一の大禅師だ。

そのような貫休であるから、ここ婺州において我が身と家族を委ねても安心と思えるのだが、貫休が果たして何者であるのか、実のところよくわからなくなっている。貫休が昔と同じではないと見えるのは、風貌や地位だけではないだろう。十七年も経れば誰もが変わる。貫休は禅僧として大成し、未熟なままに留まっている己には理解が及ばないのだろうか。

叔父の韜はひたすら旧き唐を生きようとした。唐が滅びるのを見る前に死にたいと願い、その通りになった。己は叔父の近くにいた。難しいことだが、

唐の世はこれから先も長く続いていかなければならない。悲惨な情景を様々に見てきた結果、そのように考えずにはいられない。恐らく貫休にはそのような考えはない。禅僧として俗世に無関心だからではない。錢鏐と気が合うくらいだ、かなり生臭い。

叔父は、唐の佳き日々から離れていかざるを得ない後の世代の人々を哀れと見ていた。貫休とこの前別れた十七年前には、藹の息子の綜も、楊胆の娘の春琴も、まだ生まれていなかった。叔父とは全く違う世の中を見て育った。土手に並んで釣りをしていた二人は、どのような未来を見ようとしているのか。春琴には莊園が豊かであった日々の記憶はない。憧憬を呼び覚ます過去がなければ、どのように未来を描けるのか。貫休はどのように考えているのか。

綜は相変わらず釣りに耽っている。春琴は揚州で彩霞に言ったことを実行し、女として生きるのを拒絶し、姿を男に変え、名も絃(けん)と改めた。綜はその変化を喜び、春琴を弟分としていつも連れて歩いている。二人が竿を

並べる姿はまさしく兄弟そのものだ。八歳になった楊絃を少女と見る者は婺州にはおらず、羅漢寺の悪僧から武術を習う約束を得て喜んでいる。

唐の佳き日々こそ二人を置いてやりたい。できるはずもない望みだ。十七年の間に、貫休はここで堂々の地位を得た。己は失うものばかりが多かった。一つだけ為し得たと思う『秦婦吟』も、それによって周宝、錢鏐の客分に迎えられるのではあるが、それは己が望む道筋とはいささか違う。これから何かできることがあるのか。それを見定めるために婺州にきた。

元来、一つの道筋があった。いまの春琴の歳に、貢挙のための勉強をすでに始めていた。二十七歳で貢挙に落ち、他の道を選び、南山で二度目の受験を決意した。試験の前に黄巢が都にきた。唐の佳き日々だから貢挙が開く前途洋洋たる道筋があった。あれは見果てぬ昔の夢だったのか。

夢が叶わぬのは、このような時代、己一人ではない。むしろ夢を叶えられないのはごく稀な幸運な者だけだ。貫休がその一人で、その脇に座す僧は夢が叶わぬ大多数の一人だ。

敬竜。揚州の妓楼で送別の詩を贈った日本僧。桂児と呼ばれていた銀犁と見送った。敬竜は杭州から船に乗ったのだが、嵐に遭遇して、琉球に流れ着いた。船主はそこで交易の品を仕入れ、行き先を南に転じた。方々の国々を巡ってから広州へと戻り、敬竜は虚しく唐土に帰らねばならなかった。戦乱に追われて各地を転々とし、いまは貫休のもとに身を寄せている。

揚州で会ったときすでに老僧と見えた敬竜は、顔にさらに深い皺が刻まれ、小柄だった体はまるで枯れ木のようにになった。この舟に乗り合わせてから景色に興じる様子もなく黙ったままだ。

その斜め前に蘭がいる。酒の入った瓢箪を手に、一人でぐびりぐびりと呑んでいる。舟の上で話をしているのは、専ら蘭と貫休の二人。

韋荘の後ろで、若い僧が櫓を操る。舟を漕ぐのも修行の一つであるようだ。

「旧くから名の聞こえた方々は、悉く危うくなってきましたな」  
話は俗世ことだ。

「周宝どのもとんだ災難に遭われました」

「常州にもいつまでいられますかな。周宝どのの凋落ぶり、高駢どのはほくそ笑んで見物しておられるようですが、御自身はどうなのでしょうかな」

「天下に身の置き所がなくなることは、お気の毒ながら、お二人とも同じでありますよう」

「唐朝が氣息奄々なものも、お二人の様子を見ればさもありませんな」

「長くいがみ合った末に、破滅の時ばかりは、仲良く御一緒とは」

皮肉なことを言って貫休は笑う。

「他人には破滅への道筋がよく見えても、当の本人ばかりはさっぱり見えぬものなのでしょうな」

「そうでしょうか。愚僧が思いますに、最も難しいのは、在るものを見て、無いものを見ぬこと。そうではありませんか」

貫休は身を揺すり、拳をやおら前へと突き出す。その勢いに皆の視線が集まる。すつと一本の指を立て、天へと衝き上げる。

「この先にあるものを何と御覧になりましょうか」



蘭は髭を捻り、

「どうですかな」

貫休とは逆に、指先を舟底に向け、

「この下にあるのが見えるのなら、上にあるものは自ずと知れますか」

貫休は微笑み、

「上にあるものは上に、下にあるものは下に。さればこそ、下にあるのは上  
にあり、上にあるのは下にあると、おっしゃられるのでありますか」

「そうは言っても、上は上、下は下ですか。在るものは在るが故に在り、  
無いものは無いが故に無い。されば在るものは無いものではないが故に滅び  
はせず、無いものが在るものではないが故に生まれはせぬ。故に無いものは  
滅びては在るものにならざるを得ず、在るものは生まれては無いものになら  
ざるを得ないのでしようかな」

「詰まるところ、在るものは無く、無いものは在るのでしょうか」

貫休は木々の間より漏れくる光に目を細め、

「高駢どのも周宝どのも何を見ておられるのか」

蘭はぐいと酒を飲み、

「酒中に真を得るに如くはなしですか」

「真とは何と言われますか」

「酒から醒めて残るのは、明日の飯をどこで得るかの一事。これぞまこと真に求めるもの。それを窮めれば天下は掌中に得られましょうかな。とするならば、揚州で観衆に笑われていたあの裸男ばかりが、正しく真を見ておったと言うべきですか」

「そう見えますか」

「李克用を不意に殺そうなどは、見るべきものを見ぬ人間にはできませんでしょうから」

「お気の毒なお二人といかほどの差がありましたでしょうか」

「どうですか。いまでもここに強い風が吹きくれば、枝より葉が落ちると、誰もが言います。どの枝よりどの葉が散るのか、それは誰か言えますか

な。その葉を齧っている虫がいて、葉とともに川に落ち、流れに乗って下り、  
さて、その虫には、何故に己がそこにいるのかわかりましようかな。時に賢  
しらな虫が高く首を伸ばし、川べりの草にえいと飛び移れば生き延びられ  
ると知りましよう。朱全忠はその程度でましようかな」

「その川の初めと終わりの全てを知る者がいたところで、水に溺れる虫けら  
と違いはほとんどありませんでましよう。天にも地にも常住するはなく、虫け  
らも大河も同じでありましよう」

「虫けらとしては、たまたましがみついた草を、何ものにも代え難き己が天  
下と思う他はなし。哀れな我らごときは、このちっぽけな唐土にしがみつく  
のですな。いずれは塩漬け肉となつて秦宗権の兵士どもの腹におさまるとわ  
かっています、それを待つだけの詰まらぬ存在ですな」

「それはそれで、いまほど佳き時はなし」

貫休は舟より離れゆく水に目を注ぐ。

「いまに限らぬではありませんかな。いつもいつも同じこと。たまたまい

まを見ればいまのみがありましようが、川は常に流れるのみですからな。春磨塞は秦宗権の妙案で、これぞいまにしかないものと思つても、隋代の終わりには朱粲（しゅ きん）がいきましたな。人の世の常住とはかようなことですか  
な」

隋末の混乱期に、獐猛さで敵を震え上がらせた朱粲はやはり人肉で兵士を養つた。この世で最高の美味は小児の肉を煮たものとは朱粲の言である。

「常住即ち変転。常なるは滅びるしかありません」

「滅びるのも容易ではありませんまい。黄巢が途中で投げ出したので、秦宗権が続けているのでしかなかな」

蘭はくくつと笑い、酒を口に呑む。

二人の問答がどのように噛みあつているのか韋荘には理解できない。

「落ちて底に至ったときに見えるものが、無でもなく有でもないものでありましようか」

貫休は先ほど蘭がしたように指先を下に向ける。

「天の定めるところは奈落の底に落ちるだけですかな。ならばいずれは天上に至りますかな。天は地の夢を、地は天の夢を見るのですかな」

今度は蘭が指を立てて上を指す。ここで貫休は膝を叩き、

「ふと思いついた句があります。お聞きいただけませうか」

身を揺すり、太くゆったりとした声を出す。

千場花下酔　　千場　花下に酔い

一片夢中游　　一片　夢中に遊ぶ。

貫休の声は林へと広がる。

その夢というのに誘われて、不可解な二人の問答を離れ、韋荘は貫休の詩を聞かずに、己の詩を思い起こす。

あれは婺州にくる途中の睦州だった。舟中の泊り。なかなか眠りにつけぬままに夜明けが近づいていた。ようやく掴んだ浅い眠りに、夢を見た。

覚めて後に作った詩。書き留めぬまま放置していた。

睦州江上水門西　　睦州の川のほとり、水門の西より

蕩漿揚帆各解携 帆を揚げ、纜を解いてゆらゆらと進む。

今日天涯夜深坐 遙か地の果てにきた今日の夜に

断腸偏憶阿銀犁 胸を痛めてひとえに思ったのは銀犁のこと。

銀犁の肌のぬくもりが腕に残っていた。

かつて貫休は夢に見るのが真実であると言った。揚州の羅漢像は夢に見たままを描いたもの。では、睦州の夢はいかなる真実を告げるのか。

銀犁はいまも生きているのか。その心が夢に現れたのか。長安で別れてから五年。生きてなお銀犁は苦難の内にあると想像するのは辛い。銀犁を不幸にさせたのは己だ。その己を、銀犁はいまに至るまで想い続けてはくれぬだろう。

己の心が銀犁を夢に見せたのか。ともすると記憶が薄れがちであるのを、己自身が夢で戒めたのか。銀犁を忘れてはならない。『秦婦吟』の秦婦は銀犁その人ではないにしても、半ばは銀犁だ。銀犁のために己はあれから何かをしたのか。銀犁を夢に見てどうしたらよいのか。

嫋嫋も阿枉も彩霞の母も。済んだことは変えられない。せめていまからを思うしかない。

貫休の詩が終わり、これまで黙っていた敬竜が口を開く。

「まこと全ては一片の夢でありました。愚僧は目覚める時を得ぬまま、夢の内に死ぬのでありましょう。唐土に渡ってまいりましたのはいつであつたでしょう。それすらうたたかの夢です。五十年の昔でしようか。五台山に登り、新しい禪を学び、本国に持ち帰ろうと考えておりました。若き志はかようなものでありながら、夢幻となり、いまこの愚僧の心を占めるは望郷の念ばかり。学び得たと思つた教えも消えました。七十を超えた老いの身を、何故にこの世に留めているのか。はかなく消える夢よりもさらに虚しい一生です」

縦皺に刻まれた敬竜の細い顔を韋荘は見る。

己もあと二十年生きるとすれば敬竜の齢に達する。そのとき、虚しい夢のごとき人生であつたと振り返るのか。いますでにして何のためにこの身をここに留めているのかわからない。舟上の楽しみを今日のようにたまたま得ら

ればそれを好しとするのか。

敬竜は深く首を垂れる。体は一層小さくなり、貫休の半分もない。その姿に胸を衝かれ、視線を、櫓を漕ぐ若い僧へと転じる。

舟を出してから、休止することなく動き続けている腕は太くたくましい。波打つ筋肉が汗に濡れて輝く。前方を見据える目は、舟の上でいかなること話されていていようとも、無用な動きを見せない。座禪を組み不動心を得ているかのようだ。

「いまだ初めより夢ならざるはないのでしよう。幾度醒めてもそれもまた夢とするのならば、もとより夢もない。あるいは夢だけがある。夢は在ると見えて無く、無にしてかつ在る。つまりは、心の内にある一寸の珠が見る真実が夢。それが紛うことなき一つの仏性。一寸にして天地を覆うものでありましよう」

貫休は再び太い声で詩を吟じる。

我有徑寸珠　我には一寸の珠がある



別是天地精　　天地の精に他ならぬもの。

己の内にも径寸の珠が具わろうか。それをこの若い僧のように養うのも一つの立派な生き方だ。それは若い僧のものであって己のものではない。己は何を為すのか。

あれこれと思案する先はどこに至るのか、己はもとより知っている。だから、あたかもあてがないかのように考えをふらつかせているのだ。

「この方寸の魂を虚しく異国の地に抱いたまま死ぬ運命を背負って愚僧は生まれてきたのでありましようか。もし初めからそうであるとわかっていたら、日本を離れずにいたでありましよう。我が一生は大きな過ちであったと思うと辛くなります」

己も同じか。貢挙を受けることに多くを費やした。それは過ちであったのか。

貫休は大きな眼を敬竜に向ける。

「敬竜どの、どなたかに相を見ていただいたことがありましようか」

「いえ、そのようなことは」

「では、愚僧が拝見してもよろしかろうか」

敬竜は身を反らし、

「この老いた身、いまさら見ていただきましても」

うなだれて顔を隠す。

「人は真実を夢に見て、命運は自ずと相に現れます。愚僧もたびたび経験しました。錢鏐どのことはいまでは知る人も多くなりましたが、他郷からいらした皆さまもお聞き及びでしょうか」

「杭州に長くなつた俺は少しばかりは聞いていますが、兄貴は知りませんでしょうな」

「よろしければお話し申しませう。かなり以前ことです。杭州の町に、上から小さな役を仰せつかる錢起(せんき)という男がおりました。上からは良く働くと褒められ、下からは男気があると慕われていました。その一族に、塩の密売に加担したり、いかさまな賭博をしたりと、ろくでもないことばか

りして、『あの男とは絶対に付き合ってはならん』と、息子や甥たちに禁じていた無頼漢がおりました。それが若き日の錢鏐どのです。そのころ、予州に一人の術者がいまして、天象を占っていると、牛斗の間に王気があると見えました。その下の土地に何があるのか見極めようと、その方角へ旅するうちに、いつしか杭州に至り、街角に佇んで往來の人を觀察していますと、錢起が小役人ながらもなかなか評判がよいと耳にしました。会いにいつてみますと、確かに貴人の相があることはある。ただ王氣の源と言うには足りない。ならば、子弟の内に王に昇る者がいるのではないかと、錢起に頼んで子息を呼び集めさせました。相を順に見て、これぞと思える者は誰もおりません。たまたま錢鏐どのが、例によって賭博に負けて無一文、錢起に内緒で女主人から錢を借りようとの目論見でやって参りました。折り悪しく錢起が怖い顔で睨みつけたために、一目散に逃げていこうとしました。術者がその後ろ姿を見ると、まぎれもなく王気が漲っている、『あれこそ王になる者です』と叫びました。錢起は『あれはどうにもならないやくざ者です』と笑い飛ばしま

したが、術者は錢鏐どのを追い、『そなたは常の人でない骨法。御自愛されよ』  
と言ひ、術者は王氣の源を知つて満足して杭州を立ち去りました。その後、  
錢鏐どのがお心を改め、黄巢を撃退されたことは皆さまもよく御存知の通り  
です。その術者は特別に上手な人相見と言うほどではなく、錢鏐どのほどの  
相なら、少しでも心得のある者ならたやすくわかります。愚僧も初めてお目  
にかかりました日に、天下に稀な人と即座に了解しました。錢鏐どのだけに  
こつそり耳打ちしたつもりが、いつの間にか、錢鏐どのが天子になると愚僧  
が予言したかのような妙な評判となつてしまいました」

貫休は楽しげに笑う。

「錢鏐どのような非凡な方はさもありなんと思ひもしますが、平々凡々の  
市井の人々にも、それと見るべき相は出るものでしょうかな」

蘭が尋ねる。

「人には径寸の珠があり、その珠に応じた相が自ずと外に現れ出ます。ただ  
見え易きと見え難きがあります。敬竜どのは、どうやら見え易いと、いまし

も拝見しているところです」

貫休は大きな体を前に傾ける。敬竜は、

「愚僧の相など見ていただくのはもったいないことでもあります」

「心持ちお顔を上げていただけましょうか」

貫休に見据えられて敬竜は観念する。

貫休はそのまま目を閉じ、しばし思案し、頭上を覆う木々を見上げて目を開き、

「敬竜どのが師としての礼を受けておられる姿が確かに見えました。弟子になろうとしているのは、恐らくは夷の王でありましょう」

敬竜は額に浮かび出ていた汗を拭う。

「どのような意味でしょうか」

蘭が尋ねる。

「見えましたものを申したまで。それが意味するところは推測するよりありますまい」

「では、俺が推測すればですな、まことに単純、敬竜どのは日本にお帰りになつて、日本の王を弟子にされるのですな」

敬竜はとんでもないという仕草で、

「御覧になつた夷の王はいかなる姿をしていましたでしょうか」

「我が朝の大臣に似て、少々異なるところもありました」

貫休がその姿を得意の絵ではなく言葉によつて描く間に、敬竜は遠くを見やり、

「愚僧が日本を発つてより五十余年、いまはいかなる世でありましようか」

「日本とはいかなる国でありますかな。王の姿と同じく、この唐土と少々は似ておるのでしようかな」

「我が朝は唐に多くを学び、唐より移し持つていったものが多々あります。それでいて唐とは異なります。こう申しますと、お笑いになるでしょうが、

愚僧が思いますに、日本ほど佳いところはありません。若き日はあれほどまで唐土に憧れたのがいまとなつては不思議でなりません。唐土にこなければ

日本がいかにかに佳いかとはわからなかつたのですから、それも仕方ないのでありましょう」

「日本がいかなる国か、俺は少しも知りませんが、たとえ佳き国であつても、善き人もいれば、悪しき人もおるのではありませんかな。敬竜どのがこちらにこられて五十余年、我が朝がかように乱れたのと同様に、日本も昔とは異なる悪しき世の中になつていたりはしませんかな」

「いまの日本の情勢は、稀に出会う同胞よりわずかなことを聞くばかり、具に知るところではありません。それでもただ一つ確かなのは、我が日本の王朝は不易であること。今日まで決して代わらず、これからも代わりません。これは見ずとも断言できます」

「遠い昔からですか」

「こちらの地において三代の世と仰ぎ見られる古の時代、我が朝においては天照大神さまの御子孫が高天原より降り立たれ、以来、子々孫々、その血筋のお方のみが帝になられているのであります。武力を振るい勝手に皇帝を名

乗る者は我が国には一人もおりません。これこそ唐土と大いに異なるところ  
と、愚僧は誇りに思っているであります」

「しかしですな、何事も新たまるには、古きものが滅びねばなりませんまい。

古きものがそのままにあれば、世に新しきものは生まれ出ませんでしょうか」

「古いままではいけないのでしょうか。なぜ変わらねばならぬのでしょうか」

「川の流れと同じですな。新しい水が次々にくるから、川は悠久の昔より遙  
かな未来へと流れ続ける。日々に新たであればこそ永久に続き、古いままで  
あつては滅びるばかりでしょう。唐が二百年続いたと言つても、所詮は川に  
浮かぶあぶく。唐が滅んで新たな王朝が生まれ、その移り変わりこそが、不  
易の川の流れなのですな」

「ではあぶくの上に生きる者はいかなることになるのでありましょうか。そ  
うした人々の不幸は考えずともよろしいのでしょうか」

「唐が滅びつつあるいまに生まれ合わせた人々は不幸ですか」

従弟の挑発するような物言いに、韋荘が言葉を発する。



「唐の全盛のところに生きた者は、いまに比べて、幸福だったとは思わないのかい」

「どうですか。いまの時代の不幸の数と、唐の全盛のころの不幸の数と、幾分か違いがあるとしても、わずかなものではありませんかな」

「そうではあるまい」

「唐の行く末も、その数に少しばかりの増減があるくらいなものでしょう。そのように見えてきてしまえばですな、敬竜どのがおっしゃる、古と変わらぬところにある国なるものを、俺もちと見たくなくなってきましたな。この先あと幾年生きるのかわからぬ齡に俺もなりましたから、先の知れた唐土にいつまでもいるよりは、外を見てから死ぬのも悪い思案とは言えますまい。どうですかな」

蘭は酒の入った瓢箪を下に置き、妙に居すまいを正し、

「兄貴、俺が敬竜どのと日本に渡ると言ったら、兄貴は許してくれましょうかな」

人の意表を衝こうとするのが蘭の癖だ。

「許すも許さぬも、そなたの好きにすればよいことではないかい」

「いやいや、そうもいかぬのですな。虢州の南山での約束がありますからな。

それをまだ果たせぬうちに、兄貴から離れて日本にいく訳にはいきませんでな」

「何の約束かい」

韋荘はとぼける。

「親父どのに楊爺、講くんと、それに仏蕃上人もあのときはおられましたな。それだけの人の前でした約束、いくら俺でも、これは破ることができません。そのときに言いましたな、兄貴が貢挙に受かるまで俺が面倒を見ると。これは必ず果たしませんとな」

蘭が真面目腐って言うのを、韋荘は高らかに笑い、

「何だそのことだったのかい。その約束なら疾うに終わっている。黄巢がきて貢挙がなくなつた。それで終わりだ。長安からここまで生きてこられたのはそなたのお蔭。約束以上のことをしてくれた」

「約束は約束。いつまた兄貴が貢挙を受けると言い出すか知れませんか」  
「それはもうない。唐が滅びるとそなたが言ったばかりではないか。だつたら貢挙はもうない」

「滅びるまでにはなお紆余曲折はありましよう。二百数十年続いたものは滅びるのも容易ではありませんまい。唐の全盛のころには幸福な者が大勢いたと信じる兄貴は、唐朝のために働きたいといまも思っていますよからな」

蘭に言われてみれば、その通りであるかも知れないが、

「人に仕えるのはもう懲り懲りだ。息の詰まる思いは二度としたくない。潤州を去り、杭州からも離れ、ここに住まわせてもらおうとする。たとえ貢挙があつても、五十歳を過ぎたこの身で試験に挑む気力は湧かないし、出仕する気も起こらない」

これも本心である。しかし、舟の上の思索は当然の落ち着き場所に達しつつある。

生まれたときにすでに貢挙を受けて唐の官人になると運命づけられていた。

その他のことでは、己の一生を納得できる形にはできない。いつか貢挙があるのなら、それを受け、いかに傾こうとも唐のために働きたい。ただし、いまそのように思い定めるのはまだためらいがある。

「まことですかな」

従弟の問に、

「私の残された仕事は、ここ婺州において唐代の記録を整理して後世に残すことが一つ。それと、錢鏐どにお仕えして、杭州の人々のために何か役に立つことをする。その二つだ」

「それでよいのですかな」

「錢鏐どのに王の相がおりなら、唐の次にくるであろう新しい世に向けて、私は働けることになろうか。この美しく温暖な婺州において、貫休どのお蔭を蒙って穏やかに暮らせる幸運に恵まれていながら、どうしてあるかどうかもわからぬ貢挙のことなど考えたりしようか」

「確かにそうなのですかな」

「で、出発はいつになるのかい」

納得しない表情の従弟に言う。

「そうですねあ、杭州に帰るのは、三、四日先でしようかな」

「敬竜どのと日本に向かうのはいつごろになるのかと尋ねたのだ」

韋荘は笑う。

「それは、しかと決めた訳ではまだありませんからな」

「逡巡するのかい。敬竜どのの前で言っておきながら、いまさら引つ込めたりはできない」

「敬竜どののお気持ちもありましようからな」

敬竜は困ったような顔でうつむく。

貫休は掌で舟縁を叩き、

「佳きかな、佳きかな」

「佳いのですかな」

蘭は首をかしげ、ゆっくりと袖をたくし上げて腕を風にかざし、

「この風はどこに向かっていますかな。日本へと吹いているのなら、このまま風任せ、この舟で海を渡ってみるのも愉快でありましょうかな」

「では、佳き船出を前に、雀蛤先生の相を見て進ぜましょうか」

蘭は両の手で顔を覆い、

「それは御勘弁願います。出たとこ勝負の風任せがこの雀蛤の信条。初めから先がわかってしまつては楽しみがありません。同じ見てくださるのなら、もう一度、兄貴の方をお願いしたいものですな。試験に挑む気はないと兄貴は言いましたが、俺にはまだ疑わしく思われておりますのでな」

「御希望とあればそういたしましょうか」

目を向けてくる貫休に、

「生きるのも残りわずかなこの身、ここ婺州が終着点であるのは明らかであります。いまさら見ていただきましても何もありませんでしょう」

かつて汴州の相国寺で貫休には相を見られた。そのときは胡散臭く感じたものだ。案外その印象が正しかったのかも知れない。そうなら、見られたと

「ここで困ることはない。

蘭のように顔を隠さずにいると、貫休は、

「ふっふっ」

笑うような息を吐き、

「改めて拝見するまでもありません。初めてお会いしたときと少しも変わりません」

「俺の記憶が間違いなければ、兄貴は立派な官人になると、そうおっしゃいました」

「その通りです」

「あのときの酸餡の味が懐かしく思い出されますな」

「山と積まれた酸餡を瞬く間に平らげてしまわれて」

貫休は巨体を揺らして笑う。

韋荘は大きく膝を叩き、

「これで得心がいきました」

「兄貴、何がわかったのですかな」

韋荘は貫休に一礼し、

「相国寺で伺いました折には、もう二度と貢奉は受けない考えでおりましたから、私が官人になることなどあり得ないと、失礼ながら、大禪師さまの予言は当たらぬと思いました。改めて考え直しますと、それはまことに狭い見でありました。私が官人になるのは、他ならぬ大禪師さまのお導きによるとは、考え及ぶものではありませんでした。こうして婺州に住まいを得させていただきまして、錢鏐どのがさらに高い御身分となれば、某にも何らかの官職をお授けくださるときがくるのでありましょう。我が相に現れていたことがいよいよ実現するときが至ったのです。かつて御慧眼を疑いましたこと、深くお詫び申し上げます」

貫休は再び舟縁を叩いて、

「佳きかな、佳きかな」

「そういうことなのですか」



蘭は腕組みをする。

己が官人になることがあるとしても、錢鏐のもとではなく、唐の皇帝のもとでなければならぬ。

その思いを従弟に知られまいと、船尾の方へと顔を向ける。

舟を漕ぐ若い僧に迷いはないのか。仏門に入り、世の有為転変とは別のところに真の生き方を見出しつつあるのか。己は俗世に惑い、悔い多きままに死に至るのか。己の人生にも貫くものがあつたと、我が身に得心がいき、人にもしかと示せるようなことがあるとすれば、一つのことしかかない。生まれ最初決まっていたことだ。貢挙を受け、唐の官人となり、お上のため、民のために働くことだ。銀犁を夢に見たのは、そのように思い定めるためであろうか。

舟は静かに林から抜け出る。舳先に座る貫休から順に明るい日差しを浴びるようになる。長く連なる塀と、立派な門構えが見える。羅漢寺の裏門だ。大きな樗の木が並び、淡い紫の雲のような花が咲く。舟に乗る前にその花を

見た。ひと巡りして元に戻ったのだ。

門の前に二人の男がいる。弟の藹と、その隣の僧は孫何だ。揚州の町で、足の指に筆を挟んで画を描いていた少年、いまは隻念（せきねん）という。

舟が止まる。

貫休は若い僧の手を借りて、大きな体を舟から陸へと移す。

「弟子に助けてもわらねば、愚僧は一人では舟から上がることもできません。弟子たちに生かされておる身です」

楽しそうに笑う。

蘭はひらりと跳び出て、

「乞食から皇帝に至るまで、誰一人として人によって生かされぬ者はありません。とりわけ俺のような商人は、人さまがいるお蔭で儲けがある」

蘭は老いた敬童を引き上げ、最後に韋荘が陸に上がる。

隻念が歩み寄ってきて会釈する。

「婺州はまことすばらしいところですね。ここでの日々、さぞ楽しいのです」

よう」

隻念は、

「楽しいと申しては勿体ない。楽しいと思わぬのは、さらに勿体なさ過ぎましよう。好きなだけ画を描いていられるのですから」

貫休は門へと歩み、

「隻念がその楽しみを得たのは手を失ったからです。両の手が備わっていたならば、この隻念はここにはおりませんまい」

「そうなのでしようかな。大禅師さまのお導きで、隻念さんの画はいよいよもって妙処に至ろうとされていきますな。大禅師さまを超えてしまわれるのではないですか」

「とんでもありません。まだまだ修行が足りません」

「隻念は恥ずかしげに言う。

「佳きかな、佳きかな」

貫休は韋藹の礼を受けて門の内に入る。

隻念も変わらなければ弟も変わらない。廢墟となった莊園で再会したときも、ここに立っているときも、弟は同じだ。人に愚鈍と見られるからこそこのうなのだろうか。幼かったころからずっと同じように兄を見てくれている、これほどに有難いことはない。その弟に、兄である己は何をしたのか。二十七歳のとき、あの合歡の木の下で待っていてくれた弟を喜ばせてやりたかった。「合格したよ」といつか弟に言いたい。

弟と並んで門の内へと入る。

当面はこの婺州で貫休の世話になる。懐かしいと感じるここで、しばしの間ばかりは穏やかな暮らしができようか。それに慣れてしまつてはいけけない。来るべき日に備え、堅固な心を養つていかねばなるまい。

**大順元**（八九〇）年六月。四代の祖、韋応物に所縁の地、蘇州。

ここを訪れるのは二度目。前回は三年余り前、潤州から杭州に移る途中、

わずか一晩だけの滞在だった。今回は、二、三日の余裕がある。

「あのあたりであったと伝え聞いております」

老僧は、竹林が後方に控える小高い場所を指差す。韋応物が最晩年を過ごした精舎がそこにあつたと言う。

叔父の韜がこの永定寺を訪ねたときにも、案内に立ったと、老僧は懐かしがる。そのころはこの僧の腰も真直ぐに伸びていただろうか。十一年の昔だ。

精舎の跡地は菊の花畠。茎が高く伸びた間の細い道をたどり、最も見晴らしのよい場所に立つ。振り返ると、小川の向こうに田圃が広がり、吹きくる軟らかい風に稲の花の香りが乗る。

「ここで詩を吟じられました」

老僧は叔父のしたことを語る。

清晨止亭下 清らかな朝に軒の下に座し

独愛此幽篁 ただ一人、このかそけき竹林を愛す。

韋応物が永定寺の精舎で詠んだよく知られる詩だ。老僧の声はしわがれて

叔父とは似ても似つかぬが、それでもそこに叔父の声が宿るかのようだ。韋応物が立ち、韜も立ったのがこの同じ場所であると思うと、自ずと感慨も深い。

韋応物は蘇州知事を最後に官界から退き、故郷の長安南郊の杜陵に帰るとなく、永定寺の精舎に住まいを定めた。世を去ったのは五十代半ば、ほぼ百年前である。

菊畠から竹林の脇へと歩み、韋応物も聞き、叔父の韜も聞いたであろう、竹の擦れ合う音を耳にする。

老僧は別の詩を吟じて聞かせてくれる。

政拙忻罷守　　政治に拙く、太守を辞められるのは嬉しいが

閑居初理生　　閑居の身となれば、暮らし向きも考える。

家貧何由往　　家が貧しく、帰還は叶わない

夢想在京城　　都のあたりは夢に見るしかない。

野寺霜露月　　月の光が白く注ぐ野の寺で

農興羈旅情

田園の風光に旅情が募りくる。

聊租二頃田

広くもない田を手にし

方課子弟耕

若い者たちには農耕を課そう。

目暗文字廢

ひまなこの身は、目が衰え文字を読めぬから

身閑道心精

仏道に心を尽くすよりないだろう。

即与人群遠

人々が群れるところより遠くにいても

豈謂是非嬰

纏わりつくものがないとは言えないものだ。

老僧は余程、韋応物に傾倒しているのか、韋荘でさえほとんど記憶にない詩を淀みなく吟じる。

韋応物が蘇州知事を辞めたのはいまの韋荘とほぼ同じ年齢で、その頃の詩だ。すでに人生の終わりを強く意識していたようだ。

先祖の詩を心の内に繰り返しつつ竹林から菊畠に戻ると、

「いましばらくこのあたりを歩いてから戻ろうと思います」

老僧を先に帰す。後に残るは楊胆と二人。その楊胆を菊畠に残して、もう

一度竹林の縁を巡る。

独愛此幽篁　ただ一人、このかそけき竹林を愛す。

先祖と同じく一人で竹の音を聞く。叔父ならば、竹林を愛する心を先祖と一つにできたであろう。己はいま二人とは遠いところにいる。

三年前、蘇州に一晩しかいなかったのは、潤州から少しでも早く遠くにいきたくもあり、先祖に恥じ入る気持ちも強かったからだ。そのときと今とで何が違うのか。

竹林の縁まで達し、三年の間の日々を顧み、菊畑の間を縫って、元へと戻る。

「菊の蕾は大きくなってきているかい」

しゃがんで菊に見入っている楊胆に声をかける。

こちらから話しかけない限り、胆が自分から口をきくことはない。婺州の外に出るときには必ず胆を連れる。楊爺と同じとまではいえないが、近くに来てくれると安心できる。



胆は立ち上がって軽く頭を下げ、

「開くのはまだ先のようにでございますが、なかなかみごとに育ってきております」

「どのような花が咲くだろうか」

「お嬢さまがお作りになつてゐるのは少々違つようです」

お嬢さまとは藹の娘の淑娥。婺州でも花作りに熱中している。温暖な氣候のせいで真冬でも何かしら花がある。

「ここの菊の種でも持つて帰つてやれたら、あれは喜ぶだろうな」

「左様でございますよう」

淑娥は今年で十六歳。號州にいれば、莊園の立派なお嬢さま、縁談が幾つもくるころだろう。それがよいかどうか、樂しげに土にまみれてゐる淑娥を見るとわからない。羅漢寺には花や薬草を育てる術に長けた僧がいる。淑娥に代わつて胆がしばしば羅漢寺に教えを請いにいき、それでいまでは胆も花に詳しい。

婺州での生活は、號州の莊園を出てから後では最良と言えよう。このまま婺州にいるのがよいのか。韋応物は蘇州に留まったが、己は婺州に居続けるものではないだろう。韋応物と異なることをするのが、先祖に恥じずにすむ唯一の道だ。

「ここ一面に菊が開いたならばさぞみごとであろうな」

「へい、見たいものでございます」

「この風光を、我が祖、応物はどのように見ていたのだろうか。俗世から離れ、超然と自然を愛し、澄んだ心でおられたのだろうか。そうでもあったろうが、常にそうであったのでもあるまい。さきほど吟じてくださった詩だ。そなたはあれを聞いてどのように思ったかい」

胆は首を縮め、

「あつしには難しいことはわかりません」

ぼそりと言う。

楊爺ならばここで何かしら言ってくるだろう。胆は無口で楊爺のように

いかない。だから、話はいつもすぐに途切れてしまう。今日ばかりはもう少し話してみたい。

「叔父上は、ここの風光をどのように御覧になったのだろうか。念願であった応物に縁の地にこられて、満足だったのだろうか。それとも違う思いがあったのだろうか。そなた、叔父上のことを覚えているかい」

「もちろんでございます」

胆の答えは素っ気ない。

「叔父上をどう思っていたかい」

「へえ。どうなのでしょう、あれほど気高いお方には他にはおられませんでしょう」

世辞など言わぬ胆だ、本当にそう思っていたのだろうか。

「その通りだ。叔父上ほどの方はいなかった。叔父上は応物の詩をこよなく愛した。応物の心をよく知っていた。それだけに自身の及ばぬこともよく御存知であっただろう。悲しいかな、この私は叔父上に遠く及ばず、まして応

物は遥かに遠い。だから、子孫としてここに立つのは辛い。私は、気高き叔父上と異なる生き方を選んだ。叔父上は、莊園の誰もがその本来の生を全うすることを望んでおられた。私は叔父上のやり方をすっかり変えた。それは叔父上に反するだけでなく、応物にも反するものだった。先ほどの詩を聞いてそれがよくわかった」

胆は斜めにうなだれて聞いている。莊園で傷を負ってから、胆にとってはそれが自然な姿勢である。

静かに先ほどの詩を吟じる。

家貧何由往　家が貧しく、帰還は叶わない

夢想在京城　都のあたりは夢に見るしかない。

「応物は杜陵に帰らなかつた。それは本当に貧しかったからでもなく、故郷を忘れたからでもない。故郷のこと、一族のことを常に気にかけていた。だからこそ、夢に見た」

聊租二頃田　広くもない田を手にし

方課子弟耕 若い者たちには農耕を課そう。

「蘇州の太守にまでなつた人が故郷に帰れぬほど貧しいはずがない。事実、我等子孫に応物は多くのものを残してくれた。私が生まれたときには、我が一族は家を長安に構えていたし、虢州の他にも二つの莊園があつた。応物は故郷の一族に資産を残してくれた一方で、自身は、二頃ばかりの田を蘇州に買つて慎ましい晩年を送つた。田を耕して生きるよう子孫に教えた。応物は若いときに安祿山の反乱に遭遇して発奮し、勉学に励み、お上のために尽くす官人となつた。官界においては必ずしも志を果たせなかつた。『政に拙く』と詩に歌つたのは、応物自身が拙かつたのではなく、世と相容れぬところがあつたのだらう。子孫に同じ道を歩めとは言わず、田に生きよと教えた。我が一族は、応物の教えを守らず、財産のあるのを良いことに奢つた暮らしをし、三代のうちに家運を傾けさせた。失つたものを取り戻そうと、貢筆及第者を出すことを一族の悲願とした。まこと応物の教えにもとめることではなかつたか。叔父上は応物の心を知り、また一族のそれぞれの思いも知つて、全

てを自ずからなる調和へと導こうとされていた。理想は気高かったが、現実  
は違った。だから、私は叔父上のやり方を根底から改めた。それはいいよ  
応物の思いから離れるものであった」

胆はじつと動かない。

「そなた、夢に莊園を見たりするかい」

「たまにはございます」

ぼそりと答える。

「そうかい。どのようなことを見るのかい」

「お祭でしょうか」

「お祭か。最初にそなたが號州の莊園にきたのは、確かお祭のときではなかつたかい。婿入りしていく道すがら、蘭くんに連れてこられたのだろう」

「左様でございます」

「あれはまだ祭を始めてさほど回を重ねていないころだったろう。私の新しいやり方は上辺ばかりは成功したが、人々の心はかえって荒んでしまった。

楊爺が始めてくれたお祭が莊園を救った」

「好いお祭でございました」

「叔母上も慈母のようになられた。あのお祭が途絶えてもう何年になるのか。春琴は一度だってお祭を見ていなかったのだろう」

「へい」

楊爺が始めたお祭を春琴は見えない。楊爺が春琴に命を吹き込み、その楊爺が最も大切にしていたお狐さまのお祭を見えない。春琴が痛ましまでに愛おしくなる。楊爺のために春琴を大事にしなければならない。

春琴は十一歳。彩霞に言われてから、男の楊絃として生きようとしている。このごろはいつも外で武術の稽古だ。体中真黒に日焼けし、どこから見ても男児だ。腕はたくましく太くなり、動作は荒々しく、声も低く太く出そうとしている。ただ顔立ちは優しく、そこは本来は娘だ。男になろうと懸命に努める姿は悲しいばかりに可愛く見える。

彩霞が同じ十一歳のころ、彩霞の母とはすでに不仲で、母と彩霞と純の三

人は、莊園の隅で身を隠すようにして暮らしていた。彩霞に父親としての愛情を注ぐことはなかった。だからなのか、彩霞が娘のように慈しむ春琴には何とも言えぬ感情を抱く。春琴に尊敬されるような生き方をせねばならぬとの思いが強まる。

「あのお祭の賑わいが狐潭にいつか甦ると思うかい」

胆はうなだれ、

「あれは父と兄が」

そのつもりではなかったのだが、胆の痛みに触れてしまった。韋荘は急いで、

「あれは私の誤りだ。銀や肋のせいではない」

洛陽で父と兄と斬り合ってから、胆は同じ思いを抱き続けている。それを除けてやりたいと、いつも思って、こうして二人での旅もしている。胆は春琴の父親。春琴のためにも胆の心を楽にしてやりたい。

顔をしかめたままの胆に、



「叔父上のなさり方を変えてしまった私がそもそもいけなかったのだ。蘭くんとの旅から帰り、漢の終わりに生きた田疇を理想として、どのように世が乱れようとも、我が莊園ばかりは安心して暮らせる場所にしようと考えた。

その思いは悪くはなかったのだろうが、実際にやったのは田疇とは程遠いものだった。莊園の人々を押さえつけるために、伍武の爺さんや愠を杖で滅多撃ちにした。そこから莊園は滅び始めたのだ。楊爺が始めてくれたお祭でよくなった時期もあったが、私には見えていないものがたくさんあった」

ここで微かに笑い、

「また同じことを言ってしまった。もうよそう。大事なものはこれからだ。ここで先祖や叔父上の心に触れた。それでこれからどうするのがよいのか。そなたはどう考えるかい」

胆は腰を屈めて首を振り、

「あつしにはわかりません。ここにるのが伯父ならば何か申せるのでしようが」

楊爺に及ばないのを重荷としているのも胆の常だ。

「ならば聞こう。そなたが夢に見るお祭を復活させたいとは思わないかい」

「そのようなことができましようか」

「努めればできるかも知れぬ」

「そうでございましょうか」

「以前のやり方ではいけない」

「どのようにするのでございましょう」

「実はな、まだわかつてはいないのだ。そなたも考えてくれないかい」

「あつしなどには」

「お祭を春琴に見せてやりたいと思わないかい」

「へえ」

「春琴は楊爺の生まれ変わりだと言う。春琴のためにするのは楊爺のためにするのと同じだ。楊爺に少しは恩返しをしたい。お祭を復活させれば楊爺も喜んでくれるだろう」

「それは間違いありません」

「田疇の理想をそのままに貫ければ、応物も叔父上も喜んでくださるだろう」  
二十七歳で貢挙に落ちて莊園に帰った日に、叔父は韋応物の詩を誦じてくれた。韋応物に所縁の地に立ち、ここでその日に戻るのが正しいのだろう。

婺州に着いて間もなくのころに、舟で兆したことが、ここで確かな心として定まろうとしている。

お祭を復活させる道筋は一つだけある。貢挙だ。貢挙に受かって唐の官人になり、唐の再興に努める。平和な世が戻れば、虢州の莊園も自ずと復活し、狐潭のお祭も行えるようになる。かつては失われた財産を取り戻そうと、一族の邪まな願望のために貢挙を受けた。それでは落ちて当然だ。

己の思いがここに定まるのか、心の内で問答を繰り返しつつ菊畠の道を下り、そのまま小川にかかる橋を半ばまで渡る。

振り向くと胆がない。まだ菊畠にいるのか。引き返していくと、丈高く伸びた菊の中で胆は膝を抱えてしゃがみ込んでいる。

「また始まってしまったのかい」

「へい、そのようでございます」

苦しげな声で答える。

婺州にきて初めての夏に胆は大病を患った。貫休が薬を分けてくれ、今回死なずにすめば、今後また熱が出ても死ぬことはないと言った。以来、時折発作を起こし、高熱が数日間続く。

「寺で休ませてもらおう」

韋荘は胆の体を抱える。火のように熱い。

いつも通りなら命の心配はいらぬが、動けるようになるまでには早くても五日はかかるだろう。

「申し訳ありません。こんな体になってしまいました」

胆は遠慮がちに韋荘の肩を借りる。

菊畠の道を下りながら、蘇州からは一人でいこうかと考える。胆がいなくてもどうにかなるだろう。次の行き先は金陵だ。前にいったことがあるし、

このあたりも落ち着いてきている。一人でいけば約束の日に間に合う。

金陵で崔胤に会う。洛陽で世話になった元の宰相の息子だ。この前金陵にいったときには崔胤は不在で、手紙を残した。一年ほど経てから婺州に返事がきた。七月の初めまで金陵に滞在しているからきてくれないかと言う。それで今回の旅の中に金陵に寄ることを組み入れた。旅の目的はいつも通り、多くは錢鏐のために、少しばかりが己個人のためだ。地方の名族を訪ね、あるいは中央からの流寓者に会い、時に地方に埋もれ戦乱で失われてしまう恐れのある書物を集める。錢鏐の名を高めつつ、いつしか都に帰還する時に備えて知人を増やすのだ。

蘇州にくる前に杭州で錢鏐に会い、その意を受けて、訪ねるべき相手を決めた。蘭は杭州から出ていた。店はよく繁盛し、敬童を日本へ連れていく準備も進んでいると、范完と伍伝が言っていた。范完、伍伝の二人は揚州の店から移っていた。揚州も破壊されたからだ。

貫休の辛辣な予言通りに、揚州の高駢と潤州の周宝はほぼ同時に破滅し、

高駢の方がより哀れであった。

長江以北において揚州の豊かさは際立っていた。人肉を重要な食糧源とする秦宗権が揚州に狙いをつけたのは必然の成り行きだった。押し寄せる秦宗権に対し、高駢は、畢師鐸（ひつしたく）という將軍に迎え撃つよう命じた。揚州の実権は高駢の手にはなく、側用人の呂用之が握っていた。畢師鐸と呂用之は仲が悪く、畢師鐸は兵士を率いて揚州を出ると、獐猛な秦宗権を破るよりは呂用之を殺す方がきつと容易であろうと考えた。揚州の富を餌に、周圜の諸勢力を誘い、揚州城を取り囲んだ。呂用之は揚州城をこっそり抜け出て、楊行密（ようこうみつ）という者のところに逃げ込んだ。

畢師鐸は揚州に入り、餌で釣った者たちと大々的な略奪を行った。一方で、揚州に向かっていた秦宗権は、朱全忠との戦いが厳しい情勢になり、揚州まで手が出せなくなつて引き上げた。呂用之を保護した楊行密は、高駢救出を名目に、揚州へと軍を進めた。畢師鐸は包囲され、方々から寄せ集めの混成軍は窮地に陥り、妖しい尼が「高貴な人を生贄にすればこの災厄から逃れら

れましよう」と言ったのを信じて高駢を殺害した。しかし期待に反して戦況は悪化し、人を掠めて市に並べ、羊や豚のように割いて肉を商うありさまとなり、ついには城を放棄して逃げ出すしかなかった。楊行密が揚州に入ると、中はまことに惨憺たる状況で、数百の家しか残っていなかった。

そこに孫儒がやってきた。洛陽を廢墟にした男だ。孫儒は秦宗権の手下であつたが、秦宗権が朱全忠との戦いで苦境にあるのを見て、揚州を奪つて自立しようと企んだ。楊行密は孫儒を迎え撃つ前に、揚州の人々が呂用之を忌み嫌うのを見て、これを抱えていたのでは人心を繋ぎ留められないと殺した。

同じころに、潤州を追い出されてから各地を転々としていた周宝は杭州に逃げ込み、間もなく死んだ。錢鏐が殺したのではないかと噂されましたが、貫休も蘭も根も葉もない話と一笑に付した。それから一ヶ月後の文徳元（八八〇年正月、錢鏐は潤州へと兵を進め、反乱の首謀者であつた薛朗を切り、その心臓を周宝の墓に捧げた。

その三ヶ月後、楊行密は孫儒に敗れ、揚州を追われた。かくして揚州から

南の地は、孫儒、楊行密、錢鏐の三者が争うところとなり、蘇州はいまのところ錢鏐の配下にあつて、韋莊は安心して旅ができていゝのである。

それでも一人切りで金陵にいかうと言ひ出せば、楊胆は高熱を押しでも同行しようとするだろう。胆に悪いが、ここは方便で、近くを一日ばかり回るふりをして、黙つて金陵にいつてしまふのがよいだろう。

永定寺の門をくぐりながら、そのように考える。

**川**向こうの家並みの上、薄い雲に光をにじませつつ、赤く大きな夕日が落ちていく。柳の枝をわずかに揺らす風が頬に当たる。顔が上氣しているのは呑んだ酒のせいでもあり、いささか興奮したためでもある。

湾曲して流れる秦淮河の川べりの道。妓楼や酒店が軒を連ねる地区を離れ、朱雀橋近傍の商家の集まる繁華な場所を抜けてきた。次第に人家がまばらになる。あたりが夕暮れに沈む前に、この先の知人の家に帰り着こうと心持ち



急いできた。しかし、去来する思いのため、足どりは重くなりつつある。

やはり暗くなるまでにと、舟から荷を上げる男たちの掛け声も、いかにも急いで聞こえる。川に点々と泊まる舟からは、炊事の煙が細く立ち昇り始めている。斜めに射しくる淡い日の光の中を行き来する燕もまた動きがせわしない。

自ずと思い起こされるのは一篇の詩。

朱雀橋辺野草花 朱雀橋のあたりの野の草花

烏衣巷口夕陽斜 烏衣巷のほとりに夕陽が斜めになる。

旧時王謝堂前燕 昔は王氏や謝氏の邸宅をねぐらとしていた燕が

飛入尋常百姓家 いまではありきたりの民の家へと飛んで入る。

百年ほど前に劉禹錫(りゅう うしやく)がここ金陵の秦淮河で詠んだ詩。それと同じ光景の内にいま身を置いている。

続けて、自身の詩を口ずさむ。

誰謂傷心画不成 傷ついた心で画は描けないと誰が言ったのか

画人心逐世人情

画人の心は世間の人と異なる。

君看六幅南朝事

君よ見たまえ、南朝のありさまを描いたこの六幅の

画を

老木寒雲滿故城

古い城にあるのは老木と寒雲ばかりだ。

この前金陵にきたときに人に頼まれて画に添えた詩だ。時の変遷を思えば、金陵のここに立って、心を痛めぬ者はいない。ましていまのこの時期に。

金陵は地方の中小都市に転落して久しいが、画人や詩人の心を揺さぶる古の都である。七〇〇年近い昔に漢が滅び、魏、呉、蜀が対立する三國志の時代、江南の地を占めた呉は長江を臨む高台の地に都を置いた。それが金陵の始まりである。その後、晋が全国統一を果たしたのは東の間のこと、諸民族の侵入を受けて、晋は中国の北半分を失った。以来、北と南に二つの王朝が対峙する時代が二七〇年間続いた。南朝は、晋から宋、齊、梁、陳と皇統は変っていくものの、都は金陵にあり続けた。南朝の政治と文化の担い手は貴族で、その最も高貴な家が、劉禹錫の詩に詠まれる王氏と謝氏だった。

王氏、謝氏の豪華な邸宅に巢を作っていたであろう燕も、いまでは庶民の家に出入りしていると、劉禹錫は王朝の興亡に思いを馳せた。韋莊が詩を添えた画には、寒雲の下に老木ばかりが立つ金陵の姿が寂しく描かれていた。

ここに立って目は燕を追い、耳には劉禹錫の詩は響き、心には六幅の画が浮かぶ。劉禹錫は唐の盛時にあつて滅び去った南朝を偲んだ。六幅の画を描いた人は、劉禹錫と同じ思いではあるまい。偲ぶべきは過去の南朝ではなく、いまは早くも唐朝がそうなりつつある。

金陵が繁栄を極めたのは梁の武帝の時代だった。武帝は文武に優れ、その治世は五十年の長きにわたった。南朝四百八十寺と杜牧とぼくの詩に歌われたように、仏教に傾倒した武帝によって、金陵には多数の仏寺が建てられた。その栄華の絶頂期に、一人の無頼漢が北朝から流れてきて、金陵を目茶目茶にした。侯景(こうけい)という男。侯景が率いてきたのはたったの千人。それがほとんど無抵抗のまま都に入り、皇帝の住まいである宮城を包囲した。市民約十万と、兵士約二万が宮城に籠った。攻防戦は五ヶ月間続き、都は廢

墟と化し、宮城は死骸で埋まった。

侯景が都に攻め上つてきたときに、最も南の朱雀門を守っていたのは庾信（ゆしん）、後に南朝を代表する大詩人として歴史に名を残す人物である。このときは二十四歳、皇太子の命を受けて守備隊の指揮を執っていた。

朱雀門はいま通り過ぎたばかりのところにあつた。門の前を流れる秦淮河に、当時は船を運ねた浮橋が渡されていた。太子は侯景軍の出足を挫くべく、浮橋を流すよう庾信に命じた。庾信がようやく一艘の船を除いたところで、川の向こうに、真黒い鉄面を被つて馬に跨る敵の姿が現れた。庾信は恐れおののき、門の内に隠れた。まずは腹こしらえと、甘蔗を手にした。矢が飛び、門柱に当たつた。甘蔗がぼろりと落ちた。庾信は守備兵を置いて逃げた。侯景は船をつなぎ直して橋を渡り、悠々と朱雀門より入城した。

侯景の軍の皆鉄面を著（こ）けるを見て、退いて門に隠れる。

庾信はまさに甘蔗を食らわんとして、飛箭ありて門に中（あた）る。

信の手なる甘蔗は弦に応じて落ちる。

遂に軍を捨てて走る。

庾信の無様な姿を描く史書の一節を読み、南朝の文人の不甲斐なさに慨嘆したことがある。その庾信に比べて己はいかほどか。黄巢が長安に入城したとき、幸いにも、門を守る役目にはなかったので、史書の記録されるような失態はせずにすんだ。さっさと逃げたのは唐の皇帝で、宮城を巡っての悲惨な攻防戦は起こらずにすんだ。

庾信は後に立派な詩を残し、だからこそこのときのこととも歴史に残った。己の『秦婦吟』もあるいは後世に伝えられるのか。その作者である己の行状はどのように記録されることになるのか。庾信と同じにはなりたくない。

だから、今日まで誰にも言っていないことが口にした。言うつもりではなかったのだが、先ほど、口をついて出てしまった。

「私も遠からず貢奉を受けようと決意しておりました」

崔胤と東呉くんがそこにいた。東呉くんは大いに喜び、崔胤は膝を打って感嘆した。東呉くんとは、長安を脱出してから八年ぶりの再会だった。それ

で興奮したのだろう。

蘇州に楊胆を残して一人で金陵にきた。崔胤の屋敷を訪ねるとその日は不在。次の日、使いがきて、秦淮河のほとりの酒家にくるようにと言った。指定された日時が今日の昼、少し早くに店に着いて待っていると、崔胤が東呉くんを伴って現れた。

血気盛んな青年だった東呉くんも、顔に皺が刻まれる年齢になっていた。互いにしばらくは声も出せなかった。長安城の壁の下を潜ってから生死を知らずにいた。

「驚かせ申そうと巧んだのですが、いかがでしたか」

崔胤は笑った。

驚くというようなものではなかった。

いよいよ沈む夕陽の最後の光が、水の上で橙色に揺れる。いま振り返ってみて、今日、東呉くんに会ったのが訝しく思えもする。最もあり得そうにないことだった。

東呉くと西周くんは長安を脱出すると、皇帝のいる成都を目指した。西周くんが不運に襲われた。長安での困苦を耐え切ったのに、詰まらぬ盗賊のために殺された。東呉くんは命拾いし、友人を路傍に葬った。かつて聞いていた西周くんの故郷、遙か西方の甘泉へと、友人の死を伝える旅に上った。艱難辛苦の果てに村に辿り着き、西周くんの遺品を親族に渡し、それより東に引き返し、あたかも沙陀族の李克用が長安から黄巢を追い出したのに従って長安に帰り着いた。都の荒廃ぶりは驚くばかり、東呉くんは乞食同然の暮らしをしつつ皇帝の帰還を待った。耐え難い日々末に皇帝は戻ってきた。朝廷は相変わらず「お父ちゃん」の田令孜に牛耳られ、東呉くんが望む貢奉は再開されなかった。そうこうするうちに、田令孜と王重榮の対立から皇帝は長安を脱出し、代わって入ってきた李克用によって都はまたも灰燼に帰した。東呉くんの心もここでついに折れ、故郷へと帰った。

東呉くんの家は宣州。金陵から南にほど遠からぬ地である。唐の時代になつてから宣州は金陵よりも発展した。財が蓄積された町は当然のこととして

争奪的となる。東呉くんが帰ってきたとき、宣州の主は秦彦（しんげん）という男だった。呂用之と仲の悪かった畢師鐸が、揚州の富を餌に誘いをかけた連中で最も力があつたのが秦彦だった。秦彦は揚州に入つて略奪、虐殺を恣にして欲望を大いに満たしたものの、楊行密に包囲され、最後は殺された。その間に宣州は別の者の手の内に落ちた。せつかく揚州に入った楊行密も孫儒のために追い出され、行き場を求めて宣州を襲つた。宣州を囲むことほぼ一年、ここでも人が人を食う有様となつて落城。楊行密が宣州の主になった。昨年の夏のことだ。

宣州が攻囲されていた間、東呉くんは親類とともに山中に逃がれ、楊行密が入つて落ち着き出してから町に帰つた。楊行密の幕下に徐温（じょ おん）というなかなか優れた人物がいて、東呉くんの親類の一人がその下に仕えた。東呉くんも推挙されて徐温に招かれたが、あくまでも唐の皇帝に直接仕えることを望み、都に出る機会をうかがいつつ、各地の名族を訪ね歩き、崔胤と出会つて意気投合し、この春からは金陵の屋敷に住まうようになっていたの



だった。

東呉くんが昔と変わったのは年を重ねただけだ。一方の崔胤の印象は大きく異なった。洛陽で会ったのは破壊し尽くされた莊園から出てきたばかり、大邸宅を構える崔胤に対して気後れがあったのは否めない。それで弱みを握られるのではないかと疑念を抱いたのだろう。相変わらず目つきは鋭いが、崔胤に対して妙な警戒が必要だとは感じなかった。東呉くんと崔胤はよき友人のように見えた。

東呉くんと別れての八年間の歳月を埋め合つて一息ついたところで、崔胤と共に再会を喜び合う盃を交わした。三人の話は、天下の耳目を集める官軍の動きに及んだ。

「韋秀才どのは交友関係が広くおありだったでしょうから、長安にいらしたときに、張濬（ちよう しゅん）どのともお会いになりましたでしょうか。張濬どのは、あのころからかなり名が知られていましたでしょう」

崔胤が言った。張濬は現在の宰相の一人で、宰相自ら大軍を率いて李克用

の本拠地、晋陽に攻め下ると宣言し、天下は大騒ぎになっている。

「お名前はほのかに伺っていたように記憶しています。お目にかかる機会はなかったものと思われませう」

やや曖昧に答えた。必ずしも崔胤にすつかり心を許した訳ではなかった。

東呉くんが横から、

「私も同じでした。地方から出て貢挙を目指す者は、とにかく受かるまでは我武者羅、どうしたって世の噂には疎いものです。それに、当時跋扈していた宦官どもを憎む気持ちは皆同じで、張濬どのはその点で別の世界におられたのですから、交わるような機会はまずありませんでした」

「むろんそうでしょう。張濬どこの右顧左眄ぶりはそのころから呆れるばかりです」

崔胤は冷たく言い放ち、

「全くもって信念というものがあの人には感じられません」

東呉くんがそう引き取って、張濬について知るところを話してくれた。

張濬は才人として早くから名が知られていた。遍く書史に通じ、天下を横行する術を得たと自認し、金鳳山に栖み、俗人を見下し、訪ねてくる者に傲然と構え、ろくに口もきかずに追い返していた。ある日、宦官の楊復恭が遊山の際にその住まいに立ち寄ると、日ごろとはまるで違い、張濬は恭しく自ら茶を献じ、楊復恭の間には学識を傾けて答えた。楊復恭はその弁才に感じ入り、それで張濬は朝廷に召し出された。宦官に諂って官位を得たと、貢奉を目指す人々の間での評判は芳しくなかった。

黄巢が都に入り、四位以下の者はそのまま大斉帝国の官僚になるよう求められた。張濬は病と称して出ず、隙を見て長安を脱出し、自ら母親を背負って商山へと走った。それから、成都の皇帝のもとに馳せ参じたために、忠義の士として名を高めた。成都の朝廷で実権を握っていたのは「お父ちゃん」の田令孜とその兄だった。張濬はさっそく田令孜に迎合した。同じ宦官でも、田令孜と楊復恭はいがみ合う間柄、もともと引き上げてやったのに、知らん顔で田令孜に取り入る張濬を楊復恭は憎悪した。

皇帝は一度は都に戻り、それから鳳翔に出て、田令孜に引つ張り出され、火の中を賊王八の王建に背負われて興元へと走った。興元で田令孜と皇帝の間は險悪になり、田令孜は成都に逃がれた。そしてその次に朝廷の実権を握ったのが楊復恭だった。張濬はまことに具合の悪い立場になった。

皇帝は長安復帰を目指し、興元から鳳翔へと移ったところで病に冒され、最後は都で死にたいと強く願って、文徳元（八八八）年二月、長安に帰還して死んだ。十二歳で即位して皇帝であること十五年間であった。

次の皇帝に誰がなるのか。賢者の誉れ高い皇弟の李保（りほ）がふさわしいと朝廷の多くの人々は考えた。楊復恭は、聡明な人物が皇帝になっては己の力が削がれると、李保より少し見劣りする弟の李傑（りけつ）に目をつけた。親衛隊を動員し、李保に先んじて李傑を宮中に入れ、宰相以下を呼び付けて拝謁の礼をとらせた。こうして李傑が即位した。二年前の春の終わりだ。

楊復恭は皇帝を誕生させた功を誇り、「定策国老」を自認した。貢奉に合格した受験生は、そのときの試験を担当した試験官を、終生、恩師として仰ぐ

慣習がある。楊復恭は、新皇帝に誰がふさわしいかを試験した試験官で、皇帝任官試験の問題である「策」を定めた、国家の最も重要な長老、「国老」なのである。皇帝の先生である「定策国老」は、他の臣下とは違い、太極殿に出入りするときも輿に担がれたままで良いと、傲慢な振る舞いに及んだ。

新皇帝は二十二歳、なかなか血気盛んである。楊復恭のお蔭で即位できたとは言え、楊復恭の驕慢が募れば愉快でいられない。楊復恭に憎まれた張濬が浮上してくる機会がここに生まれた。

東呉くんがここまで話す間、中空を見据えていた崔胤が冷ややかな口調で、「張濬どのお会いになっておられれば、あの者が超俗の士を銜いながらも実は愚物中の愚物であることがひと目でお分かりになりましたでしょう。張濬どのは、新帝の宮中で、機会あることに、『我が手中には天下を治める法がある。残念なことにそれを使う機会がない』と吹聴して回っていました。韋秀才どのなら真に受けたりはなさらないでしょうが、残念なことに、お上は目を眩まされてしまわれました。楊復恭への怒りがそれだけ強かったので

しよう。お上は張濬どのを呼び、その法をお尋ねになりました。どのように答えたのかお聞きでしょうか」

「いいえ。何も存じません」

都から遠く離れ、朝廷での出来事はほのかに聞こえてくるだけだ。

張濬はもったいぶった態度で、その法をすぐには言い出そうとしなかった。皇帝は気が急ぎ、「世の乱れがおさまらぬのは朕の不徳の故か」と、自らを責めるように言った。張濬は「漢朝を再興した光武帝も、陛下の若さと天が授けになった英特さがあれば、遠いものではないと臣は確信しております」と言い、皇帝を喜ばせる言葉を連ねた上で、「しかしながら、内には宦官に抑えられ、外には方鎮に迫られ、日々、御心を安んずることがかなわず、臣は常に血の涙を流すものであります」と、本題に入りかけた。皇帝は膝を進め、「何か方略があるか」と問うた。張濬は再び話を核心から遠くし、古今の治乱を論じて自慢の博識ぶりを披露した。皇帝はその雄弁に聞き惚れた。張濬は長談義の末の総まとめとして「治の要」の語を口にした。「それは何であ

るか」と座から立ち上がらんばかりの勢いで皇帝は尋ねた。張濬はそれを待っていた。

「韋秀才どのなら、何であるとお答えになりましょうか」

崔胤の問に、「信なくんば立たず」の孔子の言葉を引いて答えた。平凡ではあるが、儒学を学ぶ者なら自然とそう答えよう。

「張濬どのは孔子の教えとは逆に、兵を要として挙げました。これ以上にお上を惑わす言がありませんようか」

崔胤は怒気を顕わにし、東呉くんも憤慨した。

皇帝が張濬に心酔した理由が了解できた。都を守る禁軍の指揮権は宦官の手にある。これは唐朝の歴史の必然性が生んだ制度でいまさら変え難い。都の外にある軍の指揮は節度使に任されている。これも歴史の産物でいまさら動かし難い。皇帝には意のままに動かせる兵団がない。張濬はそれを作ることを進言した。皇帝は喜んだ。張濬はすぐに十万からなる軍隊を編成して見せた。

「都の周辺には生業を持たず、着る物も、食べる物もろくない流浪の民がいくらでもいます。金を撒きさえすれば、数だけでよいのなら、十万でも二十万でもたちどころに集められましょう」

崔胤は笑った。

「そのような烏合の衆で、こともあろうに、沙陀を相手に戦ってみようと言うのがこのたびの戦なのです」

東呉は呆れたように言い、

「張濬どのは、李克用を叩き、返す刀で楊復恭たち宦官勢力を除こうとの考えのようですが、これはかえって朝廷を危うくするようなものです。李克用と楊復恭はもともと近い間柄、だからこそ張濬どのは李克用討伐を考えたのでしょうか、これは沙陀の軍団を都に呼び寄せる結果になる恐れがあります。長安は一体幾度戦火にさらされねばならぬのでしょうか」

崔胤は姿勢を改め、

「韋秀才どの、貴殿が『秦婦吟』に詠まれたような悲劇を二度と起こさぬに



は一つの方策しかありません。朝廷を正しい姿に戻す、その一事です。楊復恭のような宦官どもを一掃し、張濬どのような軽佻浮薄な愚物も追い出さねばなりません。何も難しいことはありません。正しい志を持った者が朝廷に集えばよろしいのです。この広い唐土には大勢います。韋秀才どのも、呉秀才どのもそのお一人。いまそのような人々は唐土に散らばっていて、遠く我が身を焦がすばかりに悲憤慷慨しても、国家の将来は変えられません。皆が挙つて都にいき、皆の力を合わせれば、必ず朝廷は清らかになり、自ずと天下も清らかになります。お二人ともそのように思われますでしょう」

東呉くんは、

「昨年の春に貢挙が再開されました。戦乱の続く中にも拘わらず、多くの者が都に集まりました。私もその中に加わりたい気持ちがありました。宣州の戦に巻き込まれ思うようになりませんでした」

「都にまだいかずにいてよかったです。時を見誤つてはいけません。楊復恭が都を去る日が必ずきます。そのときにこそ都にいくのです」

「もしも張濬どのが敗れば、楊復恭が一層増長するのではないでしょうか」  
 韋荘が尋ねると、

「情勢は複雑に絡み合うのが常。張濬どのは当然のこととして敗れて失脚します。そして、楊復恭も倒れましょう。断言できます」

「どのようにしてそうなるのでしょうか」

東呉くんが尋ねた。

「自ずとお二人にもそうなると思えてまいりました」

崔胤は確信に満ちた言い方をし、三つの盃を満たし、

「その時こそが唐を建て直す最後の機会です。虚しく失わせては万事休します。志を同じくする者が朝廷に並び立たねばなりません。我等二人、必ずここに集うべく、ここに誓いの盃を空けようではありませんか」

崔胤が盃を手にし、東呉くんが続いた。崔胤は唐朝の再興の要となるべき人物であると思え、

「私も遠からず貢奉を受けようと決意しておりました」

と、心を明かしたのだった。

崔胤は喜び、東呉くんは深く嘆息し、

「ここに西周くんがいないのが残念でなりません。道半ばで倒れた西周くんのためにも、必ず進士及第を克ち取りましょう。我らの志が潰えない限り、唐朝には輝かしき未来があるのです」

三人は盃を干した。

「我ら同志の心は一つです」

崔胤の言葉が耳にはつきりと残っている。己は庾信とは異なる人間になれる。

頬をなお上気させたまま、ゆっくりと歩み出す。

日はすでに人家の向こうに落ち、土手から虫の音が聞こえてきている。

ふといまの我が身に気づき、この川べりから人影が消えぬうちに知人の家まで戻らねばと、急ぎ始める。金陵はいまは戦乱の渦の外にあるが、いつどこから盗賊が出てくるかわかったものでない。蘇州で熱を出した楊胆は置い

てきた。己の身は己で守らねばならない。

それでも、目の前の光景はまこと穏やかな黄昏時。空は深い藍色に変じつつある。南朝の時代から繰り返された秦淮河の秋の夕暮れ。川面に飛び交っていた燕は姿を消している。

己はすでに五十五歳。一生を一日に譬えれば、この夕暮れ時よりもさらに遅い頃になっていようか。安らかな夜の眠りにつくのを待つばかりであるのなら、最もよい。韋応物は官界から身を引き、精舎において沈潜の日々を送った。いまの時代に一人安らかな夜を求めるのは許されまい。なおこの身を何かのために役立てられるのは幸福と言えよう。貢拳を受けて唐の官人になる。初めから己の道はこうと決まっていた。夕暮時に至って、元の道に戻った。まだ間に合うのかどうかはわからないにしてもこの道をいこう。

思いがけず今日は崔胤と東呉くんに打ち明けた。それを悔やむものではない。だが、どうして崔胤と東呉くんだったのか。二人が同志だからだ。

韋荘の足はまた止まる。

己の心を最初に明かしたいのは、本当は蘭である。これでよいかと蘭に尋ね、それでよいとの答えを得てから、夕暮れに至ってたどるべきと知った道を歩み出したい。それができるのならどれほどよいか。

蘭をいつまでも己のもとに引きとめてはいけない。蘭は望むままに蓬萊島へでもどこへでも行ってほしい。

できることなら蘭との最初の旅に戻りたい。二人とも若かった。楊爺もいた。羨もいた。皆がいる莊園があった。

古い記憶がほとばしり出てくるのを無理に止め、暗くなってきた道をまた歩み始める。

このいまに会いたいののは蘭だ。

蘭がいたからこの己があった。蘭は何もかもわかってくれている。最初の旅の章華台で、長安はいずれ廃墟になると蘭は言った。あのころから蘭は何もかもわかっていたのか。これから先のこともわかってしているのか。己はどうなるのか。

西空に残る細い月が、あたりが暗くなつたために輝きを増している。水面にゆらゆらと映る。

一つの詩を思う。

烟竈寒水月竈沙

寒々とした水を靄が覆い、月の光が砂を包むこの

夜、

夜泊秦淮近酒家

秦淮河のほとりの酒家の前に舟を泊める。

商女不知亡国恨

金陵の妓女は亡国の恨みを知らないのか

隔江猶唱後庭花

川向こうで『後庭花』が唄われる。

杜牧の詩だ。

金陵を都とした南朝の最後は陳王朝である。その最後の皇帝は文雅の世界に遊んだ人で、優美な曲も作った。その一つが『玉樹後庭花』。幸臣に付けさせた詞は綺麗、男女唱和して哀切を極めたと言う。その曲が、南朝の悲史など知らぬ妓女によって唄われていると杜牧は詠んだ。

杜牧は韋応物よりも少し後の時代を生き、唐が衰亡していく兆しを鋭い感

性で見えていたようだ。「亡国の恨み」は、南朝のものではなく、いずれ唐朝のものになるとの予感があったのか。それでも杜牧のころはまだ平和だった。『後庭花』を唄う妓女がいた。世に剥き出しの暴力が溢れば、真先に悲惨な運命に突き落されるのは女たちだ。

長安の平康坊で、銀犁の琴に合わせて歌った最後の夜。そのときの鸚鵡の声が、「相思、相思」と聞こえてきそうだった。

銀犁への思いを虚しくさせてはいけない。『秦婦吟』が己の道を切り開いてくれるのではない。己が『秦婦吟』のために道を開かねばいけない。そのようなことができるのか。唐が『後庭花』を残して滅び去っていくばかりのときに、無力な一人の男に何ができるのか。やはり己は庾信か、それ以下の人間であろう。

心の底の焦げるような熱さに、また歩み出す。

微かに聞こえる笛の音がある。どこかで『後庭花』を歌うのか。まさしく咽ぶような笛の音だ。今夜の月に、笛の主も杜牧の詩を思っているのだろうか。

笛の音に次第に近づき、彼方の木の下に停泊する一艘の小舟から漏れてきていると知れる。曲は『後庭花』ではない。そうとわかると、俄にこれはあの曲、この音の抑揚、そしてこの息遣い、間違いないと知れる。

駆けて、木の根元を回り、身を伸ばして川面を覗く。暗がりには舟があり、笛を吹く男の背がある。章華台の遺跡で聞き、官軍の乱入した後の安邑坊で聞いたのと同じ音色だ。

「蘭」

静かに呼ぶ。

その声は耳に届いたろうが、舟上の人は笛を吹き続ける。

曲が最後に達し、

「ほう、兄貴、こんなところでどうされたのですかな」  
ゆっくりと振り返ってくる。

「そなたこそ何をしているのだい」

「商売人ですから、どこへでもいきます。金陵にくるのも、これで最後に



なりそうで、話をつけておくべきこともありません」

「いよいよいくのかい」

「そうなるでしょうか」

「そうかい」

「どうです、こちらにきていただけませんか」

蘭は舟へと招く。

「そなた一人なのかい」

「若い連中は、俺といつも一緒では気が詰るだろうと、遊びにいかせましてな。今晚はここで俺一人で夜明かしと思っております。兄貴も一人ですか。胆はいないのですかな」

「例の持病で、蘇州に置いてきた。いつものように熱が引けば、あと二、三日で追いつくだろう」

「物騒な黄昏時に一人とは、危ういことですな。俺が盗賊だったら、兄貴などいどころ。それにしても胆も相変わらずなのですな。いつまでもくよくよ

自分を責めているから、治る病も治らぬのでしよう」

「あれのせいではないだが」

蘇州に一人騙して置いてきたのは気の毒だったと思えてくる。

「兄貴も昔をよくよく思う方ですから、胆の気持ちがよくわかりましょう」

「私の場合は自分がいけないのだから仕方がない」

「そのようにいつも言う」

「そっちの商売は順調なのかい」

「伍伝や范完がきてくれたので大助かりですな。揚州は駄目になっても、こ  
つちの商売は大きく広がり、俺一人では手に負えません」

「結構ではないかい」

「錢鏐さまの勢いが止まらぬ間はまだまだいけますな」

「杭州の発展と機を一にしている訳か」

「儲けた分で日本行きの船をしつらえ、うまく往復できれば、それもまた大  
儲けでしょうな」

「敬竜どのも準備をなさっておられるのかい」

「そろそろ杭州に移ってきていたかどうかと思っています。あの方も相当なお年、もうお待たせできません」

「いよいよか」

「首尾よくいけば、半年もあれば帰ってきましょう。船に日本の宝物を満載しましてな」

「あつちが気に入って、この乱れた唐などに戻ってくる気がなくなってしまふのではないのかい」

「いやいや、唐が滅び去るのも見届けておきませんとな」

「ここまで見れば十分だろう。この金陵だつていつまでもこの姿ではあるまい。滅びていく様を見るよりは、叔父上のように佳き日々うちに死ぬか、海の向こうにいつて戻らぬか、それがよいのではないかい」

「日本にいけば、そこからはまた風任せで。その先にいつてみたくなるやも知れませんか」

「そうだろう。それがそなたらしいやり方だ」

「でしようかな」

「風任せのそなたとの二度の旅ほど楽しいものはなかった」

「三度目もどうですか。兄貴もいきませんか」

「日本にかい」

二度目の貢挙を受けるために虢州の莊園を發つた日、三本柳の下で、ここから東に蘭とともに旅へと出られたらと一瞬だけ考えた。

「兄貴はこの江南の地にずっといる気なのですか。杭州から少しばかり遠く船出すればじきに日本です。俺と、どうですか」

「悪くはないが、そうもいかないだろう」

「旅に出るのをためらうのは、やはり何ですか。例の抱柱の信ですか」

胆を残して一人でここに来たのは、秦淮河の妓女とこっさりよろしくやるためでしょうかな。それならそれで俺は納得しますな」

蘭は笑う。

「この齡だ、いまさら新たな執心を燃やしたりはしない」

「そうですか」

蘭が疑わしげに言うので、妙な言い訳を思いつく。

「新たな執心はともかくとして、古い執心はどうにも消えないものだ。むしろ強まるばかりだ。このところ、実はそれで苦しんでいる。胆もおらず、こうして一人で夕暮れの道を歩いているときなどは特にそうだ」

「古い執心ですか」

蘭はしたり顔で顎髯をしごく。

「まあ、そなただから隠さぬが、このところしきりと銀犁が夢に出てくるのだ。昨夜もそうだった」

「本当ですか」

昨夜がそうだったのではないが、銀犁の夢を時に見るのは事実だ。

「夢に出てくる銀犁はいつも哀しげで、何か言いたそうで、私をじっと見つめているのだ。唇が微かに動くのだが、言葉は聞こえない。夢は真実を表す

と貫休さまがおっしゃっているだろう。銀犁の夢もそうに違いない。あれはいまもきつとどこかで生きている。私と会える日を待っているに違いない。夢に頻繁に出てくるのはそれでなのだ」

「銀ちゃんが、生きていますかな」

「半ばはあきらめもあり、半ばは考えたと辛くもなるので、銀犁は死んだと決めていた。それは違うと、夢で訴えているのだ。抱柱の信のためにどうしたらよいか、それは明らかだろう」

「どうするのですかな」

「探すのだ。『後庭花』を歌う秦淮河の妓女の中に、銀犁が混じっていないと  
も限るまい」

「遊里を尋ね歩く旅ですか」

「錢鏐どのお使いとして各地を歩くのも、実は、ひよっとしてとの思いを抱いてのことだ」

「それは知りませんでしたな。銀ちゃんへの思いがあつては、日本などには

いってはいられませんな。誘っても無駄とよくわかりました。さすが兄貴の抱柱の信は筋金入りですな。天晴れ、天晴れ」

蘭は笑う。

「褒めてもらっても自慢にはなるまい」

蘭は声の調子を変え、

「で、俺がいなくなっても、兄貴は大丈夫なのですな」

西に沈みゆくわずかな月の光が、己を顔に当たらぬように横に向け、

「そう見くびるでない。こうして一人でも旅ができています。貫休どのもおられ、錢鏐どのともうまくやっています。そなたに頼らずとももう大丈夫だ。弟夫婦に、淑娥に綜、それに胆と春琴。皆の将来も考えている」

「彩霞ちゃんもいますな」

「むろん、彩霞もだ。あれにだって、いつかは許してもらえと思っています」

「あそこで手について、そのままになっていますな」

「ともかくだ、私一人で何もかも大丈夫だ」

「ひよっとしたら俺は帰ってこないかも知れませんが」

「日本の皇帝に気に入られたらあちらにいればよい。蓬莱島にいきたくなくなったらそうすればよい。そなたの助けをいつまでも必要とする私ではない。もう五十五歳なのだからな」

「年若の俺が、いつまでも世話を焼くのも、兄貴に失礼でしょうしな」

「その通りだ」

「では、いかせてもらいますかな」

「いつごろいくつもりなのかい」

「来年の春でしょうかな」

「そうかい」

「しつこいようですか、本当にいいのですな。寂しくなりませんかな」

「寂しいのを避けては人は生きられまい」

「兄貴は耐えられますかな」

「私の弱さをいまさら隠したりはしない。強がりと言わない。それでも大丈夫



夫だと思っ」

「でしようかな。俺にはどうしても心配が残りますな」

「余程、私が駄目だと思っっているのかい」

韋荘は笑う。

「一つここで言っておきます。もしも俺がいなくなった後で何かあったときに、俺の代わりになるのは誰であるのかと」

「そなたの代わり。それは誰なんだい」

「俺はちゃんと考えてあります。それは、春琴ですな。そのことを心に留めておいていただけますかな」

「春琴なのかい。あの娘がそなたの代わりになるのかい」

「春琴と申すよりは、楊絃という名の立派な男児。あれは楊爺の生まれ代わりです。覚えていきますでしょう、貢拳を受けるために號州の莊園を出たときに、楊爺と一緒にいきましたがりましたな。それを俺が止め、代わりに俺が兄貴の世話をすると言っただ。あれが楊爺との最後の別れとなり、楊爺に兄貴を返

し損ねた。それで、俺としてですな、まあ仕方なしに、これまで楊爺の代わりをずっとしてきた。ですから、俺が旅に出るに当たっては、兄貴を楊爺の生まれ変わりの楊絃に託す。どうですか、筋の通った話ではありませんか  
な」

「しかし、あれはまだ十歳を超えたばかりだ」

「どうなるかは俺にはわかりません。ここは楊爺に任せましようや」

「楊爺にかい」

「兄貴のことは楊爺が全て知っている。莊園をあのような形で終わらせたのも、兄貴のために楊爺が考えたことだったのではないですか」

「どういう意味かい」

「楊爺ではないので俺にはわかりませんな」

と言いつつ、蘭は手を打ち、

「そうだ、そうだ、どうしていままで考えなかったのか。そうだ、そうすればよいのだ」

笑い出す。

「どうしたんだい」

「兄貴は一緒にいってくれない。だったら、彩霞ちゃんを連れていこうと、いま思い付いたのですが、よい考えではありませんかな」

「彩霞をかい。またとんでもないことを言い出したものだ」

「そうですね。彩霞ちゃんをこのままにしておくのは可愛そうではありませんかな」

「あれが不本意な思いを抱いているのは間違いない。仏典を習ったり、琴を習ったり、あれこれやっているのはその現われだろう」

「春琴が男になったのも、彩霞ちゃんが自分のようにはさせたくないからですな。日本に渡れば彩霞ちゃんも変わりましょう」

「そうかも知れぬが、しかし、あれはきつといかないだろう」

「俺が真面目に誘ってもですかな」

「こんな唐土を離れたい思いは彩霞にもあるだろう。だが、それ以上に引き

止めるものもある」

「でしようかな」

「そなたもわかつているのではないかい。春琴がいるし、それに胆だ。胆がここにいて、彩霞が日本にいくと思うかい」

「兄貴もわかつていましたか」

「ずっと前からそう思っていた。あの二人には苦しいものがきつとあろう」

「あの二人を一緒にはさせられないのですかな」

「周りがよいと思っても、難しい」

「とりわけ胆がですな」

二人の話は途切れる。

月が沈み終わり、空に無数の星が輝いている。梟の声が低く響く。

蘭は杜牧の詩を静かに吟じる。

烟箠寒水月籠沙

寒々とした水を靄が覆い、月の光が砂を包むこの夜、

夜泊秦淮近酒家

秦淮河のほとりの酒家の前に舟を泊める。

商女不知亡国恨 金陵の妓女は亡国の恨みを知らないのか

隔江猶唱後庭花 川向こうで『後庭花』が唄われる。

「うまくいくかどうか、『後庭花』をこころで吹いてみますかな」

「亡国の曲を聞くにいまほどふさわしい時はなしか」

「唐の滅び去った後にはどのような曲が残りますかな」

「悲しい想像だ」

蘭の笛の音が流れる。

今夜が別れなのか。遠いあの朝、狐潭で釣りをし、叔父に向かって、蘭と旅に出ることを願い出た。

「舟を出してみますかな」

「この闇夜にかい」

「怖いですかな」

「そなたがいて何の心配があろうか」

蘭は纜を解き、秦淮河の水の上を舟は滑り出す。大きな鷺がしわがれた鳴

き声とともに飛び去る。微風が涙で濡れた睫に触れる。

岸辺にともる明かり。あのあたりは酒家であろうか。人の笑い声が立つ。

あのあたりは妓楼であろうか。管弦の曲が流れる。今夜のような夜が金陵で繰り返されるのはいつまでか。

舟がこのまま進めば長江の本流に出るだろう。その流れへと放ち、大河の水とともに下っていこうか。その先はどこに至るのか。東の海か。それとも星の満ちる天か。

蘭の操る舟は自在に進み、天の川の流れにも乗ることだろう。遠く遠く遡り、高く高く昇り、争いの絶えぬこの地上を遥かに見下ろす。

「相変わらず人間はつまらんことをしておりますな」

蘭は哄笑する。

己は地上に残って笑われる人間だ。己から蘭を解き放つのが今夜なのだろう。

**大順**二（八九二）年、夏の初めの衢州。

町での用事が済むと、貫休も時折滞在する不出院で禅の修業の真似事をさせてもらう。最後の日に、綜と春琴も加わる。

衢州にはいつもの楊胆に加えて、綜と春琴を連れた。二人に旅の経験を少しばかりさせてやりたいのと、話しておきたいことがあるからだ。

午後遅く、五日間の行が終わる。衣を替え、院主の茶のもてなしを受ける。

一自禅閑閉　ひとたび禅寺にこもつてより

心猿日漸馴　心の猿と言ふべきものをやや飼い馴らした。

不知城郭路　城郭への路はどこかわからなくなり

稀識市朝人　俗世間の人々をほとんど忘れる。

礼に代えて、詩を披露する。

実際にこれしきのごとで俗世が忘れられるはずはない。気さくな院主に少々戯れたに過ぎない。ここにきたのはむしろ逆の目的、俗世に生きる己の

心を堅固なものにするためだ。

綜と春琴と三人で庭を巡る。短くとも一応の修行を終えた心は晴れやかである。西に傾きつつある陽がことさらに明るく、ぐいぐいと伸びる松の芽の下、綜と春琴の顔が輝く。

「そなたたち、今年で幾つであつたかい」

「十五歳です」

「十二歳です」

同時に答える二人は兄弟としか見えない。不出院では、春琴は正真正銘の楊弦という名の男児だと思われている。

二人の背丈はほぼ同じ。綜は母よりは父に似たのだろう、撫で肩でややなよなよとした体つき。春琴は楊爺の生まれ変わりだけあって、肩幅が広くがっちりとして、羅漢寺の悪僧どもと日々武術の鍛錬に励み、腕も足も太い。春琴の方がよほど男らしく見える。

顔立ちを比べれば、陸氏に似てくりくりと丸い目の綜と、楊胆に似て細い



目の春琴、眼差しの美しさは春琴の方が勝り、羅漢寺でもそうだが、僧侶とも妙な恋心をくすぐるところがある。春琴には匂うばかりの若さがあり、綜には少年にしてすでに隠者の風がある。

この二人を伴った今回の旅は、胆と二人だけとは雰囲気が違う。胆は口数が少なく、話しかけても遠慮がちの返答があるだけ。綜は蘭を真似て生意気なことをずけずけ言うし、春琴は男勝りの勇ましい物言いを敢えてする。二人は互いに始終何か言い合つてとかく賑やかだ。春琴のきびきびとしたしぐさは見ていて飽きず、春琴がそばにいただけで何か楽しくなる。今日などは修行の最終日であり、春琴と綜がそこに合流するので、未明のうちから気持ちこそわさわわしていた。この庭のそぞろ歩きが格別興趣あるものと感じられるのも、春琴がいるからなのだろう。

「とすると淑娥は十七歳か。嫁にいくのにもう十分な歳だ。淑娥もそなたたちもそれぞれにこれから先のことを考えねばならぬ歳になってきたようだな」  
「姉はどうでしょうか。その気はさらさらなようです。本人だけでなく、

父も、母も、同じでしょう」

「そうなのかい」

「姉は花しか眼中にありません」

「兄さんは釣りしか眼中になしと」

春琴が口をはさむ。

「一つに打ち込むことでは、姉と弟は似るのだからな」

韋荘が言うと、綜は、

「叔父さんたちだつてそうでしょう」

「私と藹は似ているのかい」

「ええ、そっくりです」

「ほほう、どのようなところかい。妙なことに打ち込んだりはしていないと

思うが」

「似ているのはそのようなことはありません。言ってもよろしいでしょう

か。お怒りになりませんか」

「何を言っても構わない」

綜は少し身構え、

「父は母に頭が上がりません。何でも母に従っています。それは御存知の通りです。そして、伯父さまも実は同じです。女の人にとびきり弱いのです」

早口で言い終えると、踏み石の上をぴよんぴよん跳んで逃げていく。

「兄さんは、とんでもないことを言ってしまった」

春琴が笑う。

「何かい、そなたもそうだと思うのかい」

「私がでございますか。どうでしょうか。私は旦那さまのことをまだよくは存じておりません。それでも、お母さまにも、叔母さまにも、淑娥さまにもお弱いことは確かかと存じます」

春琴はへこりと頭を下げる。

「それなら皆にはないかい」

「いえ、とんでないことを言った兄さんを懲らしめてきましょう」

春琴は綜を追って走る。

お母さまとは彩霞だ。二人とも見ているのだ。

春琴のすばしっこさに綜は適わず、池の脇の石で足を滑らせ、背中を掴み取られる。綜は抵抗せず、春琴に額を叩かれる。

「ここら、騒がしくしては院主さまに御迷惑であろう」

二人が戯れる池へと歩み、

「どうやら尋ねた方がいけなかったようだ。そなたたちのことを聞かせてもらうつもりだった。十五歳と十二歳になって、それぞれ何をしたいと考えているのか、聞いてみたかったのだ」

二人は顔を見合わせ、春琴が、

「兄さんからどうぞ」

綜はひゅうと息を吐き、

「齢の順か。後でも先でも同じこと。こんなにも乱れた世の中で、したいことがあるのかと尋ねられても、困りますな。思うことがたとえあっても、で

きようとは思いませんしな」

蘭のような口調で言う。

「兄さんは弱虫だから」

「ふん、誰だって同じだ」

二人の間に入って、

「思うようにはならぬのはいつの世でも同じ、いまに限るまい。初めよりあきらめていたのでは何もできない。斜に構えずに、素直に考えていることを言っってはくれまいかい」

「僕だつて何も考えずにいる訳ではありません。例えば、そうですね、蓬萊山の傍らで、蘭おじさんと釣り糸を垂れるとかでしようか」

「兄さんは、やっぱり釣りばかり」

「あの約束か。それが本当の望みなら、蘭くんが帰ってきて、この次の時に連れていってもらったらどうかい」

蘭はひと月ほど前に杭州から出帆した。伍伝がそう知らせにきた。

「蘭おじさんは帰ってくるのですか」

「半年ほどで帰ってくると言っていた。風に任せて、さらに遠くへといくかも知れないが」

「たぶんそうなるでしょうかな」

綜は顎の髯をしごく蘭の仕草まで真似て言う。

「蘭くんが帰ってこないとしたら、したいことはもう何もないのかい」

「どうでしょうか。例えば、旅籠屋の婿になるのもよいのではありませんか。

いけませんか。店は女房に任せ、僕は川で釣りをする。それは一つの理想ですかな」

「兄さんたら、やっぱりどこまでいっても釣りしか頭にないのです」

綜は本気で言っているのではないだろう。

「どうして旅籠屋なのかい」

「虢州から揚州に着くまでの間、どこに泊まるのかで苦労しない日は一日だつてありませんでした。誰もが安心して旅のできる世に戻ってもらいたいと

思うのです。これは真面目な話です」

「成程、それはよい考えだ。ならば、旅籠屋を自分でやればよくないかい。どうして女房に任せろのかな」

「僕は父の子です。女房に言われるがままに生きるのがきつと似合っているのです」

春琴はけらけら笑い、

「兄さんは本当に情けない。せつかく男に生まれたのに」

「男のどこがよい」

「旦那さまのおうちで、男で御立派なのは、どうやら蘭おじさまばかりでございませう」

「そう思うかい」

韋荘は微笑みかける。

綜は真剣な顔で、

「男に生まれた辛さは男でなければわからない。男の真似をしているだけの

おまえなんかにはわからない。伯父さまだつてそう思っているはずだ」

綜がこのように言う理由はわかる。死んだ純のことがある。一族の重みをこの綜に背負わせようとしてはいけない。己自身もさんざん苦しんだのだ。

「私のことがわかるのかい」

「蘭おじさまが言っていましたから」

「あれが何を言っていたのかい」

「柱を抱いて名を残す人だと」

「そんなことを言ったのかい」

甥の前で苦笑するしかない。

「私は兄さんとは違いますから。ほら、見てください」

春琴は走つて跳び、見上げる高さの松の枝を両手で掴み、体を大きく前後に揺さぶる。

「ここら、院主さまに御迷惑といま言つたばかりでないか」

口でたしなめつつも、春琴の身の軽さに目を細める。春琴は池を大きく飛



び越して降り立つ。

「悔しかったら、兄さんも飛んで御覧なさい」

「悔しくなどあるものか。伯父さまの詩にあった心猿を馴らせず、野放図な振る舞いをする奴に、男だろうが女だろうが、ろくなことはない」

憎らしげに言うが、春琴は勝ち誇ったように池を巡って戻ってくる。

「では、そなたは何をしたいのかい」

「私は情けない兄さんとは違います。平陽公主さまのようになりたいと思っています」

春琴は眼を輝かせる。

「ふうん、平陽公主さまとは誰だ」

「兄さんは釣りばかりでお勉強をしないから何も御存知ない。高祖皇帝の三番目のお嬢さまです。本当に知らないのですか」

高祖皇帝とは唐の初代皇帝李淵（り えん）。

綜は意地を張り、

「誰が知るものか。父上が聞かせて下さる史書にはなかった」

「お聞きになっても、兄さんはどうせすぐに忘れておしまいになるでしょう」  
 「偉い皇帝のお嬢さまなのだろう。綺麗で才人だったのだろう。琴が上手だったか、碁が強かったか、どうなんだい」

綜が琴と碁を持ち出したのは、近ごろ春琴はこの二つを彩霞とともに習っているからだ。琴棋書画は士のたしなみだ。

「全然違います。男も適わぬ武勳を挙げられました。旦那さま、そうでございましょう」

「その通りだ」

「あれほど素敵な方はいらっしやいません」

「そなたが平陽公主さまに憧れているとは知らなかった。何をなさった人なのか、綜くんに教えてやってくれないかい」

「では、何も知らない兄さんに教えて進せましょう」

春琴はもったいぶった態度で話し始める。

いまから二七〇年余りの昔。まだ隋の時代である。李淵は隋に仕える高官として晋陽にいた。いまの李克用の本拠地である。

時の皇帝は煬帝。人民を酷使した大土木事業と、朝鮮半島への無謀な遠征の失敗とで、各地で反乱が勃発、隋朝はそれを抑える術を持たず、煬帝は現実的に背を向けるように長安を後にし、己が造った大運河に巨大な船を浮かべて揚州にいき、壮麗な離宮で豪奢を極めた遊蕩に身を埋没させた。

李淵は息子の李世民（りせいせいみん）たちに勧められ、世を正す義旗を挙げ、決意を固め、近しい者たちに、兵を率いて晋陽に集まるよう使いを送った。

このとき娘の平陽公主は、夫の柴紹（さいしやう）とともに長安にいた。逡巡する夫に、平陽公主は「あなたは速やかに晋陽にいきなさい。私は一婦人、いつでもどこにでも身を隠せます。別々になった後で、私には計るところがございます」と、夫を叱咤していかせた。平陽公主は鄆県の莊園に帰り、家の財産を全て撒いて荒くれ者数百人を集め、胡賊の親分も仲間に取り入れた。鄆県の役所を襲って最初の勝利を得ると、たちまち群盗が参集して数千に膨

れ上がった。隋朝の討伐軍と戦って撃退し、長安の周辺を順次平定し、七万の大勢力を擁するまでになった。平陽公主の軍勢を人々は娘子軍と呼んだ。晋陽における李淵の旗揚げも成功し、息子の李世民が長安を目指して軍を南に進め、渭水の北で娘子軍と合流した。平陽公主の活躍があつて長安はすぐに陥落し、唐王朝がこれより始まることになった。

平陽公主は若くして死んだ。婦人の葬儀には鼓吹しないのが礼であるが、父李淵は、「鼓吹は軍の音楽である。公主は兵を挙げて義旗に応じ、親しく金鼓を打って軍を指揮した。常ならざる婦人の公主に、鼓吹がなくて良いはずがない」と、男子と同じ葬送の礼をとるよう命じた。

「平陽公主さまのように、何万もの兵士を従え、悪い子どもを退治するのが私の望みです」

春琴は胸を反らせる。

「それは大層な話ですな」

綜は腕組みをし、少々呆れ気味に言う。

「そなたがそのようなことを考えていたとは知らなかった」

揚州の酒家で立ち聞きした荊十三娘の話よりも春琴の夢は大きくなっている。

「悪い者とは誰のことと思っているのかな」

綜の間に、春琴は、

「決まっています、お上に仇為す者どもです」

「それならそこらに大勢いる。おまえが適うものか」

「正しい世にしようとの強固な意志を持つ者が勝たずにいるはずがありません。平陽公主さまがその何よりの証ではありませんか」

「そう単純なものかな」

「兄さんはどうせ釣りに逃げることしか考えていないのです。旦那さまはどうかお思いですか」

春琴がそう言うと、綜も、

「そうそう、私たちにばかり言わせないで、伯父さまのお考えもお聞かせく

ださい。ここでの修行は、この先は隠居されるためなのですか。我らの先祖の応物さまのように」

二人に詰め寄られ、

「言っておくが、我が祖、応物は偉大なお方だ。暢気に退隱の日々を過ごしたのではない。いずれそれはわかるだろう。その先祖に恥じぬために私は何を為すべきか、我が心に迷いがないかを確かめるにここに来た。ここで五日間を過ごし、我が心は固められたと、いまは感じている」

「何を決心されたのでしょうか」

それを話そうとして二人を呼んだ。

「そなたたち、あの狐潭を思い出すことはないかい」

「あります」

「わずかに覚えています」

「他所の人にとっては何の変哲もない池だ。我ら韋家の者には、どこよりも美しく大切な場所だ。莊園の繁栄の源であり、狐潭で行われたお狐さまのお

祭は我らの最も重要な行事だった。楊爺が始めたそのお祭が絶えて久しい。私はそれを復活させる。お祭が復活するのだから、綜はいつでも狐潭で釣りができる。狐潭のお祭だけが甦るのではない。唐の泰平の世の全てだ。泰平が戻ればこそ、自ずと我らのお祭も甦る。そうなるには、春琴が息巻くように悪者どもを退治しなければならぬ。それにはどうしたらよいのか。私は剣や槍を手にする者ではない。来年か、遅くとも再来年の春の貢奉に間に合うように、都に上る。試験を受け、お上に仕える身となり、唐朝の再興に努める。誰にも告げたことのない私のこの考えを、そなたたちはどう思うかい」

「蘭おじさまには黙っておられたのですか」

綜が言う。

「言えば、一緒に長安にいくと言い張っただろう。蘭くんには日本にいつてもらいたかった」

「伯父さまは大丈夫なのですか」

「私がそんなに頼りなく見えるかい」

「長安では、蘭おじさまがいなければ、どうなっていたかわからなかったって、幾度も話しておられるではありませんか」

「今日まで生きてこられたのは蘭くんのお蔭だ。それは間違いない」

「で、今度は蘭おじさまがいらっしやなくて、長安にいかれるのですか。」

「都ではまだまだ大変なことがたくさん起こっていると申すではありませんか」「貢拳を受ける決意はついた。その気持ち揺るがなければ何があっても大丈夫だ」

「蘭おじさまが帰ってこられてからいけばよいではありませんか。秋には帰ってこられましょう」

「そんなに私が心配かい。貢拳を受けに行くなどあり得ないことと思ってるのかい」

「いえ、そうなる前から思っていました」

「綜は意外なことを言う。」

「そうなのかい」



「父と母が、姉を嫁に出すのを考えようとしてもしていないのは、たぶん、だからなのでしょう」

「何かい、藹たちは、私が貢挙を受けるだろうと考えたりしているのかい」  
「口に出しはしませんが、心の内で思っているような気がします。それに、蘭おじさんもわかっていたのでしょうか。韋一族の全てを背負い込もうとしたり、唐朝の歴史まで担おうとしたり、そこまでしなくてもよいことを考えると、伯父さまのことを言っていましたから」

「そうなのかい」

「だから、秋にはきつと帰ってこられましょう。敬竜さまを日本に送られて、次に伯父さまとともに長安にいかれるおつもりではないでしょうか」

蘭は知っていて日本に向かったのか。

春琴が前に出て、

「蘭おじさまがいらっしゃらなくても、その代わりなら、この私にお任せくださいませ。旦那さまをお守りし、貢挙に合格していただくようにすること

など、平陽公主さまがなされたことに比べたら、いともたやすいことですか  
ら」

「おまえが、蘭おじさまの代わりですか。これはおかしい」

綜は笑う。

「おかしくなんかありません」

「おまえはまだ十二歳、しかも本当は女ではないか。それが、蘭おじさまの代わりになるなんて笑うしかない」

「女だって平陽公主さまのようになれます。男だって兄さんのように情けないのいますけど」

春琴の息巻く様子に、韋荘は苦笑いし、

「いや、そなたの気持ちは嬉しいことは嬉しいが、そなたに守ってもらわなくても大丈夫だ。都には胆といく。胆があれば何の心配もないことは、そなたもわかつているだろう」

「いえ、父だけでは頼りになりません。父には持病があります。都にいつて

貢挙をお受けになるとすると、少なくとも半年か一年に近い長旅となりましょう。父だけではだめです。私が参らねばなりません」

「かえって足手まといでしょうな」

綜が言うと、春琴は、

「私は楊爺の生まれ変わりだとずっと聞かされてきました。それが本当かどうかはわかりません。しかし、楊爺がここにいたら、旦那さまときつと御一緒に都にいくでしょう。父などに任せはしないはずです。だったら、私がいなくてよいはずがありません」

ますます勢い込む春琴の様子に、韋荘は、

「まあ、そこまで言うのなら、頭ごなしに無用と言うのはよしておこう。どうだろうか、胆と彩霞の二人が許すのなら、よしとしようかい」

「本当でございませうか」

韋荘はうなずくが、胆と彩霞の二人ともがよいとは言わないだろう。その一方で、春琴が一緒であれば、今回のように旅が楽しくなるだろうと、思い

はする。

「では、旅の途中でいかなる盗賊に襲われましたようにとも、旦那さまをお守りできますように、さらに修行を励むことといたします」

「せいぜいそうしてくれ」

春琴はぐるぐると腕を回す。

「こんなことでよいと思うかい」

こつそり綜に耳打ちする。

「春琴は好きにやらせるしかないでしょう。あれは強情ですかなら」

「春琴だけでなく、私はどうだろう。やはり好きにやらせるしかないと思う

かい」

綜は少し考え、

「釣りの妙味を伯父さまは知ろうとなさらない。それもまた伯父さまらしいのでしよう。潤州にいらしたときと比べたら、伯父さまは活き活きとされています。蘭おじさまも、同じように感じられたので日本にいらしたのでは

う。伯父さまが思いを遂げようとされているのをよいことと、誰もが思うはずです」

「これでよいとそなたも思ってくれるか」

「正直、そこまでなさらなくてもと言う思いはあります」

葵州での穏やかな暮らしを捨ててまで都にいかなくても、思わないでもない。だからこそ、心を堅固なものにするためにここにきた。

綜も春琴も、貢挙を受ける意図は理解してくれた。若い二人に話し、後戻りはあり得ない。

**景福元**（八九〇年夏）

葵州羅漢寺の裏門で、

「ここで別れよう。もう中へ戻りなさい」

「いえ、お姿が見えなくなるまで、お見送りします。この前もそうしました。

その前もです」

「この雨ではないか」

「兄上こそ、早く舟の内へお入りください」

強い雨が降り注ぐ。韋荘は笠を被っているが、藹は葛の頭巾を載せるだけで雨を避けようとしない。

門外の水路に一艘の舟。櫓を漕ぐ若い僧とともに貫休の好意だ。楊胆と春琴が雨に打たれて立っている。

これより貢奉受験のため長安に向かう。弟がこの前と言ったのは十二年の昔。その前はさらに十九年をさかのぼる。虢州の莊園から二度長安に上り、弟は小さな丘を越えた先の川で見送ってくれた。

今朝は家で彩霞、陸氏、淑娥に別れを告げ、いましがた貫休への挨拶を済ませ、粽と隻念に見送られ、藹一人が門にまでついてきた。

「後を頼んだぞ」

婺州はいまは比較的穏やかであるとはいえ、いつ何があるのかわからない。

蘭は日本にいったまま一年余りを経ても帰ってこない。藪だけでは心もとないが、弟には陸氏がいる。莊園が破壊されて胆の小屋に逼塞していた間もよく一家を支えてくれた。

春琴が同行することを彩霞も楊胆も拒まなかった。彩霞は相変わらず父に對して冷やかである。彩霞が春琴を送り出すに当たつてどのようなことを言つたのか、韋莊は全く聞いていない。楊胆はここのもとも憂い顔だ。実のところは、春琴がいくのを快くは思っていないのだろう。綜は「本当にいくのですな」と何やら怒つたような口調で春琴に向かつて言つていた。淑娥は花を折り採つて、舟の内を飾るようにと春琴に渡した。幾種類かの種も添え、都で蒔くようにとも言つた。

貫休は韋莊の決意を壯として讚えた。

「都に着きましたら、青竜寺の蟻光(ぎこう) 禅師を訪ねられるがよろしかろう。先に手紙を送つておきました。昔の修行時代からの友人、御遠慮なさるには及びません」

五台山で修行を共にした間柄だと言う。蟻光という奇妙な名は本来の僧名ではない。

青竜寺は長安でも有数の仏寺。かつて皇族の流れを引く高僧がいた。それを儀光(ぎこう)という。父は瑯琊(ろうや)王で、瑯琊王はその父とともに、則天武后に反旗を翻した。反乱はあえなく失敗し、瑯琊王もその父も誅殺された。儀光はまだ纏綿にあり、乳母に抱かれて都を逃れた。則天武后はその行方を厳しく詮議し、儀光は乳母に匿われて成長した。しかし隠せぬものは高貴な血筋で、年々現れ出てくる非凡な状貌に、素性が知れるのは必定と、儀光八歳の折に、乳母は儀光に全てを告げて野に置き、命を天に委ねた。

郡守の夫人が通りかかった。常の男児と異なるありさまに驚き、五百錢を恵んだ。儀光はそれを携えて道を歩み、一人の老僧に出会った。「汝、出家を願うや」と老僧に尋ねられ、儀光は「もとより願うところ」と、五百錢を差し出した。老僧はその場で儀光の髪を剃り落とし、東北数里の寺へと連れた。儀光を寺主に預け、老僧は忽然と消えた。



儀光は修行を積み、幾年かするうちに、則天武后は死に、弾圧されていた皇族たちに日の光が再び注ぎ、儀光は叔父と再会した。叔父は儀光の並々ならぬ風貌を見て、還俗させて娘を添わせようとした。儀光は叔父の申し出を喜ばなかった。叔父の娘は儀光に惚れ込み、命をも辞さぬ覚悟のほどを見せ、儀光は断り切れず、「今夜、沐浴して後にお会いしましょう」と娘と約束した。儀光は湯に入った。娘は湯殿を覗き、この時を逃すまいと、薄衣を一枚纏っただけの姿で押し入り、裸の儀光に抱きついた。儀光は剃髪用の刀を手に、己の股間を指し、「この根があるから欲にも迫られる」と、刀を当てた。娘は儀光の腕を掴んだ。儀光は振り払い、すっぱりと断ち切った。血が噴き出し、儀光は気絶した。叔父は医師を呼び、根を断った跡を火で焼いて塞ぎ、治療すること数ヶ月、ようやく命を取り留めた。

これより儀光は禅の奥義を窮め、開元二十三年六月二十二日、数千の弟子に囲まれて死んだ。葬儀の日、棺に乗せた車が長安城を出ると、数百の白鶴が空に舞い、五色の彩雲が車を覆った。

貫休の友人は、縁あつて青竜寺にきて、この儀光を遠く慕い、しかし己はせいぜい蟻のようなものと、戯れに蟻光と名乗った。

蟻光のことは前から聞いていた。韋莊の七世の祖は、則天武后のもとで宰相となり、儀光を追う側にいた。遠く古い話ではあるが、蟻光に会うのは何かしらが引ける。それに婺州を離れてまで貫休の世話になり続けるのもあまり愉快でない気もする。

「都には崔胤どのがおられます。東呉くんもいます。あちらでのことは何の心配もないでしょう。もとより慣れた長安でございますから」

貫休にはそのように言った。

「同じ長安でも今と昔は違ひましよう。蟻光禪師もそう申しております。それと、崔胤どのは、淡くお付き合ひされるくらいがよろしかろうかと愚僧は思います」

貫休は、かつて韋蘭からも聞かされた崔胤の出生にまつわる奇談を口に乗せた。

「崔胤どのの前世は僧侶であったとか申します。八歳までは前世の功によってなお肉食を拒んでおられました。身の内よりふつと湧き出る権勢欲に駆られ、俗世に戻られました。崔胤どのの叔父上の崔安（さい あんせん）どのは、『我が一族を滅ぼす者があるとすればこの子であろうか』と、幼い崔胤どのを見て言われたとか。いずれも定かならぬ風聞ではありますが、根も葉もないとも言えますまい」

崔安潜は、かつて宰相であった崔胤の父親の弟。朝廷で長く様々な職を歴任していまも存命。黄巢が旗揚げした直後に官軍の指揮を執ったこともあり、田令孜の兄が賭けに勝って節度使となつて成都くる前にはその職にあった。洛陽で最初に会つたときの崔胤の印象があまりよいものではなかったが、金陵で同志を誓う合う仲となつた。貫休の評は不思議と的を射ることがある。「御忠言まことにありがとうございます。長安に着きましたらきつと青苧寺もお訪ねしましょう」

貫休の好意を敢えて拒む理由はあるまいと礼を述べた。

羅漢寺の門を出て、弟を長く雨に濡らすまいと、舟に向かつてすばやく歩む。

「難しい旅になるかも知れぬ。頼むぞ」

楊胆は腰を屈めて頭を下げ、春琴は、

「お任せくださいませ」

と、力強く答える。

胆はいまも渋い顔だ。娘を連れるのがやはり不本意なのだろう。

春琴の方は澁刺としている。この一年ほどで凛々しい若武者になった。切れ上がった眼差し、細く結ばれた口元、しっかりと張った顎。これで娘であるとは想像もつかない面魂だ。それでもよく見れば、雨水が滴り落ちる指は細くどこか華奢である。

舟の屋根の下に半身を入れ、門を見返る。弟がまだ立っている。

今度こそは合格の報せを携えて帰ってこよう。三度も弟を落胆させてはいけない。弟の姿を目に納め、舟の中に入る。

続いて春琴が乗り込む。袖から伸びる腕は日焼けし、肌が艶々とまぶしいばかりだ。最後に胆が乗って、舟が動き出す。

この時期の旅、危険を伴うと覚悟しなければならぬ。己の身を守ってくられるつもりでいるこの父子であるが、二人にもしものことがあったならば、彩霞に会わせる顔がない。彩霞にとつて二人は、この父とは比べものにならない大切な存在だ。己は合格し、この二人を無事に連れて帰らなければならぬ。

舟は上をすっきり覆われ、中は狭く暗い。淑娥の花が小さな慰めであるが、打ちつける雨の音が重い。この天候のせいばかりではなく、意気揚々とした旅立ちでない。志はあっても、それだけで事が為し遂げられるものではない。長安の情勢は厳しい。不出院で綜と春琴に話したのは一年以上も前。その年にはまだ都にいけるような情勢にならなかった。いまでも樂觀できない。だからこそ皇帝のために働くのだとも言えようか。

金陵で話題に上った宰相の張濬は、大方の予想通りに李克用との戦いに敗

れた。都に逃げ帰る張濬に、宦官の楊復恭が刺客を差し向けた。張濬は危険を察知し、長安の周囲に勢力を張る三人の節度使の誰に保護を求めるかで、韓建（かんけん）を選んだ。三人の節度使とは李茂貞（りもてい）、王行瑜（おうこうゆ）、韓建。李茂貞は西の鳳翔を拠点として二人の中で最も強大、王行瑜は北の邠州を拠点とする獍猛な武人、韓建は東の華州を拠点として民の心をよく掴んでいるという。李克用との戦いで韓建は副将を務めていた。

楊復恭は憎悪する張濬を追い払い、李克用とはもともと親密な関係にあったことから、戦の後始末を難なく片付け、朝廷の権力を一身に集め、いよいよ専横を極めた。憤懣やる方ない皇帝は、楊復恭を鳳翔監軍に任命し、都の外に出そうとした。鳳翔監軍とは鳳翔の節度使、李茂貞のお目付け役である。李茂貞の監視を大物宦官にさせる意味はそれなりにあるにしても、楊復恭は「引退させていただきます」と宮中より出て、長安の屋敷に居座り、あくまでも都にいて宮廷を牛耳っていいこうとした。対する皇帝は、豪胆だが無分別な一人の宦官を使い、力づくで楊復恭を倒そうとした。不意を突かれた楊復

恭は都を飛び出て興元に下り、一応は皇帝が勝利したものの、楊復恭がいなくなると朝廷の力そのものが大きく削がれてしまった。三人の節度使が増長し、楊復恭を完全に倒して、自分たちの力を大きくしようとした。皇帝としては楊復恭は憎いが、さりとて三節度使をこれ以上強大にさせたくはないと、皆に和解を命じた。

そのころに都から東呉くんの手紙が届いた。志を同じくする者が都に集う時がきたと記してあった。それが昨年 of 終わりのことで、崔胤は、楊復恭が興元に出たのと入れ違いに都に入っていた。

今年になって、李茂貞と王行瑜の二人は、皇帝の許可を得ずに興元への攻撃を始め、それがいまも続いている。都の平和はまだ遠いが、来年の春の貢奉は実施される予定だ。

旅は始まった。先が見えない。しかし、己の気持ちに揺らぎはないはずだ。ここ幾年間かをかけて固めてきたのだ。

婺州にきて間もなくのころに、この同じ水路を初めて巡った。婺州が懐か

しくあたかも故郷であるかのように感じた。それはなぜだったのか。ここが我が終の棲家になるとの予感だったのか。婺州での日々は平穩だった。それを捨てての旅だ。

弟はまだ雨の中に立っていようか。

舟が大きく揺れる。広い川に出た。窓を細く持ち上げる。強い雨脚で何も見えない。

故郷とも感じる婺州を己は出ていく。幾度も考えて決めたことだ。この志は揺るがない。

しかし、本当にそうなのか。

「兄貴、こんな雨の中を、どこにいくんですかな」

もしもここに、蘭が不意に乗り込んできたならば、どう答えるだろうか。

「いや、何、そこらをひと巡りしてみようと思つて」

「この大雨に。酔狂なことすな」

「雨だからこそだ。鬱屈する心を暢ばすのだ」



「それなら、狭い唐土にいることはないでしょうな。俺と広い海へいきませんかな」

窓を閉じる。蘭は遠くにいったままだ。

「十二年の昔に少しは戻ったろうか」

かつてのものよりかなり小ぶりながら、古い木材を継ぎ合わせて、お狐さまの祠ができあがった。ささやかな供物を捧げ、楊胆、春琴とともに額ずく。土に触れると涙が落ちる。安邑坊のこの土地にお狐さまの祠が再び建ち、貢奉に挑む己がいる。

あの日、東の市の武大人の店の屋根裏に身を潜め、外の騒ぎが幾分かおさまったところに外に出た。安邑坊の門の前に無数の屍骸が積み上げられていた。町はさながらこの世のものでなく、この店も例外でなかった。祠の扉に刀が突き立ち、お狐さまの無力を責めた。しかし、お狐さまは阿枉の身を守って

くれていた。

それから十二年。壁の下を潜って逃げてからの後の長安の様子は、東呉くんからも聞き、それなりに覚悟はしていた。都門から入ったのでなければ、荒涼とした眼前の風景を都の内であるとは認めずにするところだった。安邑坊の店の跡地には、それでもまだ昔を偲ぶものがあつた。半ばは崩れても一応は三方を囲む塀があり、頑丈な造りの倉は外壁を保っていた。池は乾上り、お狐さまの祠は礎石だけがあり、塀際にお狐さまの像の胴体がころがっていた。阿枉のために刃を受け止めてくれた痕がまだ認められた。

長安に到着したその日は、目の前の光景に意気阻喪し、崔胤の屋敷を訪ねず、貫休の旧友のいる青竜寺に足を向けた。無常觀に誘われたのかも知れないが、単純にそちらの方が門から近くもあつた。蟻光は貫休とは対照的に痩せた飄々とした風貌、俗臭を感じさせなかつた。蟻光の好意に甘んじ、青竜寺の宿坊を当面の仮の住いとした。

祠の前で香を焚く。低く垂れ籠めた灰色の雲に煙が昇る。

「阿枉はお狐さまを日に幾度となく拝む娘だった。阿枉が生きていてくれた喜びと、他の皆が殺された悔しさと、己を責める思いと、何とも言いようがなかった。もしあのとき蘭くんがおかしくならなければ、私が先に変になっていただろう。阿枉なしでは、あのときの蘭くんと私はどうすることもできなかった。お狐さまに救っていただいた阿枉は、しかし、病で死に、私ばかりがここに戻った。いかなる理由によるのか。お狐さまの摩訶不思議な御加護なのか。ここに祠を再び建て、十二年昔の阿枉のように、これからはお狐さまに祈る日々を送るとしよう」

祠に祈って、周囲を顧みる。店の跡地の瓦礫はほぼ片付き、これから住む小さな家が建ちつつある。

「己一人がなぜなのか」

ここばかりではない、当時都にいた人のほとんどがいなくなり、己が戻ってきた。いつかわずかでも都は昔の姿を取り戻せるのか。遠く婺州で、唐の盛時への回帰を夢みて都にやってきた。しかし、都の変りようを見れば、己

にできるのはせいぜいこの祠を再建するところまでのようにも思えてくる。

嘆息する韋荘に、

「旦那さまには生きていくべき理由があるからでございませう」

後ろにひざまずく春琴が言う。

「阿枉にこそ生きていくべき理由があった。兄がいた、伍七がいた。阿枉は自身のためにお狐さまに祈ったりしなかった。兵士にとられた兄のため、恋する伍七のため、皆のために祈っていた。その純粹な心をお狐さまは憐れみ、救ってくださったに違いない。それでも阿枉は死んだ。結局のところ、理不尽としか言いようがないのか」

「阿枉さんのことはわかりません。しかし、旦那さまには生きてなさるべきことがあります。それで都に戻ってこられたのでございます」

「貢奉を受けることをそのように言ってくれるのか。偶然にも生きていられたから、こうなっただけのようには思えない」

都の現実には、固かったはずの決意が崩れかけている。

「お狐さまの御加護でございます。天がお授けになったお役目でございます」  
「貢奉に合格し、お上のため、民のために身を捧げるのが、天より授かった役目と思いたい。それは残念ながら我が分ではないようだ」

「なぜでございますか。世の人々はまだ意識はしていないでしょうけれども、旦那さまが世に出られ、お偉くなるのを待っているのでございます」

弟の藹が遠い昔にそのように言ったことがあった。

「そのような大それた人間ではない。志を固めて婺州を出た。それでも都のこの変わりようには心が萎える。その程度の男だ。情けない」

「そのようにおっしゃってはなりません」

「私などは所詮そのようなものだ」

「いいえ違います」

「絃、よすのだ」

楊胆がたしなめる。

勢い余って立ち上がっていた春琴は腰を落とす、口を閉じる。自ら男とな

つて絃と名乗り、平陽公主を理想と仰ぐだけに、春琴の言は常に雄々しい。その目で見上げられ、顔を逸らし、灰色の空を見る。

「都の荒んだ風光に気が弱くなった。これでは何のために婺州から出てきたのかわからない。こうして祠ができ、この家にも住めるようになれば、我が心も自ずと元に戻っていくのだろう。都にきたのは昔を思つて泣くためではない。春琴がいま言ってくれた通りに私も思うようにしよう。お狐さまに祈ろう。我が一人の立身出世のためではない願いだ。お狐さまは必ずやお力を貸してくださいさう」

楊爺がやっていた通りの作法で祈る。祠が甦り、時が昔に返つて、我が力もそのときのものに戻れば、必ず合格する。揺るぎない自信があるときにはあった。それを取り戻せばよい。お狐さまの御加護を信じよう。楊爺の生まれ変わりの春琴がここにいる。気持ちを挫けさせてはならない。

こうして家も建ちつつあるのだから、都での新たな暮らしは順調過ぎるほどと思ふべきだ。十二年前にそのまま戻るのではないと、敢えていない者を

思い出すのはよそう。

己は恵まれている。お狐さまの御加護もあるうが、崔胤の助力が大きい。崔胤の屋敷は、荒れ果てた都の中で異彩を放っている。崔胤は同志の上京を喜んでくれ、援助を惜しまない。家が形になつてきているのもそのお蔭だ。

崔胤に同志として遇せられているのは幸運だ。いま幾人かいる宰相の中で最も力を持つているのは崔昭緯（さいしやうい）。崔胤と四代前の祖を同じくする。崔胤の叔父の崔安潜も朝廷に並ぶ。崔一族の人々や朝廷内外の知人に、崔胤は韋荘を引き合わせてくれる。『秦婦吟』の作者と言えば人はすぐに記憶してくれ、もとより韋荘は交際上手であるから、会えば好い印象を必ず与える。貢挙の可否は答案の出来不出来だけで決まるのではない。その年の試験を担当する高官たちの好悪に左右されるところが大きい。

祠の再建から十日もしないうちに安邑坊の住いが完成し、移る前に、蟻光に頼んで、弟たちの菩提を弔う法要を営む。いずれは杜陵にある韋一族の墓所にきちんと葬りたい。そのためにも貢挙に合格しよう。

引越しは青竜寺から少々の荷を運ぶだけ。倉の横に寄り添う小さな家に、胆が荷を納める。狭くとも勉強するための部屋もある。

胆がいなければこうも早くには完成しなかった。朝早くから夜遅くまで休まず働いてくれる。安邑坊に住むことは、胆には複雑な思いがあるのだろう。楊銀と助がここにあった店から金を盗み出し、それが荘園の破滅にもつながった。胆はその罪を己自身のもののようにいまも背負い続けている。

新居の祝いに東呉くんが酒を提げてくる。齢のころなら六十くらいの小柄な女を連れる。丸顔で、真黒に日焼けして、一見して田舎の農婦のようだが、その林婆さん、

「あたしは生まれてからただの一度だって、都の外なんかに出たことがあります。あんのです。あの洗城のときも、沙陀の荒くれ者どもが大暴れしたときも、この都にちゃんといました」

代々の都生まれの都育ちであることを自慢する。初めての挨拶もそこそこに話し出したら止まらない。皆を笑わせ、自身もころころと笑う。善良で素



朴な老女に見えるが、洗城で家族を失ってから十二年間、一人でここで生き抜いてきたのだから、それなりに肝の据わった女ではあるのだろう。

この林婆さんを、男三人の暮らしでは何かと不便だろうと、頼みもしないのに東呉くんが連れてきてくれたのである。東呉くんは春琴を男だと思いついでいる。

「何でもやらせて下さい。何でもできると言っています。給金はたつぷり払ってありますから」

「ええ、ええ、何でもできますとも。赤ん坊を取り出すところから仏さまを葬るまで、人様が必要とすることでできないことは何もあります。掘り、泥棒、かっぱらい、かどわかしに強盗と、たとえ悪いことでも旦那さまがやれとおっしゃるのならいたしましょう。ただし、お上に捕まってお縄を頂戴するのはこの婆の仕事ではありませんので、それは旦那さまにお任せいたします」

そう言う林婆さんを横に、

「不都合があれば、いつでも追い出してください。結構です」

東呉くんは、調子に乗る林婆さんをたしなめる。

東呉くんは、新しい部屋で、自分の提げてきた酒を開け、しばらく飲んでから帰り、

「この出入りは、いま少し頑丈にした方がよいぞ。都はまだ何かと物騒だ」  
胆にそう言い置き、胆は自分でこしらえた門を揺すって思案する。

林婆さんは何やらつぶやきながらそこらを歩いていて、

「これだけ広い場所があつて、遊ばせておいてはもったいなさすぎましよう」と、韋荘に、ここを耕して畑にし、あそこには何を植え、ここには何を育てればと、楽しそうな計画を並べ立てる。土地ばかりが広くなった長安のあちこちを耕して暮らしてきたことを言い、ここらの土地には瓜に合っているのだの、腰につけた袋から種を取り出してこれは何だのと、いつまでも止まらない。

「がらんと殺風景だから、好きにしてくれて構わない」

韋莊が言うと、

「あそこは水を引くから駄目だ」

胆が不機嫌そうに口をはさむ。狐潭を横した池のあつた場所には手を出させまいとする。

「淑娥から預かってきた種もあつただらう」

春琴に持つてこさせる。

林婆さんは包みの内を見るよりも、じろじろと春琴を上から下まで吟味し、それから種を見て、

「これはこれは、美しい花の咲くものばかり。この都の土にうまく合いますようか。これは婆の腕の見せどころです」

春琴はそのまま井戸端にいつて水を汲み、桶を担いで家に運び入れようとする。林婆さん、種の包みを懐にねじこむや、駆け寄り、

「お嬢さま、そのような力仕事はこの婆にお任せいただきます」  
桶に手をかける。

「お嬢さまとは何のことか」

春琴が怒ったように言う。

「水運びなど、この婆がきましてからには、もう若いお嬢さまにしていただくには及びません」

林婆さんはぐいと桶を引く。春琴は渡すまいとする。小さな林婆さんの方が力がある。

桶の取り合いをする二人に歩み寄り、

「お嬢さんとか言ったようだが、これを娘と見てのことなのかい」

「見てのことなのかいとは、よもや、娘ではないのですか」

林婆さんは春琴をまた上から下までじろじろと見る。

「見ての通り、これは楊絃という少年だ」

韋荘が言うのに合わせて、春琴は肩をいからせる。

林婆さんは手を叩いて笑う。

「世間の目は誤魔化せましても、この婆さんには通用しません」

春琴は口を尖らせ、目も吊り上げ、

「楊絃です」

背伸びまでして言うのが可笑しく、

「これから一緒に住むのだ。隠し続けることもできまい。しかし、どうしてわかったのかい。若い男にしか見えないはずなのだが」

「まあまあ、上手に化けてはいます。昨日今日術を覚えた狐並みの技はありますよ」

「その程度のものかい」

苦虫を噛み潰したような春琴の隣で林婆さんは一人どころどころと笑い、手を打って、

「そうそう、男によく化けたと申しますと、老練な狐よりも上手だったのが張簪（しょうさつ）さまの奥方さまがいました、みなさま、その話、御存知ですか」

韋荘が知らないと言うと、林婆さんは二の腕をばんばんと叩き、

「むかしむかしのことで、郭子儀（かくしぎ）さまの御家来であった張訢さまは、ふとした病で亡くなられまして、息子も男の兄弟もありません。このままでは夫の仕事を継ぐ者がいないと、奥方さまは一計を案じまして、張訢さまの弟になりすまし、郭子儀さまの前に出ました。奥方さまはなかなかの威丈夫ぶり、狙い通りに亡き夫の職務をそっくり授かり、その全てを御立派にこなしただけでなく、兄より有能との評判をとって、とんとん拍子の出世、ついには朝廷で御史太夫を勤めるまでになりました。お年を召して、職を降りられるときになって、初めて亡き夫の妻であると明かしたのですが、それまで誰一人として気づく者はありませんでした。しかし、どうでしょう、この婆が会っていれば、誤魔化しはきかなかったでしょう」

「狐に化かされない特別な秘術でもあるのかい」

「何もございせん、こんな婆さんになりましたも、あたしは女。よい殿御を見れば胸がときめきます。こちらのように凜々しい若者が本物の殿御でありましたなら、これほど近くにいて、桶を取り合う手と手が触れもしていな

がら、胸が早鐘のように打たないでいるはずがありません。この頬も少しも赤くなっておられません。殿御でない何よりの証拠です」

林婆さんは顔を突き出して頬を叩く。韋荘は笑うが、春琴は憤然と、

「私は男。お嬢さまとか勝手に言わないでください。この家の使用人の絃です」

荒々しく林婆さんの手を桶から引きはがす。

林婆さんは抵抗せずに、

「まあまあ、おなごでも、これはこれはたいした力です」

大袈裟に驚いて見せる。春琴は怒り声で、

「男です」

足音高く厨へと歩く。

いくら無理をしても娘であるのは完全には隠し切れないのだろう。もし女の姿をすれば、娘らしさが匂い立つ年齢だ。

林婆さんは、胆と春琴を少々不愉快にさせはしたが、安昌坊の暮らしは随

分と明るくなる。本人が言った通りに何でもできて実に重宝。胆を連れて出かけるときも林婆さんがいてくれると安心である。

崔胤のお蔭で都人との交際が広がる。昔ほど派手な酒宴はないが、妓女が同席することくらいはある。都で管弦の響きを聞くとかつての平康坊が思い出される。何軒か営業している妓楼があるという。いつてみはしない。銀犁の記憶は、都にきてからは心の奥底に沈めたまま、呼び覚ますようなことはしない。いまは勉強に専念するのが何よりも肝要だ。

十二年前に戻ったと感じられても、年齢までは元に返らない。勉強部屋で試験に備えて最後の努力をするが、明らかに物覚えが悪くなったと感ずる。根気も続かない。弟の藹がうらやましい。いまも一度読んだものは忘れずに記憶できるし、筆を持てば一日写し続けて倦むことがない。婺州でどうしているかと思いを馳せる。その弟に今度こそ合格の報せを持って帰ると心に決めて出てきた。己は五十七歳、これより後はない。春琴や綜の前で立派な決意を述べた。ここで合格しないではいられない。従前のようにには埒らぬ勉強



に、焦りが生じる。

試験は日に日に近づく。秋から冬に向かえば、都の風光は一層寂しくなり、それが気持ちを挫けさせ、落ち着かなくなる。何もかもうまくいかないような気分になり、崔胤と会うのもなぜか次第に負担になる。洛陽で最初に会ったときの印象が戻ってくる。金陵で東呉くんと三人で同志の契りを結んだ。崔胤は様々に助力してくれる。だが会うことが重なると、逆に、本当に同志であり友人であるような気がしなくなってくる。

崔胤が言ったように、志を同じくする者が朝廷に並び立つべきであるのは論を待たない。宦官は禁軍の指揮権を握っている。節度使の横暴は度を超している。唐朝を中興させるには、正しく学問を修め忠義の士が結束しなければならぬ。崔胤はそのような仲間を集めている。東呉くんと友情も大切だ。それでも崔胤に世話になるのは重荷と感じられる。

ある宴席で隣になった男が耳元で不意に「淡い交わりをお心がけよ」ときさやいた。聞き返そうとすると、他事にまぎらわしてその男はいつてしまっ

た。東呉くんに見ると、朝廷で地味な仕事をしている人である。数日経ってから、崔胤は何気なくその男の名を出し、「人は外と内とで多かれ少なかれ異なりましょう。外では石像のようにおとなしく、家では酒乱、妻を罵り、下僕を撃ち、ときに殺してしまふ。そのような内側を見てしまつては、誰が信用できませんようか」。韋荘は重い気分になった。その人は何かの忠告をしてくれたらしかつた。

婺州を出たときの貫休の助言が思い出される。大事な試験の前に、詰まらぬことに気を使わずにおこうとするが、勉強に集中力を欠くようになる。これではならぬと、切羽詰つた気分になる。

冬の寒さが増し、南方の温和な気候に慣れた体に応える。筆を持つ手がしびれ、二十年前の試験の有様が思い出される。あの日、春になつたと言つても寒さは真冬と変らなかつた。真夜中に起き、明け方の最も冷え込んだ時間に、試験場の門が開くのを足踏みしながら待った。体の芯まで冷え切つてようやく門が開くと、一人一人本人であることが厳密に調べられた上で、試験

場に入ってしまった。大きな荷を担いで迷路のような細い通路を辿り、自分に割り振られた部屋を探した。黒い壁で仕切られたそこは、息が詰まるばかりに狭いだけでなく、凍りつくように寒かった。いよいよ試験が始まり、問題用紙を開くと、胸が破裂するかと思うほどに早く強く鳴り、そのときばかりは寒さを忘れた。それからの一日は長くてまるで一年のようだった。ところが、夕方に近づくと急に時は速く流れ出し、寒さでかじかんだ手を擦り、緊張で震える腕を押さえて、必死に答案用紙に字を記した。

あのときとまた同じことをするのか。そう思うと、しびれた手の指がいよいよ動かなくなる。

一つ嬉しいことがある。楊胆が工夫に工夫を重ね、屋敷の外から水を引き入れるのに成功して、狐潭の池が甦る。水が溜まっていくのを見て、春になれば、池の周りに林婆さんの植えた花が開くようになるだろうなどと想像すると、少しは気持ちが和む。そのころは試験も終わっていて、合格して、心から春を楽しめるようになるうか。

水を引くのにかなり無理をしたためか、胆が例の熱病の発作を起こす。いつも通りの経過をたどれば十日もするうちに元に戻る。少し熱が下がると、寝ている間も気になっていたのだろう、狐潭の形を整える仕事を胆は再開する。泥をかぶつての仕事で、体を冷やしたのが悪かったのだろう、様子が急変する。

「この病で、多くの者を見送りました」

倒れた胆を見て、林婆さんが顔色を変える。

かつて韋荘も罹り、阿枉が死んだのと非常に似た様相だ。林婆さんが秘蔵の薬草を煎じて飲ませる。熱は一時的に下がったものの激しい下痢が止らない。春琴は懸命に看病する。

「この大事なときに申し訳ありません」

韋荘に詫びたのが最後、胆はあっけなく息を引き取る。

蟻光に頼み、青竜寺の片隅に楊胆を仮に葬る。貢奉に合格したならば、皆とともに杜陵の墓地に移すつもりだ。読経を聞きつつ、胆の生涯を思う。

胆はお祭の日に初めて莊園にきた。婿入り先が決まっているのでなければ、莊園に留め、楊爺の後継者にしたのにと残念に思った。その後、結局は楊爺の後継者となり、莊園が減んだ日に楊爺から後を託された。そのときに何を言われたのか、胆の他に知る者はない。

胆の父と兄が莊園の滅亡に関わったのを自分自身の罪であるかのように負い続けてきた。蘭がかつて言っていたように、それが胆の精神を消耗させ、病の元になったのは間違いない。

安邑坊にきて、胆は池に執着していた。熱がまだ下がり始めたばかりで、泥にまみれたのは、狐潭を模した池ばかりは、自分の力で早く元に戻したかったのだらう。貢挙の試験の前までにどうしても間に合わせたかったのだらう。狐潭のお祭を復活させて春琴に見せたいと、蘇州で胆に話した。貢挙を受けるのはお祭を復活させるためでもある。五十半ばにもなって試験に挑む姿を間近に見て、胆は居ても立ってもいられず、莊園の復活は無理にしても、安邑坊の池ばかりは甦らせようと懸命だったのだらう。

胆を重荷から解放してやるつもりでいたのが、返って逆になってしまった。お祭のことなど言わず、長安にも連れてこなければこうはならなかった。

遠く彩霞を思う。彩霞はまだ胆の死を知らない。すでにこの世にいない胆を彩霞は彼の地で想っているか。胆も婺州にいままで通りにいたならば、発作を起こしてもいつものようにおさまったはずだ。まだ死ななくてよかった胆の寿命を縮めてしまった。彩霞が大切に思う者をまた一人この父が奪った。

棺を覆った土に雪が舞い落ちる。

春琴が残った。彩霞を我が子のように育ててきたこの娘を無事に連れて帰らなければならぬ。試験よりもその方が余程大切だ。

年のせいで涙もろくなつた韋莊に比べ、父を失い、悲しく心細いであろうに、春琴は少しも泣いたりしない。

青竜寺からの帰途、

「旦那さまのお供で参りました甲斐がありました」

春琴が言う。父に何かあったときにその代わりをすると行って都にきたのだ。

春琴の健気を越して悲壮とも思えるばかりの声に、思わず、

「頼んだぞ」

と応じ、すぐに、これは春琴に無理を強いるものではないかと思り返す。

しかし、春琴がいてくれなければ、この大事ないまを乗り越えられそうになり。林婆さんと二人だけでいたならば貢奉に臨めるとは思えない。

年末のある夜、胆が死んだのをどこかで見っていたのか、賊が押し入る。倉からただならぬ音がして、目が覚める。倉は見掛けは立派でも、盗つて得するようなものはない。賊の怒り声がして、激しく戸が打たれる。春琴が剣を持ち、林婆さんが棒を手にする。賊が体をぶつけてきて、戸が内側にたわむ。二度目のときを狙って春琴が横に戸を引く。賊が前のめりに転がり込んでくる。そこに一刀浴びせる。続く敵の頭を林婆さんが一発殴る。外の一人が悲鳴を上げて逃げていく。

大した賊でなく、春琴と林婆さんの活躍で撃退できたが、翌朝早く、東呉くんは頼んで、表通りに面した門をさらに頑健なものにする。この際、崔胤の屋敷に移ってはどうかと東呉くんは勧めてくれるが、崔胤にそこまで深く頼る気にはなれない。

そうこうするうちに、新しい年となり、試験までの日を数えると、新春を祝うどころではなく、試験場でのかつての苦しさがしきりに思われて、夜も眠れない。決意を固めて婺州を出てきたのが、ことごとく齟齬をきたしてしまった。こなければよかったとの後悔と、迫りくる試験の不安とで、書物を開いても文字が目に入らず、食べる物もろくろく喉を通らない。春琴が心配してくれるが、それがなぜか気持ち悪く苛立たせる。こんなことではいけないと、情けなさの余り、己の身をどこかに消したくなり、都をから逃げ帰ろうかとまで思いもする。

かくて試験の当日。

春琴に見送られて試験場に入る。大事なこの日に、この自信のないありさ



まを春琴に見せているのがとにかく情けない。門よりとぼとぼと狭い通路を歩み、己の番号の記された部屋に身を入れる。二十一年前と同じ狭く暗く寒い小部屋だ。堅い椅子に座すと、たちまち小用を催す。これで今日一日の試験に立ち向かえるのかと、気力は始めから萎えている。問題に取り組むと、恐れていた通り、覚えているはずのことが思い出せない。苛立つとますますわからない。答案を記す紙が一向に埋まらない。一体何のために都にきたのかと焦り、錯乱する。時間に追われ、上の空で字を記す。

呆然としていると、早く出ていけと促される。持ち込んだ荷をまとめ、背中に担ぐ。細長い通路をよろよろと歩いて門に達したときには、最後の一人になっている。

「もう門を閉じますぞ」

背中を役人に押される。

落胆の余り、後ろで鎖された門から離れられない。

夕暮れが迫っている。他の受験生が三々五々散っていく。迎えの者に荷を

渡し、胸を張って、誰もが今日の出来に満足しているようだ。己一人取り残された。

白髪の多くなったこの己が一番の年寄りであろう。この年齢での受験がそもそも無謀だった。二十七歳のあの若さでさえも落第だったのだ。老いた顔を隠すかのように、門柱に額を寄せてもたれかかる。

どうしてこうなってしまったのか。婺州を出てから今日まで、こうなってしまう理由がどこかにあったのか。こんなつもりで来たのではない。しかし、結局は己の力がなかったのだ。志ばかりは奇妙に高くとも、それに伴うものがなかった。情けない。愚かすぎる。

「旦那さまでございましょうか」

春琴だ。

「ああ、私だ」

口の中で自分でも聞こえぬほどに低くつぶやく。

春琴は屈んで荷を拾い上げる。何時の間にか肩から落としていた。

「行き違いになったかと、向こうの方まで行ってしまいました。随分と遅くにお出になったのでございますか」

門より額を離す。春琴は荷についた泥を払う。

「たまたま奥の方の場所で、出るまでに時間がかかったようだ」

言わずともよい言い訳をする。

「左様でございますか」

春琴の視線を避けるように、体の向きを変える。己はきつといま春琴に見せられないひどい顔をしている。

「この年にしては、今日はよくやれたと思う」

心に全くないことを言う。

「それはようございました」

「思いのほか易しいものだった」

嘘を重ねる。喉に張り付いたような声だ。

「帰るといたしましょう」

春琴はすでにわかっているのだろう。

春琴の後にのろのろと従う。この娘がいなければ、いまの己は安邑坊にも帰れまい。

春琴のために、せめて試験場で普段の力を出すことくらいはしたかった。これでは余りにも情けない。これが老いというものか。二十七歳の若さがいまのこの身があれば、春琴を喜ばせることもできるであろうに。

次第に遅れていき、

「少し疲れたようだ」

ほほえみを作ろうとするが、頬が強張って動かない。

足を止めて待つ春琴の前に来て、不意に、ここで春琴にすがっておいおいと泣いたら少しは楽になろうかなどと思う。

家に帰り、呆然としたま夜を過ごししていると、試験場でお狐さまに祈らずいたのを思い出す。それができないほどに平静さを失っていた。闇の中で祈りにいってももう遅い。

それでも、結果が発表になるまでの日々を、お狐さまにすがってかろうじて過ごす。

覚悟していた通り、合格者の中に己の名はない。当然のことと了解はしても、落胆は小さくない。

東呉くんも落第。

「今年の試験を任された連中は何をしているのか。こんなことでは志のある人間が集まらないではないか」

崔胤は二人の前で憤慨する。幾人かの名を挙げ、人を見る目を持たぬと激しく非難する。いずれも崔胤の政敵と目される人々である。

崔胤の怒りの弁に、東呉くんはともかくとして、己は自分の力のなさで落ちただけと、余計に情けなくなる。

「堅固なお心をお持ちのお二人、来年こそは雪辱を期すお考えでありましょう。実力通りの結果が出るよう、この崔胤、全力でお支えいたしましょう」  
崔胤の激励に東呉くんは感激の面持ち。上辺ばかりは、自分も揺るがぬ決

意のほどを口にする。

崔胤の邸宅を早々に辞し、春琴が無言で後に従う。いかなる後ろ姿を春琴に見せているのか、どこかに一人逃げたくなる。

**春**の終わりまで安邑坊の家に籠ったまま過ごす。

春琴は、青竜寺の父親の墓に三日に一度はいき、日に幾度となくお狐さまの祠の前に立つ。林婆さんは畑作りに精を出し、冬の間蒔いた種が花を咲かせる。

季節は巡っていき、いつまでもこのままではいられない。二つに一つを決める。崔胤に言ったように来年もう一度貢奉を受けるのか、それともあきらめて婺州に帰るのか。消耗した精神ではどちらも選べない。

この年齢での二度目の落第。幾度受けても同じだ。とすれば帰るしかない。婺州の舟の上で秘かに心の内に思ったのから始まり、金陵の秦淮河でそれと

言わずに蘭と別れ、衢州の不出院で綜と春琴に決意を告げた。その全てが虚しいものになる。蘇州で、お狐さまのお祭を春琴に見せると胆に言った。その胆の死が無駄になる。胆の後を懸命に努めてくれていた春琴の思いも無くなる。どうして婺州に帰られようか。彩霞とどのような顔で会えばよいのか。

ならば、もう一度受けるのか。受けても同じだ。自分にはそもそも力が無いのだ。万が一、合格する可能性があるとするれば、崔胤の力に頼つてのことだ。支えてくれるという崔胤の言葉にすがり、情実で合格を得るしかない。

来年の受験を目指すには、あと一年、長安で暮らさねばならない。婺州を出るとき、錢鏐から賜った餞とともに携えてきた銀子は大方使い果たした。予想外の胆の死もあった。金銭的な面でも崔胤にさらなる援助を仰ぐしかない。貢挙に全てを賭けて出てきたのだ、何がなんでも合格するしかない。だが、崔胤の世話になるのにはためらいがある。

二十七歳で不合格になったとき、酒と女に逃げた。楊銀の手引きで馴染みとなった女に溺れ、何もかも忘れようとした。いまは、そのような齡ではな

い。

悶々としている間に、合格者の祝宴が行われる。昔は都中が大騒ぎになった。曲江で開かれる一番大きな祝宴に参集する合格者を見ようと街路に人が並んだものだ。平康坊の妓女が総出となり、落第した者はその傍らでいやが上にも悲哀を深めたのだった。

「寂しいものでした。見物に出たのが、この婆くらいでは、どなたさまもさぞ張り合いがなかったことでしょう。進士及第のお歴々もうなだれて、しかも跨っているのが情けないばかりの痩せ驢馬。昔なら、立派な馬の背で胸を張る秀才方を、高貴なお嬢さまたちが高い樓閣の上から品定めされて、誰をお嬢さんと言いついていましたのに。そんなことがあったのを覚えている者さえ少なくなっていました」

行列を見にいった林婆さんが声高に話すのを聞き、羨む気持ちはさほど湧かずにすみはしても、唐朝の現状は嘆かわしい限りだ。祝宴が昔の華やかさを失ったのは唐朝が衰え果てたからだ。貢举合格は男児一生の誉れ、実利も



莫大であった。いまは都でほとんど名目だけの官職を授けられるに過ぎない。唐朝再興のために本当に身を捧げる覚悟がなければ、及第しても得るものがない。己は、お上のため、民のためにと決意したのだが、結果は虚しかった。

都の民のためにとの思いは『秦婦吟』を作ったときからのものだ。秦婦の嘆きを繰り返させないための『秦婦吟』だ。『秦婦吟』が己の道を開いていくと思つたときもあった。いま『秦婦吟』は己をどこへ導いていこうとしていくのか。一篇の詩が己の命運を開くと思つのがそもそもおかしな考えなのか。そうなのだろう。『秦婦吟』でいささかの名を得て、それだけのことだ。周宝のもとでしばし安楽な時を得られたのが、『秦婦吟』の最大の効用だったのか。『秦婦吟』はいまは何の力にもならないのだから、潤州でいい目に会えただけでも十分すぎたと思うべきだろう。

東呉くんが、家に籠ってばかりではと、気遣って訪ねてくる。東呉くんへこたれた様子はない。暮の道具を持参し、久しぶりに打つ。東呉くんの堂々の布陣に立て続けに負ける。

「今日はこれくらいにしておきましょうか」

東呉くんは心配そうに言い、帰る仕度をしつつも、どこかためらいがちであるので、

「何か他に御用事があったのでしうか」

と、尋ねてみる。

「用というほどのことではないのですが」

言い渋りつつ、

「実は、近頃、『秦婦吟』をよく言わぬ者がいるようだと、崔胤どのが心配されておられました」

と、気になる話をする。

『秦婦吟』には偽りが多いと取沙汰されていると言う。黄巢支配下の長安に一緒にいた東呉くんには、詩が当時の事件をそのままに歌ったのではないのは初めからわかっている。

「詩に虚構があるのは誰もが認めるところです。世間に名を得れば、あれこ

れあげつらう者も出てきます。あらぬ批判でも、それで足を浚われてはつまりません。不埒な連中がやつかみから詰まらぬ噂の種を蒔いているのだろうと、崔胤どのは怒りもされ、心配もされておられます」

例えばと、不埒な連中と目される名を挙げる。いずれも崔胤の政敵に連なる人々だ。

洛陽で最初に崔胤に会ったときに、『秦婦吟』が事実であるかどうか尋ねられた。己の名を世間に知らしめてくれた『秦婦吟』が己をつまづかせるのか。背筋に冷たいものが流れる。

「崔胤どのがおられますからくれぐれも御心配されませんように」  
東呉くんは帰っていく。

東呉くんは一本気で、崔胤を信じ切っている。崔胤を疑うのは友人を疑うようなものだろうが、婺州を出たときの貫休の助言は真実を見抜いたもののようにも思える。崔胤に全面的に身を委ねるか、そうするのが気が進まなければ婺州に帰るしかないのか。

それから二、三日もすると、季節は一気に進んで、好すぎて気持ちが悪くなるほどの陽気。

ふらりと門から出る。すぐに春琴が後を追う。振り返ることもなしに南へ東へと歩み、やってきたのは青竜寺。

境内の片隅にある胆の墓へと足を運ぶ。春琴はしばしばここにきているが、余りに稀な訪れを地下の胆に詫びる。蘇州で話したことから遠くにある、情けないこの姿を見せるのが辛い。

寺の僧がきて、蟻光の方丈へと導かれる。蟻光は庭に出ている。紅白の牡丹が開き出し、これからが盛り。我が子を慈しむかのように一本一本手入れしている。その手元を、脇に立って眺める。

蟻光は額の汗を拭い、

「時節に会えば咲く花ではありませんが、佳く咲かせてやろうと思うと、手をかけてやらねばなりません。それも人の欲でありましょう。花のことは花に任せてと、それで佳く咲くのなら、越したことはありません。なかなかそう

はいかぬものです」

人が自ずからよ生きるようになるのを望んでいた叔父の韋韜を思い起こす。「こちらでは旧くより牡丹を育てておられるのでしょうか」

「愚僧で何代目になりましたか。引き継がれ引き継がれ、人は変わっても牡丹はここに咲いて参りました。先師を偲び、昔の姿のまま咲かせようと思いますと、少しの怠りも許されません。幾度となく途絶えそうになりながらも、幸いとこの牡丹は咲き続け、今年の春も迎えられました。来年の春はいかになりましようか。年々歳々花あい似たり、歳々年々人同じからず、と歌われたものですが、所以なくしては花も年々歳々同じである訳にはいかぬようです」

「同じ事が繰り返される奥には、そうなる理由が何かあるのでしょうか」

来年も長安に牡丹の咲く春がくるのか。大唐の盛時に、牡丹の咲かぬ春があるとは誰も考えたりしなかった。進士及第の宴に牡丹は欠かせないものだった。『秦婦吟』を作った春に洛陽の牡丹を見損ない、その後、洛陽は灰燼に

帰した。

「時節に会って咲く花もあり、時節に会いながら咲かぬ花もあります。時節に会う会わぬ、咲く咲かぬは、花に因があるからではなく、花には自ずと咲くべき心があるだけです。花が時節に会えず、会っても咲けぬ場合に、己の故と我が身を責めるならば、自ずと咲くべき心も損なわれてしまいました。そうならぬよう、花の心を暢やかにするのが愚僧の仕事です」

蟻光は花の手入れを続ける。

「禅師さまの御慈悲を受け、この花たちはとりわけ幸せでございました。それでこのように咲くのでしょうか」

「愚僧には何もあります。花の一本、蟻の一匹にも、何かを及ぼそうとすることができることはありません。ただ花の本性、蟻の本性に副うか副わぬかです」

「みごとなまでに、花の本性を引き出されておられます」

ぐるりと牡丹を見回す。

蟻光は腰を叩き、

「短い時間屈んだだけで、すぐに痛くなります。これでも昔は、どれほど厳しい修行も平気でこなしたものです。あの貫休なぞには負けませんでした」  
貫休は蟻光を同輩のように言っていたが、年齢は蟻光の方が上、実際には貫休が弟子であるようだ。

蟻光は一人で笑い、韋莊を縁先へと導く。蟻光はそこで胸元に風を入れ、韋莊は牡丹の向こうの柏の木に目をやる。若葉に代わって古い葉がいまにも落ちそうである。

「そうそう、貫休でした。二、三日前にふと思い出したことがあって、やはり齡です、また忘れてしまいました。ちよつとしたことでも思い出すのに苦勞します。柏の葉がはらりと落ちるさまを見て、すつと頭に浮かんでまいりました。思い出してみますと、ここでお聞かせするのがよいものかどうか。しかし、思い出したのも何かの縁でありましょうか」

「貫休さまにまつわるような何かでしょうか」

「その昔の詩です」

「貫休さまは詩がお得意ですから」

「お聞きになりますか。劉得仁を偲んで詠んだ詩なのですが」

「貫休さまの詩ならぜひともお聞かせください」

さあらぬ態で言う。

蟻光は読経のように詩を唱える。

詩名動帝畿　詩の名は都にとどろき

身謝亦因詩　自身も詩によつてこそと考えていた。

白日只如哭　泣くが如くの白日があるばかり

皇天得不知　天の定めた命運は知り得ない。

旅墳孤◎山　墓の前にくれば足は進まず

◎僕泣如兒　赤子のように泣けてしまう。

多少求名者　名を求める者は多くいようが

聞之涙尽垂　君のことを聞いては涙が尽きまい。



劉得仁は幾度となく貢挙を受け、ついに合格しなかった。「帝畿を動かす」ほどではないにしても、己も『秦婦吟』によっていささかの詩名を得た。二十七歳で落第したとき、劉得仁の墓の前で、己も同じ身の上になるのではと戦慄を覚えた。これで二度目の落第。劉得仁の運命に己はいよいよ重なってきたのか。

何気ない風を装って牡丹を眺めやりつつも内心は穏やかでない。

「いまはどうかわかりませんが、貫休も昔はこの程度の詩を書いていました」  
蟻光を小さく笑い、

「劉得仁は、自ずと咲くべき心を、我自身によって損なってしまった人物であるとするか、劉得仁を劉得仁としてあらしめたのは、他ならぬ貢挙に落ち続けることであつたと見るか。貫休もいまならこうは詠みますまい」

「劉得仁は落ちねばならなかつたとおっしゃるのでしょうか」

「そうとまでは申しません。しかし、落第という、無駄なことを為し続ける以上に、劉得仁を自ずと咲かす術があつたのかと問えば、答えは無いとしか

言いようがないのではありませんか。一切の諸仏も劉得仁の落第に優る何かをしている訳ではないのですから」

「どのようなことでしょうか」

「落ちる旧き柏の葉と、咲き盛る牡丹の花と、儂さは同じでしょう」

若い僧が茶を運んでくる。

一服の茶を得て蟻光の前を辞すまでの間に、劉得仁の運命に己が重なるのならば、それもよかろうかと、わずかながら思えるようになる。青竜寺にふらりとやってきたのは、蟻光からこの詩を聞くためだったようだ。

若い僧に送られて寺の門までいくと、門柱の脇にしゃがんでいた春琴がすっと立ち上がる。僧の足が止まる。春琴に見とれているのだろう。春琴の楊絃はここでも僧たちの目を引く美少年だ。中天にさしかかった晩春の日を浴びる春琴は、韋荘でさえ胸の高鳴りを感じかねないほどに輝いている。楊絃が実は女であると知れば、僧は四戒の一つを犯したにも等しいと悩まねばならなくなる。春琴を寺に連れてくるのは罪作りのようだ。

目の前に寄ってくる春琴に、花の香りのようなものを感じ、案内の僧がどぎまぎし出すのを脇に見て、根を絶ったという昔の儀光禪師の話の思い出す。

大きく咳払いをし、僧に礼を言って、表に出る。

「長く待たせてしまったな」

後ろに従う春琴に言う。安邑坊の家を出てから、これが初めてかけた言葉だ。

「いえ、わずかの間でございました」

「今しばらく遠くにいつてもよいかい」

「どこまでもお供するのが絃の勤めにございます」

南へ南へと歩み、都のほとんど南端の近くまで至って西に転じる。

到着したのは劉得仁の墓だ。貫休の詩を聞かねばここを訪ねはしない。

三十年を経て様子がすっかり異なっている。面影を残すのは地面の盛り上がりだけか。深い木陰は跡形もなく、目印になっていた木の墓標も消えた。それでも、ここにしかない匂いのようなものがある。

ここらほもとも都の内でも寂れた場所だった。いまは見渡す限り茫々の草の原。秋に枯れた芒が背丈高くなお残っている。その彼方に、遮る物がなくなり、大雁塔、小雁塔の先がありありと見えている。戦乱を潜つてなお昔のままである二つの高塔が、いかに荒れてもここは長安城の内であると教えてくれる。

この前ここに立ったときは楊爺が一緒だった。劉得仁の運命に己が重なるのをあのときはあれほどまでに恐れていた。そのときの己の詩を覚えてはいるが、敢えてそれは唱えず、先ほど蟻光から聞いた貫休の詩を唱えてみる。

この詩が泉下の劉得仁の慰めとなろうか。蟻光が言ったように、劉得仁を劉得仁としてあらしめたのは貢挙に落ち続けることであつたのか。ならば、己を己としてあらしめるのは何であるのか。

劉得仁と己は無論同じではない。長安のこの姿は劉得仁の時代とは全く違う。貢挙に合格する意味合いもいまは大きく異なつた。劉得仁になるのを恐れるのではなく、むしろ羨むべきか。

婺州の風景が懐かしく浮かんでくる。長安こそが我が故郷であるのだが、すでにいまごろは暑い陽気になっているであろう婺州の方が故郷であるかのようには思われてくる。いますぐにも婺州に帰りたい。弟の顔を見たい。舟の上で、婺州を故郷のように感じたのは、このようにして長安にきてはいけな  
いというしるしであったのか。

「どうしたものか」

大きく嘆息する。いまここに蘭がいたら何を言ってくれるだろうか。  
振り返ると春琴がいる。

「いかがされましたか」

「いや」

誰かに尋ねようとしたのではない。己一人で決めねばならない。泉下の劉  
得仁にも、ここにはいない蘭にも、十四歳の娘にも尋ねて決めてもらうこと  
ではない。

「では、帰るとするかい」

「よろしいのでございますか」

「ああ」

「何か訊かれたように感じたのでございますが」

「そうかい」

春琴の脇を抜け、それ以上は何も言わずに歩む。

春琴にこれ以上の重荷を担わせてはいけない。春琴にとつてもこの日々は重く苦しいに違いない。父を失い、その父に代わってこの身を支えようとしてくれている。平陽公主に憧れる楊絃であっても、十四歳の娘だ。辛いに違いない。胆の負っていたものを、春琴に負わせてはならない。婺州に帰って、彩霞に返そう。そして、早く本来の姿に戻してやりたい。楊絃ではなく、娘としての春琴にだ。男になろうとか、何も無理をしなくてよい。春琴自身がそう望んでいるのかどうかはわからないが、このままではきつといけない。

安邑坊に帰り着くまでの間に雲が空を覆い、ひんやりとした風が吹き出す。夜には雨、それからの数日間、家の内に降り籠められる。

ようやく陽ざしが戻ると、雨で伸びた草を林婆さんがせつせとむしる。蟻光に習うのではないが、少しく手伝ってみる。

「そんなことなさらないで下さいまし」

林婆さんは止める。日の光を浴びると、それだけでいくらか気晴らしになるかと感じて続けていると、東呉くんがふらりと現れ、ひどく難しい顔を見せる。

内に入って二人だけになると、東呉くんは眉根を寄せたまま、

「つかぬことをお尋ねしますが、慍と言う御名の従弟がお身内におられました  
ようか」

稀に痛むことのある左足がびくんとひきつる。

「亡き叔父の三男に慍と申す者がおり、二十年ほども前でしょうか、莊園を飛び出し、以来音信が途絶えたままになっています」

「その者が、鹿晏弘の軍師になっておられたと、聞かれたことはありませんし  
うか」

「風の便りにそのように聞きましたか」

東呉くんは悪い話を持ってきたようだ。

「ではまことだったのですか」

東呉くんは天井を見上げて深く息を吐く。

ざわざわと胸騒ぎが起こり、

「慍が何かをしましたか」

「従弟殿でなければと、崔胤どのは思っておられるのですが、どうやらこれはいけないようです」

「いかがしたのでしょうか」

「崔胤どのが、韋慍と名乗る者に近頃、会われまして」

東呉くんの言葉の途中で、聞き返す。

「それはまことですか。どこででしょうか」

東呉くんは顔をしかめ、重々しく、

「華州です」



「崔胤どのは華州にいらしたのですか。愠が華州にいたのでしょうか」

愠について韋荘が知っているのは、鹿晏弘の軍師に招かれたところまでだ。異母弟の憐が話したのを蘭から聞いたのだった。鹿晏弘については、楊復光の死後、行き場のなくなつた忠武軍兵士を率いて興元に入り、そこで王建、韓建と仲違いし、後に許州において秦宗権に殺されたと聞いた。愠に関しては何の風聞もなかった。

「崔胤どのは韓建どのお会いするため華州にいかれ、韓建どのお引き合わせで、その韋愠と名乗る人物と会われました。その者が『近ごろ「秦婦吟」でちと名の知られる男は我が従兄であります』と言つたので、事実かどうか確かめてほしいと、手紙が今朝届きました。その者は、興元において鹿晏弘のもとから去り、以来、韓建どのおそば近くに仕えているとのことです」

「では、我が従弟であるのでしょうか」

己の声が少しく震えていると感じる。

「そうですと、これは気がかりです。こう申せば御不快でしょうが、さりと

て言わずにもおけません。従弟どのが言われますには、『身内の恥は覆うべきでも、お上のため、天下のためにならぬときには別でしょう。『秦婦吟』でいささかの虚名を得ておるようですが、従兄は上辺を取り繕うだけに長けた人間、詩が優れても卑劣な者は世間にくらでもおります。今回は幸い貢奉を落ちたからよいようなものの、あれを朝廷には決して入れませんように。早々に都から追い出すのが上策。あれの全てを知る私が申すのですから間違いないりません』と。崔胤どのは、これは何かしら私怨があつてのことと、必ずしも真に受けてはおられません、相手は韓建どのに重んじられている様子ですから、この先、難しいこともあるうかと、気をもんでおられます」

「それこそ身内の恥は覆うべきでしょうが、実は、あれは素行が悪く、一族の者に示しをつけるため、止むを得ず、杖で撃ち据えたことがあります。それをいまも恨んでいるのでしょうか」

「左様でしたか。よくよくのことがあつたものと推察しますが、崔胤どのは御承知の通り、家の内が乱れを、濫りに私刑を振るって抑えるのを嫌ってお

られますから」

東呉くんは言葉を濁す。

「あのころは私も若かったもので」

「昔の小事が今の大事にならねばよいのですが」

韓建は長安を囲む三人の節度使の一人。三人の中で最も優れると見なされている。崔胤にしても、韓建の存在を重視して、華州に会いにいったのだらう。

華州は長安の東を守る戦略上重要な町だ。堅牢な城壁に守られ、沙陀族の李克用が黄巢の占拠する長安を攻めた際には、黄巢の一軍がここに立て籠って頑健に抵抗した。

韓建は貧農の出で、忠武軍の兵士となった。その後、王建とともに鹿晏弘のもとを去り、当時は成都にいた「お父ちゃん」の田令孜のもとに赴き、その飯子、すなわち養子になった。そのつながりで、田令孜と皇帝を猛火の中から救い出した。田令孜が朝廷から追い出されると、韓建も華州知事として

外に放出された。華州にいくと、李克用が町を攻めるために作った陣地の跡はそのままであったが、町は荒廃し切っていた。韓建は自ら鋤を担いで、華州周辺の農地の復興に努め、離散していた農民を呼び戻した。初めて文字を学び、書や史を習うのを日課とした。韓建の地道な努力に、人が集まり、数年にして華州に見違えるばかりになった。

「旧き事を今さら弁明しても一族の恥をさらすだけのことです。いま考えざるべきはこの都にやってきた志をいかにして果たすかだけです。それさえ強固であれば、従弟が何を考えていようと我が身に及ぼすものは何もありますまい」

愠は韓建のもとにいて何か意趣返しを企んでいるのか。心の動揺を隠して、東呉くんに言う。

「まことにその通りであると思います」

「お上への忠義を考えるばかりです」

そのように言いながら、来年の貢奉を受けるとはまだ決めかねている。

「もしも何かよからぬことがありましたも、いまのお言葉伺えば、崔胤どのは必ずや守ってくださいさるでしょう。心配なされますな、よ返事を認めることといたしましょう」

そのためすぐに帰ると言う東呉くんを見送る。

その後ろ姿が角に消えると、いま東呉くんに言ったのとは正反対の方向へと心が動いていく。貢挙をあきらめ婺州に帰るのか。

ここで愠が我が前に立ちただかろうとは思ってもみなかった。韓建に重く用いられているとすれば、いまの愠に適うものでない。杖で打ち据えた男の復讐から免れる術は、あるとすれば貢挙に合格することだけだろう。それも含めて、全面的に崔胤の援助を仰ぐしかない。それは気が進まない。崔胤に服従するつもりはない。崔胤がそれを求めていると決まったものではないのだが、崔胤に身を捧げて逃れられなくなってしまうのは避けたい。

長安において進む道が塞がったのであれば婺州に帰るしかない。  
お狐さまの祠の前に立つ。

愠が生きていた。お狐さまは韋一族の神だ。愠も守っているのか。愠は不埒な男には違いない。それでも、この時代に生きる困難を、一族の一人として耐え忍んでいる点では同じだ。お狐さまは愠も助けてきたのか。莊園を破壊したのは見逃してやり、韓建に重んじられる幸運を与えたのか。

お狐さまは何を見ているのか。韋一族の内のどの者にどのような加護を垂れるといかにして決めているのか。お狐さまは、莊園において不幸を背負わされた愠を哀れと見たのか。祠を再建し、日々祈りを捧げ、狐潭のお祭を復活させようとしている己よりも、愠の方をよしとするのか。お狐さまが愠を選ぶのなら、己は婺州に帰り、貢奉ともお狐さまとも決別するのがよいのか。お狐さまの意を測り得ぬままに、型通りの祈りを捧げる。

春琴が離れた場所から見ている。春琴に重荷を負わせてはいけない。ならば、婺州に帰るべきか。

春琴は楊爺の生まれ変わりだ。楊爺は誰よりもお狐さまを信じていた。己と愠を比べて、お狐さまが愠を選ぶことがあるとしても、春琴を他の誰より

も守ろうとしないとは考えられない。そうであれば、春琴の望むように己が心を決めれば、お狐さまは叶えてくださるのかも知れない。主人の意に副うように振る舞ってくれているのだろうか、春琴は本当のところは何を望んでいるのだろうか。

春琴にそれを尋ねるのは思いとどまらねばならない。春琴に重荷を負わせたくない。

**夏**の蒸し蒸しと暑い朝。東の空に低く朝日が潤む。

ある一つの思いに引かれて安邑坊の家を出る。春琴がついてくる。

北の坊門から大路に出て、西に進んで東の市の門。市に昔日の面影はない。廃屋と瓦礫の積まれた空き地、その間に、ぼつりぼつりと店らしきものがある。申し訳程度の商売をしている。それでも市があるから都はかろうじて機能している。

西に道を折れ、門を出て大路を横切って入るのは平康坊。先の皇帝が都から逃げ出した前の日、蘭とともに同じ道筋をたどった。昨年の秋に長安にきて以来、足を向けずにいた場所がある。

都に留まるか帰るか。帰るのならば平康坊にいつておかなければならない。婺州に帰れば二度と都にはこない。ならばこの思いに何かしら区切りを付けておかねばならない。銀犁と別れたあの場所に立つ。

この十二年の間に幾度か銀犁を夢に見た。貢挙に合格するのが何より大事と、都にきてからは、我が思いに気づかぬふりをしてきた。

今日になってそこへと向かっているのは、婺州に帰ると決めたからではない。都に留まるとも帰るとも依然として決めていない。悔いを残さぬために平康坊にはいつておきたい。

かつての全盛のころであっても朝の色里は侘しいものだ。ましていまの平康坊。道の順にまず南曲がある。貴族、大官を主な客とする豪華な妓館が並んでいた。見る影もない。妓楼らしきものが何軒かあることはある。極めて



粗雑な造りの間口の狭い建物だ。ここが平康坊の遊里であるとかろうじてわかりはする。その北の裏側はかつての中曲。官僚や裕福な商人の遊び場だった。がらんとして、妓館なのか何かの商売家なのか、軒の傾いた家が二三ばかりある。その裏の坊の北の壁までの間は、瓦礫を積んだ小山が点在し、茫々と草が伸びる。いまにも倒れそうな檻樓小屋が一軒だけある。ここが北曲のあった所だ。

恐るべき洗城からまだ日の浅いころにここにきた。人の足音に、真黒な蠅の塊が地面から湧き出た。そのときと比べればまこと穏やかな叢だ。

かつての道筋を示すものもない。草を踏み、瓦礫の山を覗き、振り返って南曲の建物を眺めやる。ここからも遠く大雁塔、小雁塔が見える。見晴らしのよさはそれだけ長安の寂しさを示す。

檻樓小屋の戸ががたがたと開く。腰の折れ曲がった老女が頭をかきながら出てくる。

手桶を掲げるその老女の前へと回り、丁寧に挨拶する。老女は手桶を置き、

頭が地に触れるほど深々と下げる。韋荘は受験生らしく瀟洒な儒服を纏っている。

「ちよつと聞かせてもらつてもよいかい」

老女はしどろに羽織った服を前で合わせ、

「へえ、何でございましょうか」

「ここは北曲のあつたところと思うのだが、違ふかい」

「へえ、へえ、あちらが中曲、その向こうが南曲、ここがおつしやる通りに北曲でございしました」

「そうかい。では、その昔、このあたりに、仙水楼という店があつたのを、聞いてはいないかい」

「それは、あの黄巢がくる前のことでございましょうか、それよりもこっちのことでございましょう」

「前のことだ」

老女は顔の前で手を大きく振り、

「こんなところに住んでおりますと、旦那さまのようなお方が時折はやってこられまして、あの店はどうなつただろうかとか、あの妓の行方は知らないだろうかとか、お尋ねになられます。昔のお遊びがお懐かしいのでございましょう。しかし、黄巢がくる前のことですよ、この界限で知っている者は一人だつておりません。この老いぼれにしても、ここで店を持っていましたのは、黄巢の出でいった後のほんの一時ばかり。何だかんだとありまして、家は焼かれるし、女の子は盗られるで、いまではこうして、一緒に住むのは野鼠だけ。お天道さまをまだ浴びていられるだけ有難いと思っております。黄巢がくる前のことなど、誰もわかりません」

「そうなのかい」

「この次何かあればこの老いぼれもおしまいです。お上が出たり入ったりして、この貧乏婆がよくここまで生きてきたものです。ここらで、女の子の悲鳴が何万回上がりましたことか。数知れずころがった屍骸の仲間、この老いぼれもじきに入りましたよ。そうなれば苦しみもなくなります。旦那さま、

幸いと生きていられるいまのうちでございます。せいぜいお遊びなさいませ。昔を偲んだところで何もございませぬ。この老いぼれもまだ少しは顔が利きますから、何なら、好い妓をお世話して進ぜますよ」

老女は手もみし、ひひひと笑う。

崔婆を思い出させるものがあり、

「まあ、そのときにはよろしく頼むとするかな」

と、適当にあしらう。

「こんな朝早くではなく、次には遊びに好い時分にお越しくださいませ」

老女は手桶を取り、ひよこひよこ歩き出す。

檻樓小屋を離れ、叢の中を巡り、東西南北を見て、このあたりに仙水楼があつたと己で定める。

ここに来たのは何のためか。昔の思いに区切りを付けるためだ。どうしたら区切りが付くのか。

ここが昔の北曲であるとあの老女が言い、己がここに仙水楼があつたと定

めるから、ここに昔の記憶が残ると思うこともできよう。しかし、目に見えるのは、長安であることさえも疑わしいような寂しい光景だ。こうであることはくる前からわかっていた。それでもここに来た。

仙水楼があったと決めた場所に立ってみてわかる。昔の思いに区切りを付けるのではない。要するに、己は銀犁に会いたいのだ。だからここに立っている。

区切りを付ける方法を知らない。ただ会いたい。廃墟となった荘園で銀犁を思っただいたのと同じだ。銀犁だけがこの己をわかってくれる。

どうすることもできないこの思いを恐れて、これまでここにはこないようにしていた。

虚ろに銀犁を求める目に、瑠璃色の光が飛び込んでくる。割れた玻璃の破片か。屈んで拾う。西方からもたらされた夜光の盃か。銀犁の部屋にあったあの盃か。そうであるうはずもない。ぼろりと手より落ちて叢に光が消える。

あの離れはこのあたりであった。飛び石を踏んだ先に扉があり、銀犁がそ

れを鎖した後に、どうして開けようとしなかったのか。無理にでも開け、銀犁を抱えて逃げるべきだった。そうするしかなかったといまはわかる。あのときは、次にここにくることがあると安易に思ってしまった。

確かに次にもきた。洗城の後だ。扉はなかった。そして今日。

もしもあのときに銀犁を連れて出ていたら、その後はどうなったのか。考えても仕方がない。

己の人生は、銀犁を連れ出さなかった後のもの以外にない。それが無に戻らない限りは、銀犁を連れて出た後の人生は想像の中でさえも存在し得ない。それなのにどうしてここにきたのか。銀犁に詫びるのか。いまさらどう詫びるのか。己を責めるのか。いまさらどう責めるのか。しかし、己を責めずして何をしたらよいのか。

銀犁に会いたい、ただそれだけだ。

銀犁に全てを話した。貢奉のこと、荘園のこと、妻のこと、何もかも話した。蘭にさえも言えないことを、銀犁になら話せた。銀犁は何もかも聞いて

くれた。あのときは銀犁がいたから、次の貢奉は合格できると思えた。

銀犁に会いたい。扉を開けなかつた大きな過ちから後の全てを聞いてもらいたい。そうすれば、ここから踏み出すこともできようか。

会えても、二人を隔てた歳月がある。

まだ生きている己が恨めしくもある。老婆が言っていたように、屍骸の仲間に入れば苦しみはなくなる。銀犁は疾うにそこにいったのか。己の苦しみなどもう聞かせるべきでない。

長安に留まるべきか、婺州に帰るべきか、それが定められないのだから、むしろ確実に銀犁に会えるところにいこうか。

この身をこれ以上生かしておいても意味がない。本当に愛する女を捨ててしまった男、そのときから生きている価値はなくなっていたのだ。

どこにいつても銀犁には会えまい。会える己ではない。

濁った空に滲む日の光が眩しい。

目を閉じる。微風に草の摺れ合う音。虫の羽音、鳥の声。それに雑じって、

遠く微かに聞こえるのは、

「相想、相想」

鸚鵡の呼び声。

「相想、相想」

銀犁が迎えにきてくれるのか。そうならいますぐにだっていく。

前年庚子臘月五　　さきの年の十二月の五日のこと

正閉金籠教鸚鵡　　金の籠の鸚鵡に言葉を教えつつ、

斜開鸞鏡懶梳頭　　鸞の絵の鏡を斜めに見て、気だるく髪を梳いており

ますと、

間憑雕欄慵不語　　雕の絵の欄に吊るされた鳥は物憂げにもの言ひませ

ん。

鸚鵡はどこで鳴いているのか。銀犁も一緒にきているのか。

目を開ける。

春琴が立っている。



「おまえだったのかい」

春琴はうなずく。『秦婦吟』を春琴が吟じていた。

「銀犁さまのお住まいはこのあたりだったのでございませうか」  
春琴の間にうろたえる自分がいる。

「銀犁のこと、知っていたのかい」

「旦那さまが御自身でお聞かせくださったではありませんか」

「そんなことをしたかい」

「洛陽に入る前の日、古いお寺でございました。外は激しい雨、中ではふつふつとお粥が煮えていました」

「あの晩のこと、覚えているのかい。まだ二つか三つだったはずだ」

春琴は真面目な顔でうなずき、こらえ切れずに嘔き出す。

「そんなはずございませぬ。何も覚えてなどおりませぬ」

「そうだろう。では、どうして知っているのかい」

「お母さまが、都へと出発する前に、すっかり聞かせてくださったのでござい

います」

「彩霞がかい」

「旦那さまがもしも平康坊にいかれるようなことがあったなら、おそばで『秦婦吟』を吟じるよう、おっしゃいました。それでいま言い付けられた通りにしたのでございます」

「彩霞がそんなことを言ったのかい。どうしてなんだい」

「訳はおっしゃいませんでした」

「そうかい」

腹の底が熱くなる。彩霞は何を考えたのか。

洛陽に入る前の晩、『秦婦吟』を皆に聞かせ、彩霞に許しを請うた。彩霞は応えてくれなかった。洛陽では「母上の思いをお考えになっていただきたい」と言った。

「続けてよろしいでしょうか」

「いや、待つてほしい。少し考えたい」

彩霞の心を知ろうとする。しかし、わかるはずもない。

「どうしてそんなことを言ったのだろう」

春琴に尋ねたのではなく、独りごちたのだが、

「ふと思ったことがございます。申してもよろしいでしょうか」

男として生きる春琴の物言いはきつぱりとしている。試験を終えた夜の帰り道で、春琴にすがって泣きたいと思った。いまもこの少女にすがりたい思がある。しかし、春琴に重荷を負わせてはいけない。

「ああ、何でも言ってくれ」

『秦婦吟』は本当は銀犁さまがお作りになったものなのではないでしょうか」

「どういう意味かい」

「銀犁さまがいらっしやらなければ『秦婦吟』は生まれなかったのをござ

ましよう」

「そうだろうと思う」

「でしたら、銀犁さまにこそ『秦婦吟』をお聞かせしなければなりません。

お母さまもそのようにお考えになったのではないのでしょうか」

「そうだろうか」

彩霞がそう考えたとは思いい難い。かと言って、他に理由らしきものはないつかない。

「旦那さまは何のために『秦婦吟』をお作りになったのをごいませうか」

「それは、あの日も言ったように、秦婦の嘆きが繰り返されることがないよう願うことだ。たかが一篇の詩にそのような力があると考えたのは、私の思い上がりだったようだ」

「そうでございませうか」

「もつといけないことに、『秦婦吟』が私の運命を切り開いてくれるかも知れないと考えました。『秦婦吟』によって少しは世間に名も知られた。だが、我が道を塞ぐのは結局は己自身だったのだ」

「詩には計り知れぬ力がございます。孔子さまが『詩経』を編まれましたのもだからのございませう。『秦婦吟』は多くの人の心を打ちました」

「真実の詩なら力もあるろう。『秦婦吟』に限ってはそうでない」

「どうしてでございませうか」

「真実を歌ったものではない似非な詩だからだ。蘭に言わせれば、寢床で書ける詩だ」

韋荘は笑う。

「まことにそのようにお考えなのでございませうか」

「似非なもの似非だ」

東呉くんは、詩に虚構は許されると言った。『秦婦吟』に虚構を入れたのは隠さねばならぬことがあったからだ。弟たちは官軍によって殺された。その事実をあからさまには歌えまいと考えたのは正しかった。そのとき官軍の指揮を執っていた王処存は、いまは東方の軍事上重要な地域を抑える節度使で、朝廷と李克用の間をつなぐ橋渡し役でもある。黄巢政権と弱いながらも接触を持ったと疑われそうなくとも隠した。当時、長安において皮日休と交流のあった者は多い。皆黙して語らない。杭州には皮日休の息子がいる。とやかく

詮索されれば面白からぬことにもなろう。

いくつかの事を隠し、銀犁を愛していた己などは長安にいなかったこととして、架空の秦婦の口を借りて詩にした。

吐き捨てるように言った韋莊に向かつて、

『秦婦吟』は銀犁さまがお作りになったのです。それを似非などとおっしゃってはいけません」

春琴は言い切る。

胸を抑え、

「そう思つてよいのだろうか」

「ええ、よいのです」

春琴の真直ぐな目から体を逸らし、あたりをひと巡りして、  
「初めから吟じてくれるかい。銀犁に聞かせてやってくれ」

これは銀犁に会うと言うことなのか。

「かしこまりました」

春琴は背筋を伸ばし、大きく息を吸い、ゆったりと声を出していく。

前年庚子臘月五　さきの年の十二月の五日のこと

正閉金籠教鸚鵡　金の籠の鸚鵡に言葉を教えつつ、

これが銀犁の詩なら、銀犁に聞かせるのではない。銀犁に聞かせてもらおうのだ。

この場所での銀犁との別れがなければ『秦婦吟』は存在しなかった。銀犁に会いたくてここに来た。会ってこの詩を聞かせてもらおう。

長安寂寂今何有　長安は寂寂として今は何があるのでしょうか

廢市荒街麥苗秀　廢れた市に荒れた街、草が伸びるばかりです。

これはこの眼前の風景だ。

春琴が歌いおさめる『秦婦吟』の最後。

願君挙棹東復東　あなたにお願いするのは、棹を挙げて東へ東へと

向かい、

詠此長歌獻相公　この長い歌を詠じ、お偉い方に献じて下さることで

す。

銀犁はどのような思いを『秦婦吟』に託したのか。己は『秦婦吟』を周宝や錢鏐に献じた。銀犁が作った詩であるのなら、「相公」は周宝や錢鏐のような人物であろうはずがない。真に平和をもたらしてくれる人でなければならぬ。それは誰なのか。

銀犁が作った『秦婦吟』は、己一人の運命を開くようなものでは決してない。全ての民に平安をもたらすものであるに相違ない。

春琴は吟じ終わり、微笑を浮かべる。銀犁の顔がそこに見えるようだ。

「ありがとう」

銀犁に会って話されるべき全ては、春琴の声によって届けられたのかも知れない。銀犁の心が春琴によって我が心に届けられたのかも知れない。

「帰るとするかい」

ここにくる前とは異なる何かが己の内に生まれてきているようだ。

春琴がうなずき、前に歩み出す。



重い桶を提げた老女がよろよろと戻ってくる。あれもまた秦婦の一人だ。

『秦婦吟』が己を導いてくれるのではない。『秦婦吟』のために何ができるのか、己の道はそこに開かれていくように思えてくる。新たな力が己を押し始めてくれているようでもある。

安邑坊の家に帰り着くと、林婆さんが門の前の通りに出て足踏みしている。「やっとお帰りで。どこにいらしていたのですか。いますぐいかせていただきます」

林婆さんは門の脇に置かれていた荷を抱えて走り出す。

「あわてふためいてどこにいくのかい」

「蒋さんの家ですとも。そろそろ始まりますので」

「赤ん坊かい」

「思っていたより早くて、難儀な気がします。今夜は帰れなくなるやも知れませんか」

林婆さんはものすごい勢いですつとんでいく。遠い親類の蒋の家の嫁の出

産を頼まれていたのだ。林婆さんは何でもできて、したたかに生きている。

お狐さまの祠にお参りしてから家に入る。都に留まるか帰るかを決意はまだつかない。どちらかに決められそうな気はする。

夕方になり、林婆さんが帰らぬうちに太鼓が鳴る。

林婆さんが用意しておいてくれた焼餅を炙って食べていると、

「雷でございましょうか」

遠くに低い響きがあったようだ。

「今日は蒸し蒸しと厭な暑さだったからひと雨きそうだな」

「涼しくなるのなら結構なのですが」

「林婆さん、もう終わつたらうか。産婦が怯えるほど雷が暴れたら、それこそ難儀であろう」

「無事に生まれて、この都に、もつともつと大勢の人が増えてほしいものです。いまのままでは寂しい限りでございませす」

「昔は百万戸と言っていたものだ。十戸に一つも残っていない。百に一つだ

ろうか」

「いつか都に賑わいが戻りまししょうか」

「そうだな、きっと、そうなるだろう。雷さまも、ここの都が寂しくては、鳴らし甲斐がないだろうから」

春琴は皿を片付けにいく。

厨に向かう春琴の背に、銀犁の姿が重なる。

粗末な男の衣服を着た春琴と、華やかな妓女の装いであつた銀犁とでは全く違う。真黒に日焼けした春琴と、艶やかな化粧を施した銀犁だ、どこに重なるところがあるのか。

同じなのは、幸せにしてやりたいと思う気持ちだ。銀犁の場合にそれは叶わなかつた。楊爺の生まれ変わりで、死んだ胆の娘、彩霞にとつては娘と同様、その春琴を、三人のためにも幸せにしてやりたい。銀犁にはできなかつたことを春琴にはしたい。

阿枉を幸せにしてやりたいと思つた。それも叶わなかつた。あれだけお狐

さまを熱心に祈っていた阿枉であったのに死んでしまった。春琴だけはどうかして幸せにしたい。今度こそは叶えたい。

春琴にお狐さまのお祭を見せてやりたいと、胆に話した。楊爺が始めたお祭の賑わいの中に、楊爺の生まれ変わりである春琴を立たせたい。お祭を行うには莊園が元に戻らねばならない。莊園が元に戻るには世の中が平和でなければならぬ。世の中が平和になるには、唐朝が元通りにならないければならぬ。そうなるために少しでも力を尽くそうと貢奉を受けにきたのだ。

貢奉を受ける己を守ろうと春琴は長安にきてくれた。少女に何ができようかと思っていたが、もしも春琴がいなければ、いまここには己が一人だけだ。銀犁に会いたさのあまり、平康坊で死んでいたかも知れない。

春琴にどう報いればよいのか。

目を閉じて考えていると、春琴が皿を洗う音が聞こえ出し、遠雷がまた響く。

答えは一つしかあるまい。

心の内で、銀犁が春琴に重なり、春琴が銀犁に重なる。

「銀犁さまはどのようなお方だったのでございましょう。お聞かせいただけませんかでしょうか」

春琴の声がすぐ近くにある。

明かりが灯され、脇に春琴がいる。

「銀犁のことかい」

斜めに灯を受ける春琴の瞳がことさらに光る。銀犁は阿枉と同じく、くりくりとした目だった。春琴はきりりと切れ上がった眼差し、まるで違うのだが、春琴の瞳は銀犁を思わせる。

「仙水楼にいらした方と伺っているだけでございます。お綺麗な方だったのででしょうか。きっとそうでございましょう、旦那さまが恋をされたのでございますもの」

「恋かい」

「今夜は林さんもいませんから、聞かれる心配もありません」

「もう昔のことであるからな」

「お忘れではございませんでしょう」

「忘れたりしてはあれに悪い」

「いまでも強く思っただけなら、今朝も平康坊にいらしたのでござい  
ましよう」

「あれから十二年余り、忘れたことはない」

「そこまで旦那さまに思われるお方はどのような女性であつたのでござい  
ましよう。この春琴にお聞かせはいただけないのでしょうか」

自身を春琴と言った。いつもは絃と言ふところだ。

春琴はふつと顔をそらす。

「己の恥をさらすようなものだ」

「春琴がお聞きするのをお厭いになるのでございますか」

「さてどうだろうか。不甲斐ない男と、私のことを嫌いになるのではない  
か。いつだったか、女の人に弱いと、綜と二人で笑つたことがあつたらう」

「あれは兄さんが申したまででございます」

「おまえも笑っていたではないかい」

「だからと言って、旦那さまのことを嫌うなど決してございません。長安までこうしてお供してきているのでございます」

「そうかい」

韋荘は笑う。

彩霞が揚州の酒家の窓下で春琴に言ったことが常に頭にある。春琴には尊敬されるような生き様を見せねばならない。

だが、銀犁にもちようどいまと同じようなことを言ったのを思い出し、

「では、望まれるままに話してみるとするかい」

「お願いいたします」

「どこから話せばよいだろうか。敬竜さまと初めてお会いしたあたりからかな。揚州の妓楼にいまのおまえよりもずっと幼かった銀犁がいた。そのころは桂兎と呼ばれて、目がくりくりとした可愛い子だった」

話を始めると、揚州にどうしていたのかを言っておかねばならない気がし、少し遡って、莊園の日々を話す。少し話すとまた前へと戻らねばならない気になり、さらに遡って結局は、試験で落ちて劉得仁の墓に詣でたところにまで戻る。それは長い話だ。

遠雷は一旦は聞こえなくなり、再び方角を変えて起こり、次第に近づき、長安での銀犁との再会に至って雨が降り出す。

春琴が戸を立てる。蚊遣火の煙が部屋に充満する。

春琴の祖父の楊銀の手引きで銀犁との逢瀬を重ね、

「ちようど今夜と同じように、銀犁に何もかも話をした。最も隠しておきたいようなことまでも全てを話した。すると、不思議なことに、銀犁が言いようもなく愛おしく感じられてきたのだ。それからだ、あれがこの世に二人としない女になったのは」

そのときの胸中の味わいが甦る。

「わかるような気がいたします」



「一日だって会わずにはいられなくなった」

鸚鵡の屍骸を手にした崔婆に会うまでの日々を語るうちに、雷鳴が激しさを増していく。雨粒がばらばらと戸に打ちつける。話を聞き漏らすまいと、春琴が身を寄せる。

「これで全てだ。銀犁がそれからどうなったのかわからない」

戸の隙間から吹き込む風に灯が揺れ、春琴の影が伸びたり縮んだりする。

銀犁との別れの直前に、影で占ったことを話す。

「銀犁さまはお幸せだったのでございましょう」

「それはどうだろうか」

「でなければ、旦那さまを外に出して、戸を鎖したりはなさいませんでしよう」

「そう思うのかい」

「ええ」

「その戸をどうして開けなかったのかと幾度となく悔やんだ。今朝も悔やん

でいた」

「銀犁さまの望むところではなかったのでございましょう」

「わからない」

深く嘆息すると、小さな家を揺らして雷が轟く。

その余韻のおさまらぬなか、

「旦那さまは、銀犁さまにされたようにこの春琴にもお話しくださいました。それで、どうなのでございましょう、銀犁さまと同じようには、この春琴のことを思ってはくたさらないのでございましょうか」

強い風が外を吹き過ぎる。

いまのは聞き間違いであったのか。

「どういうことなのかい」

そう口にして、甦った胸の味わいがさらに強くなる。

「いま申した通りでございます」

すぐ近くにある春琴の顔に銀犁が重なる。

「そなたをかい」

ここに居るのは銀犁ではなく春琴だ。己の気持ち打ち消そうとする。

「ええ、春琴でございます。銀犁さまのように、この春琴は愛していただけないのでございましょうか」

「何を言ひ出すのだい」

消せはしない。春琴が愛おしくてならない。

雷鳴が轟く。

「春琴も女でございます」

春琴は身を寄せる。韋荘はわずかに退く。

「銀犁さまのようにには愛してくださらないのですか」

韋荘の口からは言葉が出ない。

「春琴ではいけないのでございますか」

春琴が見つめるのを、見返す以外に何もできない。

春琴は、

「この春琴ではいけないのでしょうか」

激しい雷鳴の影で、

「そうではない」

口中につぶやく。

春琴は一瞬うつむき、身を翻し、明滅する灯の脇に立つ。

風が家を揺らし、灯が消えかかり、また明るくなる。春琴の体が小刻みに

震えている。

「御覧ください。春琴はこの通り女でございます」

するりと着物を床に落とす。

「やめなさい」

喉の奥にへばりついたような声だ。

「いえ、やめません」

胸をきつく巻いていた布を取る。

「銀犁さまのように、春琴を愛してはくださらないのでしょうか」

春琴は身に付けていたもの全てを下に落とす。

根を断ち切ったと言う儀光禪師の話の思いつつも春琴から目が離せない。

「この春琴は銀型さまの代わりにはなれないのでしょうか」

春琴は身を寄せてくる。

「銀型の代わりを求めてはいない」

春琴の体を受け止める。

「この春琴を銀型さまと思ってください」

「それはできない」

春琴は韋荘の首に両手をかけ、体をぴったりと付ける。

「春琴をお愛しいただきたいのです」

春琴の腕は韋荘の背中へと回る。鍛えられた若い力で引き寄せられる。

稲妻が走る。

「そなたは春琴だ。銀型の代わりではない」

春琴の息遣いが顔に触れる。

雷鳴が遠く去ったころ、二人は深い眠りに落ちる。

明け方、朝餉の仕度をしている物音に目を覚ます。

あれは夢であったのか。

足音を忍ばせ、厨をそっと覗く。春琴の後ろ姿がある。いつもの絃の格好であるが、それを見ただけで胸の高鳴りを覚える。昨夜のことは確かにあったのだ。

「春琴」

小声で呼びかけると、春琴は肩をぴくりと動かし、

「びっくりいたしました。まだお休みとばかり思っておりましたから」

振り返る春琴の顔に、言いようのない愛おしさを覚える。

春琴は表情を改め、いつも通りに畏まって挨拶をする。

あのようにしてはいけなかったのではないかとの思いが湧く。どれほど大切にしようともこの春琴には足りない。

「夕べはすまないことをしたようだ」

何を言ってよいかわからず、もごもごと、頭を下げる。

春琴は眉根を寄せ、くるりと火の方に向き直り、

「何のことでございます。お粥が煮えあがるまで、いまま少し時間がかかります。あちらでお待ちになつていてください」

厳しい物言いに、そろりそろりと後ろに近寄り、

「気を悪くさせてしまったのかい」

肩に手を触れようとする。

「私は私の仕事をしているのでございます。旦那さまは旦那さまのお仕事をなさってください」

手が宙に止まる。

「私の仕事かい」

「左様でございます」

そのまま手を顎に当て、しばらく考え、

「そなたさえよければの話なのだが、私の妻になつてはくれまいかい」

春琴は微動だにせず、

「私は旦那さまの僕にございます」

「私にはわかったのだ、そなたがいてくれねばならぬのだ」

「私は旦那さまに尽くすだけでございます」

「どうしたらよいのかい」

「何がでございますよう」

「そなたを妻として迎えるためには」

「もとより私は旦那さまのお心次第、どのようにしていただいても構わない僕にございます」

「そうではない」

「父を亡くしたばかりでございます」

「喪が明けるのを待てばよいのかい」

春琴の両肩を抱え、

「そなたを妻にすると決めた。私にはそなたが要る。そなたを幸せにしたい



とずっと思ってきた。私の妻としてそなたを幸せにしたい」

春琴はすつと立ち上がり、韋荘の手を振り落とす。

「私などはよいのでございます。旦那さまは旦那さまのお仕事をなさっていただきたいのです」

「私の仕事かい」

春琴はくるりと顔を向ける。

「そうです、旦那さまのお仕事です。この春琴が必ずお支えいたします。楊爺の生まれ変わりの春琴です、旦那さま一人をお支えするなど訳ないことです」

春琴は笑う。

「そこまでこの私を思ってくれるのかい」

春琴を抱き寄せようとすると、外に林婆さんの声がする。

春琴はすつと離れ、

「無事に生まれたのでしょうか」

早足で出ていく。

大声で話しながら林婆さんが入ってきて、まだ立ったままにいる韋莊を見上げ、

「まあまあまあ、そうだったのですか」

飛び切り大きな声で笑う。

韋莊は首をひねる。

林婆さんは春琴の背中を叩き、

「まあまあ、思いが叶って。もう、たったひと晩留守をしただけでこれですもの。さあさあ、お部屋さまはここでこんなことをなさるものではありません」

春琴を厨から押し出そうとする。

春琴は怒ったような顔で抵抗する。

「お部屋さまをお守りする用心棒が必要になりますね。どうしましょう」  
林婆さんの笑いは止まらず、

「何を言っているんだい」

韋荘は顔を顰める。

「それよりも、お似合いのお召し物をどこかで手に入れてくるのが先です。おなごの着物を召して、唇に紅をつけ、黛を引いたら、もうもう、見違えるようになりましょう」

「紅など誰が付けるものか。私は旦那さまをお守りする身。女などではない」  
春琴は林婆さんを決然と押しつけ、竈の前につく。

「まあまあ、何にしてもお目出度いことです」

林婆さんは、踊るような格好で春琴の後ろでひとまわりし、

「この家も、昨日までと違って、急に明るくなりました」

春琴は、

「水を汲んでまいります」

ふいと出ていく。

「それはお部屋さまのなさることではありません。この婆の仕事です」

林婆さんは後を追って、また桶の取り合いになる。

林婆さんはどうして知ったのか。韋荘は頬のあたりを撫ぜる。

厨を出て、東の小部屋の前までいき、引き戸に手をかける。長い間閉め切ったままだ。貢奉の前日までそこで勉強をしていた。己の仕事はここにある。

戸を開けると、中が明るい。上から光が差し込んできている。床が水びたしだ。棚に積まれた書物もぐっしより濡れている。書見台の上には濡れた落ち葉が積もっている。

大声で林婆さん呼ぶ。

「まあまあ、何てことでしょう。こんなひどいありさまになっているのを、今の今までお二人とも気づかずになっていたのをございますか。屋根が剥がれたときに、すごい音がしたでしょうに。まあまあ」

林婆さんにまた笑われる。

後についてきた春琴が困ったような顔で、  
「とにかく屋根に上って様子を見ましよう」

「屋根に上るなんて、そんなはしたないことをなさってはいけません」

外に出ていく春琴を林婆さんが追いかける。

屋根を見上げると、なかなかの被害である。

「こうなってしまうってからでは慌てたところで仕方ありません。まずは腹ごしらえといたしましょう」

林婆さんは落ち着いたものだ。折り良く煮え上がった粥を食べる。

蔣の娘は難産だったが、一番激しい雷とともに男の子が生まれ出てきたと林婆さんは言う。それを聞きながら、濡れた書物を乾かし、屋根を修繕する方策を考え、ふと杜甫の詩を思い出す。

八月秋高風怒号　八月の秋高いとき、風が怒号し

卷我屋上三重茅　我が屋根の三重に葺いた茅を巻き上げた。

茅飛渡江灑江郊　茅は飛んで川を渡り、あたりにばらばらと落ちる。

高者挂◎長林梢　高いのは林の梢にひっかかり

下者飄轉沈塘坳　低いのは翻り転がり小池に沈む。

杜甫が五十歳の頃の出来事だ。

杜甫は『北征』の詩を書いた後、都で短い期間だけ皇帝に仕えた。周囲と意見が合わず、自ら職を捨て、西の辺境の地へと旅立った。困苦の果てに、辺地での生活を断念し、劍門の難所を越えて成都に入った。友人の助力を得て、川のほとりに草堂を構え、幾分か落ち着いた暮らしをようやく得た。その草堂の屋根が秋の大風で飛ばされた。近所の悪童たちが出てきて、飛び散った茅を盗っていった。杜甫が怒鳴ろうが知らん顔だ。為す術もなく悄然としていると、風がおさまった代わりに空が暗くなり、しよぼしよぼと雨が降り出す。これでは家の中においても外と同じだ。

そこで杜甫は一つの空想をする。

安得広厦千万間

千万間もの広さの大屋根があつて

大庇天下寒士俱歡顔

天下の貧者を皆覆い、喜びの顔がそこにあふ

れる

風雨不動安如山

風雨にも動かざること山のごとく屋根だ。

嗚呼何時眼前突兀見此屋　ああ、いつかそびえるその家を目の前にでき

たならば

我盧独破受凍死亦足　我が家など壊れ、私など凍え死んで構わない。

杜甫が思うのは己の身を入れる一つの家ではない。天下を覆う大屋根だ。屋根の下にあるのは、飢え、凍え、志を得られずに苦しんでいた人々の誰も喜びの顔になれる平和な世だ。

願君挙棹東復東　あなたにお願いするのは、棹を挙げて東へ東へと向

かい、

詠此長歌獻相公　この長い歌を詠じ、お偉い方に献じて下さることで

す。

銀犁が歌った『秦婦吟』を献じる「相公」とは、そのような大屋根を築いてくれる人だ。そのような人がどこにいいのか。どこかにいる誰かではない。

杜甫であり己でなければならぬ。その他に誰がいるのか。

韋荘は箸を置く。

「心は決まった」

春琴と林婆さんが顔を上げる。

「今年はこのまま都に留まる。来年、もう一度、貢挙に挑む。崔胤どのの世話にはもうならぬ。我が家の屋根は我が手で直す。『我が盧、独り破れ、凍死を受くともまた足りん』の気持ちで貢挙に挑む。そうでなければ、お上のために、民のために、再び平和な世に戻すことも、到底できるものではない」

韋莊は立ち、

「春琴」

春琴も立ち上がる。

「頼んだぞ。そなたがいればできる気がするのだ」

春琴は無言。林婆さんが立つてその背中を叩く。

「結構なことではありませんか。はいとおっしゃればよろしいのです」

「私は平陽公さまの夫になる。そなたの指し示してくれるままに生きようと思う」



「勿体ないことでございませす」

「頼むぞ」

春琴を伴ってお狐さまの祠に行く。

楊爺の定めた作法の通りに祈りを捧げる。春琴のためにも、銀犁のためにも、銀高く生きよう。

お狐さまは見ておられたのだ。助けるに値する男ではないと、今年の試験では力を貸して下さらなかった。慍にまで恵みを垂れるのかと不満がましく思ったのは浅ましい限りだ。慍であれ、己であれ、いまのこの時代を生きる一人であることに変わりがない。「広厦千万間」と空想する家ができたなら、慍も己もそこに入るのを杜甫は拒みはしない。

祈りを終えると、春琴は家に入って濡れた部屋の片づけを始め、林婆さんは梯子を持ってきて破れた屋根に上る。それを見上げつつ、自分で直すとは言ったものの、いかにしたらよいかの方策はない。己はこの程度の人間だ。

一人、苦笑いをしてしていると、ふと後方に気配を感じる。門に男が一人立っ

ていて覗き込んでいる。林婆さんが帰ってきたときに、門をきちんと閉じなかつたようだ。門を頑丈にしてもこれでは無用心なと、舌打ちする。

男は下僕のなりをしていて、どこかの屋敷に奉公でもしているのか、見たところ四十歳くらい、がっしりとした体格で、髭が濃く、頬に大きな傷がある。朝から盗賊でもないだろうが、怪しげだ。

男は両手を前に垂れて頭を下げ、二三步入り込んでくる。韋荘はやや身構える。

「少々お尋ねいたしますが、もしやここはその昔、雀蛤先生のお店があつたところではございませんでしょうか」

少々驚き、

「いかにもその通りだが」

男の顔をじつと見る。男はさらに進んで、

「はなはだ失礼ながら、雀蛤先生と所縁のお方さまでございませうか」

「そうであれば、何か」

「ごさいましたら、御存知でありませうか」

男はすでにすぐ近くに立っている。

「何をですか」

韋荘は強がった声を出す。

「昔、雀蛤先生のお店に厄介になっていた者の行方でございます。御存知でありませんたら、お教え願いたいのでございます」

「お答えしてもよろしいのですが、そなたがいかなる人、何故あつて店の者のことを聞こうとされるのか、まずはおっしゃつていただきませうか」

男はしやがむように深く身を屈め、

「まことに失礼いたしました。気が急ぎまして。それがしは鄭俊（てい しゅん）と申します。かつて雀蛤先生のお店の方々には鄭郎、鄭郎と呼ばれておりました者です」

目を見張る。そう言われて見ればおぼろげに甦ってくる。そのころは髭はなく、勿論頬の傷もなかった。

「では、もしかして、阿枉の兄なのかい」

「左様でございます」

「阿枉のことを尋ねようと、ここをきたのかい」

「へえ。都には数日前に着いたばかり。今日は御主人さまの御用がなく、確かこのあたりと思いつつ訪ねて参ったのでございます」

「私のことも覚えているかい」

「雀蛤先生に面差しが幾らか似ておられるところを思いますと、貢挙を受けようとされていたお従兄御さまでございませうか」

「その通りだ。雀蛤の従兄の荘だ」

鄭郎はぱったりと地面に手をつき、

「旦那さまにまたお会いできますとは、夢のようでございます。阿枉の兄の鄭俊、十年ぶりかで帰って参りました」

「そなたが。神策軍に取られて潼関にいき、無事でおったとは。よくぞ生きていた」

鄭郎の背に手を置く。

「へえ」

「そなたが尋ねたい相手のこと、何よりもこの荘がよく知っている」

「まことでございますか。あれは、あれはどうしたのでしょうか」

「こちらにくるがよい」

鄭郎の腕を取って立たせ、お狐さまの祠へと導く。

「阿枉はそなたが無事に帰ってくるよう、日に幾度となく祠の前で祈っていた。これはそのときの祠のままではないが、中には、阿枉の身を守ってくれたお狐さまの像がそのままにある」

扉を開け、首のないお狐さまの像のわき腹にある傷を示す。

「お狐さまが身をもって剣を受けてくださったので、阿枉は命拾いをしたのだ」

「阿枉は無事だったのですか」

「そのときはだ」

その晩にあつたことを手短かに語り、

「お狐さまは、兄を思う阿枉の心を憐れんで救ってくださつたに違いない。しかし、その阿枉を、そなたが今日こうして訪ねてくるまで生かしてやることができなかった。残念でならない」

「阿枉は死んだのでございますか」

「申し訳ない。我らが及ばなかつたのだ」

あらましを話し、最後のときに兄に会いたいと願っていたのを告げる。

「そうでございましたか。覚悟はしております」

鄭郎はひと声、嗚咽すると、お狐さまの傷に触れ、

「世の中がこのようになり、妹と会えるとは思っておりませんでした。妹の最後を聞いたのは有難い限りでございます。お狐さまにお救いいたさうな妹ではありませんでした。それなのにこれほどまでに深い傷がお狐さまのお体にありますとは。分に過ぎた果報者でございます」

「阿枉にはもつともつと御加護があつてしかるべきだった。あれほど心の優

しい娘が生きられずにいてよいはずがない。天の定めは行き届かぬものよ  
うだ」

「長安を出ましてより、理不尽な死ばかりを見てまいりました。全ては天の  
定めと観念するよりあるまいと思うようにしてきました。妹の死も同じでご  
ざいましょう」

「阿枉ばかりは死んではいけない身であった。阿枉の幸せを守ってやりたい  
と、それが貢挙を受ける決意の始まりだった」

伍七のことを、狐潭で舟に乗ったことから黄巢側の兵士として長安を出て  
いったことまでを話す。

「舟のことはよほど嬉しかったのでしよう、妹から幾度も聞かされていまし  
た。よいお店に御奉公させてもらって妹は幸せでございました」

「阿枉には足りないものだった」

「伍七さんは、その後はどうなされたのでございましょう」

「全くわからない」

鄭郎は祠の扉を閉じ、

「死んではいけない身でありながら死んでいく、それが天の定めなのでございましょう」

鄭郎を家に連れ、春琴と林婆さんに引き合わせる。

鄭郎は潼関の守りに出てからのことを語る。

都を出た神策軍は東に進み、まず華州に立ち寄りた。そこで食糧などを補給する手筈になっていた。ところが、黄巢が迫りつつあると聞いた華州知事は勝手に逃げ出し、知事が逃げれば役人も逃げ、役人が逃げれば町の主だった者も逃げ、逆に悪者どもが入ってきて、官署にあった目ぼしいものを盗っていた。神策軍は都から携行してきた乏しい食糧だけで先を急ぐしかなく、潼関の守備について戦うより先に飢えの心配をしなければならなかった。黄巢の大軍が押し寄せ、圧倒的な差に一日も支えられず、運よく死を免れた鄭郎は数人の仲間とともに南に逃れた。長安救出に向かってきた楊復光の軍勢と出会い、そこに組み入れられた。そのころはまだ黄巢の手下であった朱全



忠の部隊と戦うなど、長安周辺の各地を転戦した。李克用がきて黄巢は都を去り、楊復光が急死したために忠武軍は解散を命じられた。鄭郎たち兵士は鹿晏弘に従って成都を目指し、途中の興元に鹿晏弘が居座ることを決めると、王建と韓建は出ていった。鄭郎は鹿晏弘のもとに残った。

「もしや鹿晏弘のもとに韋慍のもとに韋慍と名乗る者がいなかったかい」  
韋荘は恐る恐る尋ねてみる。

「たいそう頭の切れるお方で、鹿晏弘さまは『先生、先生』といつも敬っておられました。しかし、韓建さまと御一緒に興元を出ていかれたので、何だか不人情なお方だと、あつしなどは思ったものです。しかし、後になってみて、賢いお方はやはり目の付けどころが違うとわかりました。韓建さまはいまでは華州にでんと構える節度使に大出世でございませう。鹿晏弘さまの方は興元にいられなくなり、東に出て許州を乗っ取ったところで、秦宗權に殺されておしまいになりました」

「その慍は、雀蛤とは父が違うが、やはり私とは従兄弟同士だ」

「そうでございしたか」

鄭郎は、不人情と評したのを気にしてか、きまり悪そうな顔をする。

周宝のもとをさっさと去った己も不人情と言えば同じようなもので、これも従兄弟同士だからだろう。

鹿晏弘が殺された戦いで鄭郎は顔に大きな傷を受けた。仲間の屍骸の間に埋もれて、息を殺して潜み、死なずにすんだ。それから南へ南へと流れて荊州に入った。荊州は長江の中流域に位置し、かつては大いに繁栄した。富があれば狙われるのがこの時代の常、入れ替わり立ち代り略奪にさらされ、郭禹（かくゝ）という者が占拠したときには、町はわずか十七家を留めるだけになっていた。郭禹は群盗からのしあがった人物だが、荒廃した荊州に入っただけで、思うところがあつたのだろう、そこに腰を落ち着け、町の復興に努力した。荊州は日に日に豊かになり、華州の復興に成功した韓建とともに、郭禹は「北韓南郭」と併称されるに至った。

鄭郎は、郭禹が入ったばかりの荊州で、李洵（りじゅん）という者の家で使

われるようになった。李洵は朝廷に仕える官人で、父親が死んだために荊州郊外の家に帰っていた。鄭郎がこのたび都に戻ってきたのは、李洵が再び朝廷に出る供をすることだった。

韋荘は林婆さんに、

「阿枉と兄と一緒に食べられるようなものを何か作ってくれないかい。それを持って、阿枉の墓にいきたいと思うのだ」

阿枉は都の南端の城壁の近くに葬った。鄭郎が兵士の身代わりになって受け取った銀子もそこに埋めた。

「屋根の方がいかがいたしましょうか」

「今日はもう雨は降るまい。穴が開いていた方が、濡れた部屋も乾きが早くはないかい」

鄭郎はそれを聞いてすぐに屋根の様子を見にいき、

「この家のお住まいなのはお三人だけなのでございましょうか」

韋荘は、半年ほど前に胆が死んで不便をしていると明かす。

「ごさいましたら、あつしをここで使っていたく訳にはまいりませんでしょう。唐突と思われるかも知れませんが、妹の代わりです。この屋根くらいなら、すぐに直して進ませましょう。置いていただければ、お狐さまにもいつもお参りでき、妹と一緒にいられるような気にもなれます。あつかましいお願いですが、そうさせてはいただけませんでしょうか」

「どんなものだろうか」

問いかけるようにして林婆さんの顔を見る。

「何でしょう、この婆めに目利きをせよとおっしゃるのですか」

「いや、まあ、そうではないが」

明け透けに言う林婆さんをたしなめる。いまの物騒な世の中に、阿枉の兄というだけですぐに信用してよいものか。人を見抜く眼力では林婆さんの方が上だ

林婆さんがしげしげと見るので、鄭郎は頬の傷のあたりをしきりに撫ぜまわす。

「おまえと一緒に働くようになるのだから、うまくやっつけていけるのか、気になるだろう」

言い訳のように付け足す。

「それは何ですか、このよい殿御を見て、この婆が味な気でも起こさぬかと、御心配なのですか」

韋荘は笑い、

「胸がどきどきするような男かい」

林婆さんは、鄭郎の顔を下から見て、

「浮気者ではありませんでしょう。この婆めが、もう三十ばかり若ければ、腕を掴まえて離さないところでしょう。この齡では、こちらさんが気の毒と、そのくらしいの分別はこの婆にもあります。旦那さまにとって損のない律儀者と、この婆の鑑定です」

「そうかい。私もそう思っていた。阿枉の兄だけのことはある。こちらはこれでもよくても、どうなんだい、李洵さまとおっしゃるあちらの御主人は勝手

を許してくれるのかい」

鄭郎は頭を下げ、

「置いていただければ、妹に恥かしい兄だと言われないう努めます。あちらの旦那さまは、本当にもものよくわかった人情家でいらつしやいます。事情をありのままに話せば許してくださいに違いありません」

「何なら私が頼みにいってみようかい」

言いかけた韋荘の声を掻き消すばかりに、俄かに門のあたりが騒がしくなる。

大声で呼び合い、車がきしみ、驢馬が喘ぐ。

春琴が様子を見にいき、駆け戻って叫ぶように言うには、

「杭州から伍伝さまでございます。それも大層な荷車の列です」

「伍伝とな。まさか」

慌てて出ると、まさに伍伝がしたたり落ちる汗を拭っている。

伍伝は満面の笑みで、

「御覧くださいまし、ここの門に看板を掲げれば、今日からでも御商売がで  
きましよう。たくさんの品物を持ってまいりました。まだまだ後からも参り  
ます」

山のように荷を積み上げた車が何台も着いていて、通りの向こうからさら  
にごろごろとやってきている。

「これはどうしたことなんだい」

「昨日、渭水の船着場に着きまして、そこで車や人足を逃えるのに思いのほ  
か手間がかかり、夕暮れの太鼓に間に合わず、都の門の外で夜明かしとなっ  
てしまいました。運の悪いことにあの雷です。荷車の下に隠れて、さんざん  
な目に会いました。打って代わって今日はこの上天気。しかし、都の道が昔  
と違つてこうも悪くなつていましては、あちらこちらでぬかるみに轍をとら  
れ、案外の難儀、ようやくお届けできたという次第です」

「これを杭州からはるばる運んできたのかい」

伍伝は真黒に日焼けした顔をつやつやと輝かせ、

「左様でございますとも。春のうちに着けると踏んでおりましたが、やはりこの御時勢、途中で何だかんだとありまして、夏の盛りも間もなくなってしまうました。遅れてしまった間に、旦那さまがもしも都からお帰りになってしまわれたらと、気が気ではありませんでした。とにかく、こうしてお届けできて、ほっとしました」

「長い道のりをよくぞ無事だったものだ」

「いまも都の門ですったもんだで、お役人さまに召し上げられ、途中のあちこちでも、すんなり通れるところなどどこもなくて、都合三分の一くらいもなくなってしまったでしょうか。まあ、覚悟していたよりはまだまだでした。

揚州も、お店を引き払ったときと比べたら随分とよくなりました。それよりさすが朱全忠さまの汴州は賑やかで、それには驚かされました」

「それにしてもこれだけのものをどうして杭州から持ってきたんだい」

「旦那さまのお言いつけですから」

「私は頼んでなどいないが」



「いえいえ、お店の旦那さまです」

「蘭くんなのかい。蘭くんは杭州に帰ったのかい」

「そうではありませんで、旦那さまはまだです」

一瞬高まった胸がすぐに凋む。

「どうということなんだい」

「日本に出帆される前に言い置かれたのです。このようにおっしゃいました。

『兄貴は貢奉を受けることになるだろう。受ければそれでよいが、もしも落第したときには、次の一年を何不自由なく暮らせるよう、御苦労だか長安まで入用な物を届けてやってほしい。兄貴の受験を助けると約束をした。俺が帰っていれば自分でするのだが、帰っていないときはおまえに頼む』と。それなので」

「蘭くんがそう言ったのかい」

貢奉を受けることを蘭はやはり知っていたのだ。荷車の列に目頭が熱くなる。

「荷はどこに運び入れたらよろしいでしょうか」

「倉だけは元のままに建っている。がらくたがあるのを除けて、荷を納めてくれるかい」

声が涙に潤む。

伍伝はもの珍しげに門の内へと入り、倉の様子を見て、男たちに指図して荷車を運び入れる。多くは都で雇ったのだろうが、杭州の店からきた若い者も二人混じっている。

今日はいかなる日であるのか。

もしも婺州に帰っていたなら、伍伝にも鄭郎にも会えなかっただろう。

「これで都にいられる」

倉の内に積まれていく荷に韋荘は安堵する。

「旦那さまのために皆がしてくださるのです」

春琴が言う。父親が死んだときにも泣いた顔を見せなかったのが、珍しく涙ぐんでいる。

これまで無理に気を張っていたに違いない。

「そなたのお蔭だ」

昨日までと今日は全てが違う。それをもたらしてくれたのはきつと春琴だ。

「いえ、蘭おじさまのお蔭でございます」

「やはりおまえのお蔭だ」

蘭は、何かあったときに代わりになるのは春琴だと言っていた。今日のようにになると知っていたのか。

来年の貢奉を受けると決意したばかりだ。春琴のためにも合格したい。蘭がこうして助けてくれるのだ、失敗するはずがない。

春琴は涙を拭い、

「この人たちに何か食べさせるものを用意しませんと」

と、小走りで去っていく。

倉を一杯にして荷が収まり、車を曳いて人足たちが帰り、伍伝が残る。

「もしも阿枉と伍七が生きていたならば、おまえたちは、父と子の間柄にな

つていた」

伍伝と鄭郎を引き合わせる。

「息子も生きておれば、ほぼ同じ年頃でしょう」

骨柄を確かめるように、伍伝は鄭郎の両肩に手を置く。

「伍七もそのうち同じように帰ってくるだろう」

「いえ、あれはとつくにあきらめました。風の便りもありません。朱全忠さまにお仕えしていたと聞きましたから、朱全忠さまが汴州にこられましたときには、もしやと一縷の望みを抱いていました。今回、汴州を通りましたときに聞いてみますと、朱全忠さまが節度使としていらしたときにお連れになったのはごくわずかな近い人だけだったようです。息子は王重榮さまのもとに残されたのか、あるいは、その前に死んでしまったのか。いずれにしても、いまさら生きて会えるとは到底考えられません」

伍伝の嘆息に鄭郎は、

「伍七さんは朱全忠さまの兵士だったのですか。あっしらは、当時は黄巢の

將軍であつた朱全忠さまと、鄧州で激しく戦つたものです。あつしも幾人かの敵を倒しました。伍七さんを相手に刃を交えることはなかつたと、いまさらながら祈る思いです」

阿枉が伍七に向かつて告げた最後の言葉を言う。「もしもどこかで兄と会いましたら、たとえ敵と味方でも、決して戦いはなされませんように」。阿枉はそう言った。

「伍七は、『おまえの兄なら俺にも兄だ。戦いなどせぬ』と答えた。阿枉は『私がいなくなつてもそうなさってくださいませ』と言つた。それで二人は別れ、二度と会えぬまま、阿枉は死んでしまつた」

鄭郎は顔を覆つて泣き、伍伝に向かつて手をつき、

「妹の代わり、伍七さんの代わりに、今日からは息子としてお仕えいたしたい。お許しただけましようか」

「何を言われますか」

伍伝は鄭郎を起き上がらせようとする。

「不幸にも、私も妹も父親というものを知りません。母も幼いときにいなくなりました。親への孝行をしたことがあります。妹は、伍七さんの女房にしていただいて、親孝行がしたかったに違いありません。妹に代わってあつしがするのをぜひともお許しください」

「嬉しい話だが、このような立派な息子をもつては、世間さまに申し訳が立つまい」

韋荘は二人をお狐さまの祠へと連れ、伍伝にもお狐さまの傷を見せる。

「ここで父と息子の誓いをするがよい。阿枉も伍七もきつと喜ぶ」

二人がお狐さまに祈る姿に、伍七と阿枉が別れの前に長く祈っていたのを思い起こす。莠の妻が、お祭で配る棗の菓子に似たものを作り、祠に供えた。祭の日、小舟に乗る阿枉と伍七を見て、二人の幸せを守ってやりたいと思った。それが貢挙を再び受けるきつかけになった。

「有難いことです」

礼を言う鄭郎に、伍伝は、

「父親になった私から息子のそなたに一つだけ頼みたいことがある。それを聞いてはくれまいか」

「一つとおっしゃらずに何なりとお言い付けください。孝行の初めとして、何でもやらせていただきます」

「もしも七の奴がここにいたなら必ず言いつけよう。わが息子よ、そなたに同じことを頼みたい。よいか、こちらの旦那さまが貢奉に見事合格なさるまで、いやいや、合格なされてからもだ、必ずおそばにお仕えしてお守りするのだ。これが父となった私の頼み、これ一つで、それ以外にはこれからも頼みはせぬから、これだけは聞いてほしい」

鄭郎は微笑み、

「喜んでやらせていただきます。先程、旦那さまにこの家に置いてくださるようお願いしたばかりです」

「まことか」

「妹の代わりにお努めしたいと願いました」

「それはよかった。それなら安心して帰れる」

己の周りにはこれだけの人々がいる。これで落第するはずがない。婺州を  
出発した昨年の夏とは異なる力が湧いてくるのを感じる。

緑蔓映雙扉

緑の蔓のからまる両開きの扉

循牆一徑微

垣根を巡って細い道が通じる。

雨多庭果爛

このごろの雨に庭の果実が熟れ

稲熟渚禽肥

稲が稔り、家鴨が肥えた。

釀酒迎新社

秋祭を前にして新酒ができ

遥砧送暮暉

砧を打つ音が遠く夕明かりに聞こえる。

数声牛上笛

笛の音は、牛に乗る少年が

何処餉田婦

どこぞの田に食事を届けた帰りだろうか。

一篇の詩をありあわせの紙片に記す。



冬の初め、杭州に帰った伍伝から手紙が届いた。そこには、號州に立ち寄ってみると、莊園への道は木々に鎖され、人々が住んでいた痕跡は消えようとしていたと書かれていた。

手紙を置くと、莊園に人々の平穩な暮らしが戻るのを夢想してこの詩を詠んだ。お狐さまのお祭が行われるのは稔りの季節だ。牛にまたがり笛を吹くのは、少年だった蘭であるうか。

手紙には、揚州の仏蕃の寺についても記されていた。幾たびもの戦乱を経て、寺に残るは貫休が十六羅漢を描いた堂と一、二の建物だけとなった。薛未亡人の「女人往生」の扁額は失われた。仏蕃は十年ほど前に帰ったのが最後だと言う。

伍伝の手紙は杭州に着いてすぐに書かれたもので、春琴のことを直に彩霞に告げてほしいと頼んだ結果がどうなったのかはわからない。彩霞が娘のように育てた春琴と父親が特別な間柄になった。彩霞はそれをどのように受け止めているだろうか。楊胆の死はどうか。娘の心は婺州で一緒に暮らしてい

たときでもわからなかったのだから、遠く離れた長安について推測のしようもない。

伍伝が長安を去ったのは、大風で破れた家の修繕を終えてからだだった。その前に、鄭郎が移ってきた。向こうの主人の李洵が自ら連れてきてくれた。韋荘が『秦婦吟』の作者であると聞いてのことだった。

李洵は四十余り、穏やかな風貌で、話し方もおっとりとして、万事控え目だ。鄭郎が言っていた通り情に篤く、言葉は柔らかい。しかし、理非の区別が厳然とし、内に秘めた強さがあると感じられる。

李洵と知り合えたのは大きな幸いとなった。李洵は韋荘より十歳以上も若い。朝廷での経験はすでに長く、教わるところが多い。崔胤を頼るまいと決めたのは、東呉くんには申し訳ないが、正しかったと知れる。

朝廷の多くの人々は、困難な時代を生き抜くために力のある者のもとに集まり、閥を形成している。最大の閥は宰相の崔昭緯のものだ。李洵はどの閥にも属さず、自身の信念と、孔子の教えに従って、職務を全うすることを考

えている。それを貫くのは容易ではない。口には出さずとも李洵はかなりの決意をして上京してきたに違いない。

崔昭緯の悶は、九月の事件をきっかけに、二人の宰相を擁するまでになった。二人目が崔胤だ。九月の事件とは、皇帝の差し向けた軍団の余りにもあつけない敗北である。

皇帝は己を擁立してくれた宦官の楊復恭の横暴に我慢がならず、別の宦官の力を借りて、楊復恭を都から追い出した。皇帝は溜飲を下げたものの、朝廷の力は半減し、長安を取り囲む李茂貞、王行瑜、韓建の三人の節度使は抑えようがなくなつた。李茂貞は、皇帝に和解を命じられたのを無視して兵を繰り出し、楊復恭を興元からも追い払つた。皇帝の憎しみの対象は今度は李茂貞に移り、宰相の杜讓能（とじょうのう）とともに秘かに李茂貞を懲らしめる計画を練つた。全てが筒抜けだった。崔昭緯がせつせと李茂貞に知らせていた。李茂貞は不逞の輩を使って都に騒動を起し、杜讓能を辞任に追い込もうとした。皇帝は一か八かで李茂貞を討伐する軍を鳳翔に差し向けた。李茂

貞は王行踰を誘って討伐軍を木端微塵に打ち砕いた。杜讓能は罷免、代わって崔胤が宰相となった。李茂貞は杜讓能の首を求め、杜讓能は余儀なく自尽した。王行踰は勝利に乗じて尚書令の称号を求めた。それを韋昭度（いしよ）どがはねつけた。韋昭度は朝廷の旧き伝統を守ろうとする人々の抛り所である。

李洵は韋昭度に近しくし、韋莊は李洵との縁で、韋昭度と面識を得た。崔胤に身を委ねていたら、韋昭度には会えなかっただろう。

崔胤は崔昭緯によつて宰相に引き上げられ、その一方で、自身のもとに崔昭緯とはまた別の閥を作ろうとしている。李洵も韋昭度も崔胤を快く思っていない。皇帝に仕えるのが官人の本義であつて、閥の形勢に熱心なのは政治を乱すもただ。

李洵はよき手本である。宰相になった崔胤から敢えて遠ざかることに気後れがない訳ではない。崔胤とそこそこうまくやつたところで、韓建のところには韋愠がいる。誰かと衝突するのはどうせ避けられない。ならば李洵のよ

うに一人堂々としているのがよい。その姿勢を敢然と貫けるとの強い自信はないものの、杭州の店から届けられたものが、長安での自立した暮らしを可能にしてくれている。東呉くんは韋莊の変化を察したのだろう、夏から訪ねてこない。東呉くんは大切な友人であるが、いまは離れている方が返って友情を持続させられそうだ。

お祭を夢想する己の詩を読み直し、貢奉に合格して莊園を甦らせるとの思いをさらに強める。己一人の力だけでできることではない。伍伝や鄭郎も入れた一族の人々、とりわけ春琴に支えられている。一族の力を結集して莊園の復活へとつなげるのだ。

春琴の咳が、向こうの部屋から漏れてくる。風邪など引いたことのない春琴が、秋風の立ったところに珍しく調子を崩した。いまはだいたい治ったようだが、時折まだ咳をする。父親の死にも泣かなかった無理が体に響いたのだろうか。娘に戻って、それまで男であろうとして張り詰めていたものが緩み、疲れが表に出たのだろうか。

林婆さんの買ってきた娘の服を着て春琴が女に戻ったのは、百日紅が咲き出したところだった。本人も違和感があったようだし、韋荘も不思議な感じがあった。林婆さんはしきりに、美しい美しいと言った。成程美しいには美しいが、凜々しい楊絃がいなくなっただのは寂しくもあった。

春琴が臥せったのは百日紅の盛りのところで、花も終わりになって、ほぼ元に戻り、娘らしい仕草もさほど奇妙でなくなっただけ。そうなる、一層のこと春琴は愛おしく、こうして試験が近づいてくれば、春琴のためにこそ合格しなければならぬと思う。それでも、前回のように切羽詰ったような気分にならないのは、まさに春琴がいてくれるからだ。春琴が支えてくれているまに合格しなければいつ合格するのか。春琴との夜があつてから、何事も望ましい方向にきている。あれだけ気になっていた年齢も思い患うことがない。春琴の若さが移ったかのようだ。

ただ、娘の彩霞を思うときには、春琴との間のことは、重い事実として心のしかかってくる。愛する若い女性を得た甘美な歓びに浸っているような

己であつてはならない。

青竜寺の蟻光にありのままを打ち明けた。

「遠き世の儀光禪師のように根を断たぬ限りは、情欲に駆られてではないと証するのは難事でしょう。四十以上も違ふ孫のような娘でありますから」

証するのは彩霞に対してでもあり、己に対してでもある。あの夜まで、春琴を愛しているとの自覚はなかった。

「愚僧は、楊絃と名乗っておられたころの春琴さんを幾度か見ました。我が寺の僧たちが惑うばかりの美々しき若者でした。情欲に駆られるのも至極道理であります。よろしいのです。愚僧が花を愛するのと何も変りはありません。花をより美しく咲かせようとするのも情欲。それがあつてこそ花は自ずから有するところの美しさを見せてくれるのでしよう。肝要なのは、春琴さんがこれよりいかなる花を咲かせるのか、その一事でしよう」

「あれがどのような花を咲かせましょうか」

「平陽公主さまを慕っておられるよき志が成就されるよう愚僧も祈念いたし

ましよう。花にもいろいろあります。見事な大輪の花を時節通りに咲かせるものもあれば、時節に合わず咲きかけで終わりになってしまうものも、時節を超えて咲き続けるものも、咲きかた散るものも、他の花が散って後に咲くものも、さまざまにあります。蕾が余りにも芳し過ぎて、悪さをする鳥に啄ばまれてしまいはせぬかと、あらぬ恐れを抱きます」

「あれの身に何かが起こるのでしようか」

「老い先短い老僧の取り越し苦労。春を前にして、今年も牡丹が見られようかと、いつも心配が募るものです。いまだに妄執から離脱できぬ愚かな僧の申すこと、笑い飛ばしてください」

春琴の咳に、蟻光の言葉を思い、気弱な思いが生じる。

若い春琴と年老いた己、全てが思うようにいくものではあるまい。彩霞は許してはくれないだろう。

それも受け入れるよりあるまい。何より大事なのは春琴の花を咲かせることだ。そのためにもまずは合格だ。春琴の支えを得て己は合格し、そして、



自ずから咲くべき春琴の花を咲かせよう。

人汹汹

人はざわざわ

鼓皦皦

太鼓がどんどん。

襟袖五更風

吹きくる夕暮れの風。

大羅天上月朦朧

皇城にかかるおぼろ月

騎馬上虚空

我が馬は天空を走る。

香滿衣

宮殿の香に満たされたこの衣

雪滿路

雪のような光に満たされたこの道。

鶯鳳遶身飛舞

我がまわりに鶯や鳳が舞い飛ぶ。

霓旌絳節一群群

赤い旗を靡かせる儀仗兵の間を抜ける

引見玉華君

いましも皇帝陛下にお目にかかったのだ。

乾寧元（八九四）年春、宮城の奥に初めて入り、進士及第者の一人として韋

莊は皇帝の謁見を受けた。京兆杜陵出身韋莊の名が宮殿の広場に轟くと、列より前に歩み出て、拝礼の儀を行った。朱色の欄干の階をちらりと見上げ、一瞬だけだが、殿中の奥に座すであろう皇帝の姿を求めた。遙か遠くに眩い玉座があった。皇帝の姿は捉えられなかったものの、我が名は皇帝の耳に達し、我がこの姿が皇帝の眼中にあるのは間違いなかった。

そのように考えたときだ、揚州の裸男の姿が頭に浮かんできた。

二十年以上の昔、橋のたもとで人々に笑われていた乱暴者だ。十余年前に、先代の皇帝から全忠の名を賜った。五年前、秦宗権を倒して黄河下流域をほぼ抑え、昇竜の勢いの朱全忠の前に立ちはだかるのは沙陀族の李克用くらいしか見当たらない。揚州でその裸男に酒食を振る舞った己の方はと言えば、いまようやく皇帝の耳に名が達したばかりだ。孔子の教えを学んできて、お上のために尽くそうと考える者が、孔子の教えを笑い、お上のためなど思いもしない男にかくも後れをとった。朱全忠と競う気持ちなどついぞ持ったこともない。しかし、皇帝の前に我が身を置き、突如として悔しい思いが突き

上がってきた。天下が乱れねばこのようなことは決してなかった。

祝宴を賜り、宮中から下がったのは夕刻。鄭郎の曳く馬に乗り、月に照らされる道をたどる間に、一篇の詞ができあがった。

春琴の琴に合わせて、その詞を歌う。曲は『喜遷鶯』。春琴は娘に戻ってから琴の腕前を上げた。

詞は韋荘の心そのままだ。「汹汹」「鑿鑿」と音を重ね、弾むばかりの喜び。

「騎馬 虚空に上る」、天空をいく高揚感に、「鶯鳳 身を遶って飛舞する」

「玉華の君に見ゆ」と宮中を神仙の世界に譬える。二十七歳で落第して二年を経ての今日、貢挙の合格者として皇帝の前に出たことが、この身にあらわったとはなお思い難い。

「一緒に歌ってみるかい」

春琴と声を合わせる。春琴の声は楊絃であったころの名残のまま娘としては低く、韋荘とちよほど音程が合う。

人汹汹 人はざわざわ

鼓鑿鑿　太鼓がどんどん。

声が弾み、これこそが我が人生の絶頂の時であろうか。

楊爺への恩返しができた。叔父の励ましにも応えられた。薛未亡人も喜んでくれよう。ここに春琴がいる。

婺州に堂々と帰れる。及第者は、官人としての勤めを始める前に、家族を都に連れるため一旦は帰郷する慣わしだ。出迎えてくれる弟をついに喜ばせることができる。

霓旌絳節一群群　赤い旗を靡かせる儀仗兵の間を抜ける

琴の音が止まる。

「まだ治り切らないのかい」

口を抑えて春琴が咳き込む。冬の厳寒期にまた風邪を引き、まだ完全に抜けていない。

「大きな声で歌い、息が少し詰まっただけです」

その言葉も喉に引っかかって苦しげだ。

「そうなのかい」

春琴は、咳に潤んだ眼の縁を小指で拭う。その仕草に韋荘は胸のざわめきを覚える。

人生の絶頂と思うこれほどの幸せがあつてよいものなのか。これは夢と消えてしまうべきものであるのではないか。蟻光が、芳し過ぎる蕾は鳥に啄ばまれてしまうと言ったのを思い起こす。

鼓動が早まり、黙ってしまった韋荘に、

「どうかなさいましたか」

春琴の顔を見て、己の頬に手を触れ、

「もしかして、私は喜び過ぎているかい」

「今日お喜びにならなくて、いつお喜びになるのでございませうか。そのように可笑しな顔をなさらずに、さあ、この詞の通りに、楽しくお歌いくださいませ。初めからお弾きいたしましょう」

「そうしてくれるかい。また咳が出るといけないから、私一人で歌おうか」

「いえ、もう大丈夫でございます。御一緒に歌わせてください」

春琴は軽く咳払いをし、

「ほら、もう大丈夫です」

と、喉のあたりを撫でて笑い、琴を弾き始める。

韋荘が歌い出すと、春琴も声を添えてくる。

人汹汹 人はざわざわ

鼓鼕鼕 太鼓がどんどん。

弾む喜びが再び高まってくる。今日はいくら喜んでも、喜び過ぎるようなことは無い。韋一族の長年の念願が叶ったのだ。ついに成し遂げた。

春琴の琴に合わせて歌い進むにつれ、銀犁との日々が思い出されてくる。

銀犁がいたから詞を作ること、歌うことも覚えた。黄巢が都にこないであの次の春を迎えていたなら、合格の喜びは銀犁の琴で歌ったのか。

あの夜、「全てはきつと夢なのでございましょう」と銀犁が言った。まさにそうなってしまった。

ここに春琴がいるのも夢となるのか。

今度は韋荘の声が続かなくなり、春琴の琴が止まる。

「どうなさいましたか」

「いや」

と、答えて、涙が落ちそうになっている。

「それは嬉し涙でございましょうか」

「今日のこの喜びの先は、どうなるうかと、なぜか悲しくなってきた」

「これからがいよいよ旦那さまの御活躍でございませう。悲しく思われるときではありません」

「その通りだ。合格で終わりではない、これからだ。それはわかっている」

夢と消えるのを恐れた。しかし、もしも夢であるのなら、合格したこの喜びで終わりだろうと思う。現実はそうではない。お上のため、唐土の民のため、働いてこそその合格だ。

皇帝の前で、朱全忠と競う気持ちを抱いた。あの裸の暴れん坊が、自身で

言っていたように、皇帝になるようなことがあってはいけない。それを阻止し、唐の太平の御世を取り戻さなければならぬ。己にそのようなことができるのか。二十数年前のあの日、酔った裸の暴れん坊に己はすでに太刀打ちできなかつたではないか。

「曲江の宴までしばらくお祝い事が続きましょう。それから婺州にお帰りになり、皆さまを連れて都に戻られ、旦那さまの本当の御活躍はそこからでございます」

「そのようになるのも、そなたのお陰だ」

春琴の脇に座を移し、その手の上に我が手を置いて礼を言う。

いまから先を思い患っても仕方ない。春琴とともに、今日は喜ぶだけでよいではないか。

「私などは何もいたしておりません。旦那さまのお働きを待っている大勢の人々がいるからこそ合格されたのでございます」

「私はそれほどの人間ではない」



「いえ、旦那さまは違うのでございます」

「そなたこそが他の者と違う。お蔭で今日を迎えられた。これからもそなたの望むようにすればうまくいくに違いない。私は妻の言うがままになって成功した平陽公主の夫だ」

半ば本気でそのように言い、春琴の肩を抱き寄せる。

「もう一度最初からお歌いくださいませ。二度も途中で終わってしまいましたので、気にかかります」

「そうかい」

韋荘は腕を離しつつ、平陽公主に憧れる春琴を、己を支えるだけで終わらせてしまつてはなるまいと思う。いかにしたら春琴の花は咲かせられるのか。

春琴が弾き始め、再び韋荘は歌う。

凜々しい楊絃のままであつた方がよかつたのではないか。自ずと咲く花を、実は己が摘んでしまったのか。

泰平の世に戻し、莊園を復活させ、お狐さまのお祭を甦らせ、その賑わい

の中に春琴を置く。それこそが春琴を喜ばせることであり、楊爺への恩返しになり、胆への供養になると信じてきた。本当にそうなのか。胆が背負っていた重荷を、そのまま春琴に負わせてしまったのではないのか。

春琴の琴の音に様々な思いが去来する。

これは決して間違っていない。復活した荘園で、今度こそは叔父韋韜の理想を実現する。そこに春琴の花も必ず自ずから咲くはずだ。それ以外に何かあるうか。

一望秋山静

望み見る秋の山は静まり返り

簫条形跡疎

人の踏み入った跡は稀である。

方願沮溺耦

願うべきは古き二人の隠者のように

澹泊守田盧

田を守りつつ淡き日々を送ること。

叔父の声が聞こえてくるようだ。

一族の念願を果たしたようでいて、またも叔父の意志に反してしまったのか。

韋莊は詞をまた最後まで歌い終えることができない。

「いかがなされましたか」

春琴は琴を止める。

その間に答えず、春琴の身を胸の内に収める。今日は喜びを尽くしたい。

**劉得仁の墓。**ここに立つのはいつも春と夏の境目あたり。

土の盛り上がりに酒を注ぐ。訪れる者が他にもいるのか、草が取り払われている。晴天が続いて乾き切ったその土に、酒がはじかれ丸い塊となる。塊同士が合わさって大きくなり、じきに潰れ、流れ下る道を求め、地下へと吸われる。

劉得仁は、ここに立つ己をどう見ているだろう。進士及第を果たしたのを羨むのだろうか。恐らくはそうではあるまい。

小さな瓢箪の酒はすぐに尽きる。

貢挙に合格した己と、不合格のままに終わった劉得仁。二人は別の場所に立っている。そんな己の手向けの酒など、劉得仁は望まぬのだろうか。恐らくはそうであろう。

劉得仁の生涯を哀れみ、同じ轍を踏むのを恐れていた。そうであるのに、いま劉得仁を羨む気持ちがある。不合格のままだったのか。決してそうではない。

今日ほど劉得仁に畏敬の念を抱くことはない。蟻光禪師が言っていたのが本当だったようだ。劉得仁は不合格であったから劉得仁であった。合格した己は何になつたのか。

己は後れ過ぎた。進士及第が人生最大の痛快事とされた時代は遠い昔だ。劉得仁の不遇に皆が胸を打たれたのはそのような昔だったからだ。いま劉得仁を哀れむ理由はどこにあるのか。後れ過ぎた者こそ哀れであろうか。そうであってもこの生き方を貫くしかあるまい。劉得仁が落ち続けたのと同じく、一切の諸仏と共にやはり無為に生きるのだろうか。

韋莊は深く拝礼する。

「では、いくとしようか」

後ろに待つのは二人。春琴と鄭郎。それと二頭の馬の小さな一行で婺州に帰る。林婆さんは、「生まれてからただの一度だって都の外に出ておりませんので」と、一人安昌坊に残った。せっかく耕してきた畑も気になるのだろう。お狐さまの祠をくれぐれも守ってくれと頼んだ。お狐さまあつての合格であり、韋家の繁栄もある。

始めは一ヶ月ほど早くに出発する心積もりだった。曲江でのささやかな祝宴が終わり、青童寺を訪ね、盛りの牡丹を見つつ、

「来年は果たしてどのような思いで、再び花を拝見することになるでしょうか」

と、別れの挨拶の前置きのように韋莊が言うと、蟻光は、

「一昨年咲き、去年咲き、そして今年もこのように咲きました。ならば来年も咲きましようか。今年は咲いて来年は咲かぬ時がいつか必ずきましよう。」

それが今年でないとはわからぬのなら、牡丹が咲くのはこの春限りと思ひ定めねばなりませんでしょう。再びの花は常にないものと同じです」

その場で韋葑たちの改葬を思い立った。朝廷での職を得て後と考えていたのだが、婺州に帰る前に、杜陵にある先祖伝来の墓所に、阿枉も楊胆も皆葬り直した。都の南端近くの阿枉を埋めた場所から、鄭郎が神策軍に入る代わりに受け取った銀子が出てきた。鄭郎は慟哭し、「母がもしも生きているのならば、これで西方に捜しにいくのを妹は願っているだろうか」と言ったが、結局は、杜陵の墓所にそれを埋めた。

改葬を終え、これで何かの時には長安には戻ってこなくてもよくなったとふと思ひ、すぐに打ち消した。

予定外のことをしたために、婺州への路銀が心もとなくなつた。李洵が、道すがら荊州を訪ねてくれれば、家の者にその先の旅の用意をさせましようと言つてくれ、その好意に甘えることにした。長安から南に出る道を選ぶ。潼関を東に出て虢州、洛陽、汴州、揚州といく道筋は、都に上つてきたとき

と同様に今回も通らない。

韋荘は、鄭郎が轡を取る馬にまたがって劉得仁の墓を去る。春琴は荷を載せた馬を引く。道中の安全のために楊絃の姿に戻っている。ほぼ一年ぶりの紅をつけぬ春琴を、娘姿よりも美しいと感じる。凜々しいこの楊絃こそが本物だ。ただ以前に比べて随分と白くなった。明る過ぎる夏の光のせいなのか、青白いくらいに見える。旅が始まれば、日焼けした精悍な顔色にすぐに戻らるだろう。

「都ともしばらくの別れだな」

「早く昔の繁華な都に戻ってほしいものでございます」

かつては、都の南のはずれに近いここらあたりでも、昼間に人通りが絶えるようなことはなかった。いまでは草が遠慮なく進出し、どこが大路なのかわからないありさまだ。四方を見回して、道を歩みつつあるのはこの三人だけ。春琴の背後、遠く北へと延びる大路には、舞い立つ埃によって鎖される彼方まで、一人の姿もない。

「昔は、貧乏なあつしらのような者は、その日その日を食うのが必死で、嫌な憂き世と思つたものです。しかし、それも今から思えば夢のようです。さすが華の都、市にはいつでもどの店でも山のように品物が積まれ、紅い顔の人やら、緑の目の人やら、真白な肌の人やら、真黒な人やら、様々な人が聞いてもわからぬ言葉で大層な商談をやっていました。あの賑やかさがどうして消えてしまったのでしょうか。理不尽な天の定めなのでしょうか」

鄭郎は胡人の大商人が集まる西の市にいた。黄巢がきたところに、西方の商人は都を引き上げ、いまでは一人も残っていない。

この長安に昔が戻るのか。韋蘭が予言した通り、章華台のような廢墟になるのか。そうならず押し留めるのが己の為すべきことだ。

韋莊は一つの詩を誦じる。

長安二月多香塵

長安の二月、塵さえも香り高く

六街車馬声隣隣

街はどこもかしこも車馬の響き。

家家楼上如花人

家々の楼の上に、花のような人が並び



千枝万枝紅艷新  
千枝万枝に紅の花が艷やかに開く。

簾間笑語自相問  
簾の内で笑いながら尋ね合う。

何人占得長安春  
「長安の春って誰のものなのかしら」。

長安春色本無主  
長安の春に、もとより主などいたりしないけれど

古来尽属紅楼女  
古来、すべては色里の女のものとなっている。

如今無奈杏園人  
しかし、進士に及第した若者がいたのではどうにも

ならない

駿馬輕車載將去  
駿馬に乗り車を飛ばして、春をみなもっていつてし

まうのだ。

叔父の韋韜に請われて戯れに作った詩。「開元の趣きがある」と叔父は笑ってくれた。韋荘の見ぬ遠い盛時を想像した詩だ。

「今では誰一人として記憶する者のいない昔むかしの都だ」

そのころ、進士及第を祝う宴に向かう合格者をひと目見ようと、都の女性たちは色めき立った。今年も、曲江の宴は行われたが、「家家の楼上 花の如

き人」などと言う光景は絶えてなかった。そもそも「家家」がない。皇城を少し離れれば、家並みはまばら、建っているのは廃材と瓦礫を寄せ集めた檻樓屋のようなものだけ。坊を囲む土塀もあちこちが崩れ、郊外の野をいくにも等しい。曲江のほとりの離宮は跡形もなく、寒々しい風が吹くばかりだった。

「旦那さまは覚えていらっしやるではございませんか。鄭郎さんも昔の市を御存知です。そのような方がいらっしやる間は、昔の都を取り戻そうとする力が生まれてくるのではございませんでしょうか」

「そうであるかも知れぬ。私のような年寄りには、たぶん昔を伝える役目もあるのだろうか」

「旦那さまは年寄りではありません。天下の大勢は旦那さまにかかっていると思ってください」

楊絃は雄々しい。それにつられて、

「再びここに戻って、我が残りの日々を天下の人々に捧げよう」

力を込めて言う。劉得仁に恥じぬことをしなければならぬ。

この先、都に戻ってきてからも春琴がいてくれるのだから、我が道は必ず開けていくはずだ。

ぼくりぼくりと馬を進める。眼前の光景は、勇ましい我が言葉とは遠い。

長安寂寂今何有　長安は寂寂として今は何があるのでしょうか

廢市荒街麦苗秀　廢れた市に荒れた街、草が伸びるばかりです。

『秦婦吟』に歌ったありさまがそのままにある。銀犁が作らせてくれた『秦婦吟』のために、銀犁のためにも、できる限りのことをしたい。

韋莊は春琴を振り返り見る。

婺州に帰ってこの春琴をまた娘の姿に戻すのは寂しいようにも思う。春琴は幻として消えてしまいそうだ。

いや、春琴を妻として伴ってここに帰ってくるのだ。奇妙な心配を振り捨て、馬を進める。

十年身事各如萍

それぞれに浮き草のような歲月

白首相逢涙滿纒

白髪頭で会えば、涙が冠の紐を濡らす。

老去不知華有態

老いて花の姿態を愛でることなど知らず

乱来唯覺酒多情

世は乱れて酒の多情だけを覚える。

貧疑陋巷春偏少

貧窮のわび住まいに春はことさらに少なく

貴想豪家月最明

貴人の豪華な家ばかりを月は明るく照らす。

且對一罇開口笑

ともかくも酒樽を開けて笑おうではないか

未衰心見泰階平

死なずにいれば泰平を見ることがあるだろう。

東呉くんの後ろ姿が小さくなっていく。

別れに際してこの詩を贈った。東呉くんは関を越えて都にいく。婺州に帰る途中の韋莊と偶然出会い、路傍の酒家で一罇を開いた。

東呉くんは崔胤の用事で都を出ていたようだ。そのことは一切口にしなかった。金陵での誓いを反故にしてはいない。しかし、韋莊はもはや同志では

ないと崔胤に見られていよう。貢挙に合格したことに崔胤は何の関わりもない。

東呉くんは今回も落第、なお劉得仁の側に留まった。東呉くんとは止むを得ず離れていく。都の外であれば誰に憚ることもなく語り合えると思つたが、東呉くんは自身についてほとんど何も言わなかった。

「鄭繁（せい けい）どのはまだ宰相でおられますか」

東呉くんは話を都の情勢へと持つていった。

「私が都に出たときは宰相でおられました」

鄭繁は二月に宰相になってまだ三ヶ月だ。

「官人としてお上にお仕えするからには目指すのはもちろん宰相。宰相となつて思う存分に働こうと志さぬようでは官人になる意味はありませんでしょう。鄭繁どのにも、国のためにとの大いなる抱負がありました。お上には、鄭繁どのに託される思し召しがあります。それが人の笑いの種になろうとは、悲しむべきではありませんか」

東呉くんは盃をあおり、卓を叩いた。

「笑いの種とは少し言い過ぎではありませんか」

東呉くんの言辞はやや不可解だった。

「いえ、笑う他はありません。如何ともし難く悲しいことに」

鄭繁は諧謔の士。もともと意図して笑いを振りまく人物だ。

顔をしかめる東呉くんに、

「それなりに見識のあるお方なのでしよう。そうでなければ、こうまでお上の御心を捉えるはずがありませんから」

東呉くんの思いを探るように言った。

鄭繁は時事を嘲る詩を書く。哄笑を誘う謎めいた句は、読む人が読めば、宦官や節度使の誰それをあてこすったものとわかる。近しい友人に披露したものが口から口へと都に広まり、皇帝の耳にまで達した。皇帝は鄭繁の詩を集め、裏の意味を明らかにする注を自ら施し、せめてもの憂さ晴らしとした。それが昂じたのだろう、大拔擢となった。

「お上は、御心を託せる者を求め続けておられるのです。それは前には張濬どのであり、そして杜讓能どのでした。このたびは鄭縵どのです。お上の御焦燥は痛ましい限りではありませんか」

東呉くんは齒嚙みした。

張濬は兵士を集めて李克用との決戦に挑み、杜讓能は李茂貞討伐計画をお上とともに練った。いずれも失敗に終わり、張濬はいまも都を離れての逃亡生活、杜讓能は自殺に追い込まれた。

「お上は余程追い込まれていらっしやるのでしよう」

今年の正月、李茂貞が新年の祝賀に都にきた。臣下らしく皇帝を拝礼したが、その実は、杜讓能と企んだような馬鹿な真似は二度とせぬようにと威嚇するための来訪だった。李茂貞を後ろ盾と頼む崔昭緯はますます大きな顔をしてのさばり、皇帝は憤懣やる方なく、その捌け口を鄭縵に求めたのだろう。

宰相任命の使者が家に来たとき、「天下に私の他には一人もないのならともかく、この鄭縵にまでお鉢がまわってくるはずはありません」と、取り合

おうとしなかったと伝えられる。

「鄭繁どのほど、宦官や節度使どもの醜悪さを鋭く見ておられる方はおられません。しかし、それを嗤いとしてしか世に示せない悲しさはいかばかりでしょうか。我らのように劍を持たぬ者のあがきは滑稽と見られるしかありません」

東呉くんの興奮した様子に、怒りのもとがどこにあるのか理解できた。文官が無力な存在となっている現状だ。

それで、

「鄭繁どのは宰相になられ、何かできることがありますでしょうか」

と、尋ねてみた。

「何もできまいと、李茂貞は大笑いして、宰相任命を黙認しました。鄭繁どのほどの見識のあるお方、何か為されると思いたいものです。そうでなければ悲し過ぎます」

その言葉に胸を衝かれた。



鄭縵と比べて己にどれほどの見識があるのか。己はこれから官人となり、初めはかなり低い地位を授かるだろう。それで何ができるのか。お上のために、唐土の民のためにと思い続けてきたが、実際には朝廷に出て何をするのか。まずは与えられる職務を果たすだけだろう。国家の命運に関わるようなことはしない。万一、鄭縵のように大抜擢されたなら、そのときには何をするのか。

「いきなり天下の情勢を大きく変えるのは難しくとも、正しい考えを持つ人が宰相の地位にあれば、自ずと変わっていきましよう。君子として小さな実践を踏み行うことが肝要なのでしよう」

己自身のことを思いつつ、そのように言った。

「それで間に合うと思われませんか」

「そう確信するより他に何がありませんようか」

自身も必ずしも確信するものではない。

「おっしゃることに異論は申すまい。しかし、間に合わぬのを恐れます。お

「上は焦っておられます。時は待たぬのでしょうか」

来年帰ってくるとき己は六十だ。間に合うのか。胸が塞がった。

互いに意を尽くさぬまま別れとなり、韋荘の贈った詩に東呉くんは、

「これより互いに右と左に別れます。これは天下の大道、隔たりゆくともいつかはまた合わさります。泰平を見る日に、今日のここでの別れを笑うと、願います」

東呉くんの背中が曲がりゆく坂道に消える。

居天下之広居 広々とした天下にいて

立天下之正位 天下の正しい位置に立って

行天下之大道 天下の大いなる道を実践する。

洛陽の店で、韋蘭が唱えた孟子の言葉を思い起こす。

窮したときにこそ天下の大道をいく。東呉くんも己も、その同じ大道を歩むと信じる他はない。

乾寧二（八九五）年夏。

羅漢寺の裏門の船着場。貢挙を受けにいった同じ場所から再び都に向けて出発する。あの日には雨、今日は真夏の太陽が容赦なく照りつける。雨中に立っていた弟は同じ舟の上に乗る。

今度こそは弟に合格の報せを持ち帰りたいと痛切に思い、一年余計にかかりはしたものの、長年の夢を果たした。婺州に帰った去年の秋の日、弟は泣き、兄も泣いた。二十七歳で合格していれば喜びは笑いばかりであつたらうが、万感迫つての涙しかなかった。

都への帰還が今日にまで遅れたのにはいくつかの理由がある。その第一ではないにしても、大きな心残りは、彩霞に一度も会えぬままに婺州を離れることだ。彩霞は同じ婺州の内、西に離れた蘭溪県の和安寺に連なる尼寺に入つた。「世にいるべき理由がなくなりました」と陸氏に告げ、貫休の得度を受けて尼僧になつたのは、韋荘が落第した春だつた。彩霞の出家は都には知ら

されず、婺州に帰って韋莊も春琴も初めて聞いた。貫休に尋ねると「仏縁に依る」との答えがあるだけ。韋莊よりも春琴が驚き、蘭溪県にすぐにもいこうとした。ところが、そうするよりも先に崩れるようにして春琴は床に臥せねばならなくなった。旅の間は楊絃の姿で元氣であったので、彩霞の出家よりも動揺させられた。幸い、十日ほど起きられるようになり、この二年近く気持ちを張り詰めさせてきた疲れが一遍に出たためだろう、婺州でゆつくりすれば自ずと元に戻るだろうと受け止めた。

起きられたのを機に、春琴は娘らしくまた化粧をし、韋莊は、楊胆の足掛け三年の喪が明けたならば春琴を妻にし、その上で都に戻るつもりであると皆に告げた。伍伝からあらましは聞いていたので改めて驚く者はおらず、淑娥の祝福に春琴は顔を赤らめた。その様子を愛らしく思う一方で、快活な楊絃が消えてしまったのが寂しくもあった。春琴は徐々に好くなっていったが、咳が残り、どこかもの憂わしげに家の内に垂れ込めていることが多く、なかなか安心できるようにはならなかった。いつそ楊絃にまたなって剣術の稽古

に励む姿を見せてもらいたいと思うこともあった。

綜は相変わらぬ釣りの三昧だ。韋荘が都にいく前も留守の間も、父親の仕事を手伝いつつ、その合間を見ての釣りであったのだが、韋荘が帰ってきてからは、どう言う訳か朝早くから夜遅くまで釣りばかりで、時には夜も帰らないようになった。あたかも韋荘を避けているかのようでもあった。かつて春琴と並んでよく釣り糸を垂れていた場所に、ぽつねんと綜の姿があるのを見たときには、春琴が楊絃のままであれば一緒に釣りができるであろうにと、二人に悪いことをしたような痛みを感じた。そのような思いを春琴に言うことはできなかつた。

弟の藹はおもに貫休から、ときには錢鏐からも筆写の依頼がくる。藹は倦むことなく筆を持ち続ける。綜もかなり上達し、一見しただけでは父親と区別がつかない。貫休は「釣竿を持つように筆が持てるようになれば父上の域に近づきましようか」と、綜と父の手はまだまだ大いに違うと言う。

秋の終わりに、錢鏐に進士及第の報告をするために杭州にいった。春琴の

ことは気がかりであったが、「このごろは、気分もすっかり好くなりました。お帰りになるころには元の春琴になっておりましょう」と言うので、あまり心配し過ぎてもしけないと出発した。

杭州は大きく様変わりしていた。一年ほど前から城壁の拡張工事が始まった。すでにできあがった部分はかつての長安城に匹敵するほどに堂々として美しく、完成すれば周囲七十里に達するという。大工事でありながら、人々に労役を厭う様子はなく、杭州が大きく立派になっていくのを誇りにしているようだった。町の中は以前にも増して活気に溢れ、一年半余りを過ごした長安との違いに、長安が唐土で最も華やかであったのは遠い過去のこと、元には戻らないのではないかと思わずにはいられなかった。

杭州の店に韋蘭は帰っておらず、消息は全く知れないままだった。鄭郎を店に連れ、そのままそこに留める心積もりでいた。范実も伍伝ももうよい齢で、范実には後継ぎがいるのに対して、伍伝の息子の伍七は行方知れずのままだ。鄭郎は腕が達者である上になかなか機転がきき、伍伝の後を任せる

のにちようどよいと思つたのだが、鄭郎は妹の阿枉の代わりをするのが自分の仕事であると言ひ、伍伝も義理の息子は韋荘のために尽くすのが本分であると言つて、二人とも頑として聞こうとしなかつた。

錢鏐は韋荘の合格を喜び、祝宴を開こうと言つてくれ、その日がなかなか定まらぬままに、杭州での滞在が長引いた。待つ間にもしや韋蘭が突然帰つてきはせぬかと思ひ、また若々しさに溢れる杭州の町を逍遙するのはそれ自体楽しいことであつたから、春琴のことを気にしつつも、杭州の日々は悪いものではなかつた。

祝宴は盛大であつた。錢鏐は形式上は皇帝から任命されて杭州の地を治める身であるから、町から進士及第者を出して朝廷に送り出せるのは誇りとすべきことである。まして韋荘は貫休の友人である。杭州の主な人々が集まつて、長安は曲江の宴よりも華やかであつた。錢鏐には大いに風格が備わつた。杭州を自身の力でこれだけ発展させてきた自信からくるものなのだろう。

婺州に再び戻つたのは冬の半ば。意外なことに春琴は不在だつた。陸氏と

綜と三人で彩霞に会うために蘭溪県にいき、家には弟と淑娥が残っていた。旅に出られるまでに春琴が好くなつたのを喜ぶ一方で、黙って出ていったことにあらぬ不安を抱かずにはいられなかった。春琴までも出家してもう帰つてこないのではないかと心配した。

待つこと数日、それは杞憂に終わった。春琴は婺州に戻ってから初めて見るような晴れ晴れとした顔だった。それで安心すればよいものを、すぐに別の不安を抱いた。彩霞に何か思わぬことを言われ、春琴は変わってしまったのではないか。気を回し過ぎだとはわかつていた。綜がにこやかな顔で一緒にいたのもなぜか面白くなかった。

留守の間に勝手に蘭溪県にいったのを詫びつつ、帰ってきた挨拶をした春琴に、

「で、あれはどうだったかい」

「自分でも驚くほどにぶつきら棒な言い方で尋ねた。

春琴の顔から笑みが消えた。



「お母さまは大層お元気そうでございました」

彩霞の住まう尼寺の様子を答えた。

「で、あれとはどんなことを話したのかい」

「くれぐれも旦那さまのことを頼みますと、おっしゃいました」

会ったのはわずかに茶を一服するだけの時間で、実際に話したのはそればかりだと言った。

「本当にそれだけだったのかい」

「左様でございます」

疑ったのではないが、自分の言い方に棘があるのはわかった。

彩霞はこの父をどう思っているのか。春琴がどうして晴れ晴れとした顔で帰ってきたのか。何もわからず、不安と苛立ちを覚えた。

別の機会に陸氏に尋ねても同様の返事だった。尼寺で過ごしたのはほんの短いひと時で、まず春琴が彩霞に詫びると、「老いた父をお守りください。そなたは我が娘でありましたが、これよりは我が母上、父のことのみを思いま

すように」と言い、春琴は当惑しながら、「旦那さまにとって大切なときが巡りきたのでございます。命をかけてお仕えいたします」と答えた。

本当にそれだけだったのか、綜にまで聞くのは気が引けた。

綜は、

「都にはいついかれるのですか。曲江で都の魚を釣り上げるのが待ち遠しくなつてまいりました」

いかにも楽しみにしているかのような様子をわざわざ作つて尋ねてきた。婺州に帰ってから綜とまともに話をしたのはそれが初めてだった。

ごく平静を保つて、春琴を妻にしてから上京の準備にとりかかるつもりである、前から皆に言っていた通りのことを答えた。

「あの方は平陽公主さまへの憧れをいまも持ち続けておられると、伯父上はお考えでしょうか」

綜は春琴に対して敬語を使った。

「そうだと思つている」

「私が旅籠屋の婿になるよりは、あの方の願いが叶った方が、ずっと世の中のためになりましょう。勿論、旅籠屋の婿になれるあてだつて簡単に見つかるものではありません。都にいけばそれこそ好い話がころがっていませんかな」

綜は楽しみに笑つた。

蘭を真似たようなその笑い声が、なぜか韋莊の気持ち逆なでした。

春になつて楊胆の喪が明けた。

春琴は自ら抱かれることを求めてきた。それは婺州に帰つて病に倒れて以来のことで、韋莊の腕の中で、

「この私めを妻にして下さるとの思し召し、これより嬉しいことはございません。そのように思つて下さることに免じ、一つばかりのお願いを申し上げることをお許しただけませんか。私一人が、これほどの幸せを受けていては許されないと思えてなりません。たとえ多くの人の幸せに後れても、私などが受けては申し訳が立ちません。それを人に先立つてこのように

していただきましては、身に余ることと恐ろしいばかりです。せめて都にお戻りになり、正式に官位をお授かりになって、御立派なお仕事をなされて、多くの人をお幸せにされてからにはいただけませんでしょうか。旦那さまが日ごろのお志をお果たしになるお姿を拝見し、その片隅で妻とならせていただけましたら、この春琴、これ以上の喜びは望めないと思うのでございます」

その言葉を素直に聞けなかった。妻にしてから都に伴うと言い張った。

理由はわからないが、得体の知れぬ疑念が渦巻いた。脈絡のつかぬこととわかっていた。それでも、四十歳も離れた男女が心から愛し合うはずがないと思えて仕方なかった。春琴は己を合格させようとそのようなふりをしたのではないのか。あの夏から幾度か春琴が体調を崩したのは、本当の心に反することをしてきたためではないのか。春琴は楊絃として生きようとしてきた。それが、こんな老人に女として抱かれるなど、苦痛以外の何物でもないに違いない。

綜は春琴の心を知っているのだ。だから平陽公主のこと持ち出したのか。きつと綜の方が春琴のことをよくわかっている。若い綜の方が無論春琴の相手にふさわしい。常に一緒に過ごしてきた二人は、兄弟とは違う感情を抱き合っているのではないか。

彩霞は全てをわかっている。彩霞は春琴と綜に何を言ったのか。

訳のわからぬ感情に突き動かされて、春琴を痛めつけるばかりに激しく抱き、春琴はまた体を壊した。

韋荘は己の愚かさに愕然となった。

いままでどうして気づかずにいたのか。己が己で全く信じられなかった。春琴が油断のならない病に侵されているのは余りにも明らかなことだった。

昨日今日のことではない。蕾が芳し過ぎて鳥に啄ばまれてしまわぬかと蟻光は言った。その通りだったのだ。春琴は自身の病が由々しきものであると悟っていて、だからこそ、立派な仕事を先にと願ったのだ。春琴はその思いを彩霞に告げたのだらう。綜も知っていて、早く都にいったら、平陽公主に憧れ

る春琴の思いを果たしてやりたいと考えているのだろう。

己には、春琴が期待する立派な仕事を成し遂げられぬとの不安がある。それが己を一層愚かにした。己で打ち克とうとせず、暗い情念の内に閉じ籠っていたようにした。

臥せってしまった春琴に謝った。

「お上のため、唐土の民のために働き、その先に、虢州の莊園を復活させる。幾度も言った通り、狐潭でのお祭を復活させ、そなたに見てもらいたい。必ず実現させる。その日がくるまで私を支えてほしい。我が妻となってくれるのは、その日がきてからで良い。私にはそなたが必要なのだ。どうか私の傍らにいてほしい」

泣きたいばかりの己の愚かさに、春琴にすがりついた。

「旦那さまの思し召しに適うよう、この春琴、お努めさせていただきます。これしきの病などには打ち克つてみせます」

「そなたは平陽公主さまだ。病などに負けるはずがない。私は平陽公主さま

の夫、妻がいてこそ功を成し得る。そなたなしでは合格しなかった。これからも何もできない」

春琴は言葉の通り、暖かくなるにつれて少しずつ持ち直していった。

その一方で、都からは不穏な動きが聞こえ、上京をいつと思いつ定めるのは容易でなかった。春琴が完全に回復し、都もすっかり安心できる状態になってからにしたい。それは無理な願いであるとわかっていた。

春は過ぎ行き、錢鏐が大掛かりな戦争の準備を始めた。越州の董昌を征伐する勅許を朝廷に願ひ出た。かつて董昌は、越州を攻め取ってきたら杭州を任せると錢鏐に約束し、錢鏐は杭州を、董昌は越州をそれぞれ基盤として共存共栄を図ってきた。董昌という人はより高い官位を求めると熱心で、皇帝に貢物をせつせと贈っては位を進めてきた。皇帝を重んじない節度使が多い中、貢納の金額が天下第一であるとしてついに隴西郡王に封じられた。皇族以外ではほぼ最高の称号で、郡王の上は王で、その上が皇帝だ。董昌は授かるのを待っていられず、この二月、王を飛び越し、勝手に皇帝として即位

し、国号を大越羅平国と称した。近臣に朝廷になぞらえた職官を与え、錢鏐を兩浙都指揮使に任命した。錢鏐は偽皇帝の命など受けぬと拒絶し、謀反人の董昌を征伐する許可を朝廷に願った。形だけではあっても錦の御旗があった方が戦いやすい。

都は都で大変で、李茂貞、王行瑜、韓建の三人の節度使が示し合わせて乗り込んで、皇帝と直談判する有様になった。

ここに韋莊は都に上る決心をした。

春琴の体調は元通りにはなっておらず、都の状況は予断を許さない。春琴の病は恐らくは完全に癒える日はなく、都もまた全き平安を得る日はないだろう。婺州に留まっていたのでは、お上のために、唐土の民のために、何もできないままになりかねない。春琴を妻に迎える日は永久に巡りこない。

韋莊が上京の決意を告げると、春琴は大いに喜び、病など初めからなかったかのように甲斐甲斐しく旅の準備に取りかかった。

たちまちにして今日の出発。一家は舟の上であり、残るのは彩霞一人。彩



霞とはこのまま永久に会えぬのか。

羅漢寺の裏門にこの日一人立つのは、二年前の弟ではなく隻念。手のない画僧だ。離れゆく舟を見守る隻念の眼差は少年のころと変わらない。貫休がいればこそこの隻念がある。貫休は不思議な僧だ。肥えた貫休は俗臭芬々として、痩せた蟻光とまるで違い、禅の奥義を窮めたとは思えない。しかし、なぜか遠く先を見通す眼力を有し、弟子や民衆を巨大な衣で覆っている。

別れに際し貫休は、

「立派な官人になられると、大相国寺で申し上げた通りにとうとうなりましたな」

と笑い、韋荘は、

「ひとえに大禪師さまのお導きによります」

前回の上京の折の助言も含めて礼を言った。

結局は、大相国寺で会ってから、己は貫休の手の内にあつたようなものなのか。

「愚僧が申すのはどなたの目にも明らかなことばかり。かくなられるとは、愚僧一人が知っていたのではありません。貢拳と言つ長年の重荷を下ろされ、これからは堂々の大道をお心のままに歩まれるのがよろしかろうと、これもまた愚僧ならずとも誰もが思うこと。しかし、官場は世間とはいささか違い、難しいことも多々あります。心が臆せば時に遅れ、心が逸れば時流に呑まれてしまう」

時に遅れた者、時流に呑まれた者、一人ずつの名を貫休は挙げた。

一人は王鐸（おうたく）。宰相を初め高官を多数輩出した名族に生まれ、進士及第後、順調に出世し自身も宰相となった。黄巢が潼関を破ったとき、皇帝を追つて成都に入り、黄巢を討つ檄文を天下に飛ばして人々を発奮させ、ごく短時日ではあったが黄巢を長安から追い出すことに貢献した。韋羨が殺された官軍の不埒な行いは王鐸には責任のないことだ。

黄巢が滅ぶと、王鐸は黄河の南の地を鎮めるべく関東に赴き、汴州の朱全忠の力を借りてその事業を為そうとした。朱全忠は朝廷の高官を上辺は立て

でも、王鐸は身を脅かされる思いがし、都に帰りがたがった。皇帝は王鐸を朱全忠と離すことにし、王鐸は新しい任地に移るに際し、元の宰相にふさわしい堂々の隊列を連ねた。朝廷の威風を民に見せ付けるのは泰平の時代には意味のあることだったが、これ見よがしの煌びやかな服、多数の侍妾を伴うのは、いまの時代に不似合い過ぎた。絶好の得物が自らきてくれたと、近くの節度使の息子が待ち伏せし、王鐸以下賓僚従者三百余人を殺し、衣装調度と女を奪った。この蛮行を、父の節度使は盗賊の仕業と報告し、朝廷は不問に付した。

もう一人は劉巨容(りゅうこよう)。黄巢がかつて南方の広州から北上して長江を渡ろうとしたとき、荊州の地でそれを阻む役を授かったのが劉巨容である。軽く一戦を交えると、黄巢は無理をせず東に去った。劉巨容の部下は、すぐに後を追えばたやすく撃ち破れると言った。劉巨容は「お上は急なときばかりは将士に頼り、しかし何かと官賞を惜しむ。事がすめば将士は見棄てられ、悪ければ罪を着せられて殺される。賊は生かしておいてこそ、我等に

とつての富貴の種となるのだ」と、黄巢を見逃した。黄巢が長安に入ったのはその一年後。劉巨容の言は時流をみごとに捉えたものだったが、世の中の変化の激しさに劉巨容は荊州の地を保てず、各地を転々として、最後は成都の田令孜のところに逃げ込んだ。劉巨容は、薬を焼いて黄金を得る方法を方士に習い、それで得た黄金を田令孜の弟に見せびらかした。田令孜はその法を知りたがり、劉巨容はもったいぶって教えなかった。田令孜は怒って劉巨容を殺した。

貫休は、劉巨容にも王鐸にもならぬようにと言ったが、ではどのようにしたらよいのか、その方策までは教えてくれない。

舟は羅漢寺を離れ、隻念の姿が小さくなっていく。婺州を故郷のように感じたのはここに貫休がいるからか。隻念にはここで画業に打ち込む日々がこれからも続く。

己には大きな志がある。それを果たすために都にいく。

舟に春琴がいる。春琴を支えとして、都での官人としての人生を始める。

必ず成功するのだ。

春琴の病の根は断たれた訳ではない。旅の間に再発するかも知れないし、都の情勢が厳しければ春琴にとつて過酷なことにもなるだろう。春琴に困難を強いることもあるだろう。そうとわかつていて都にいくべきなのか。

春琴が望んでいる。春琴は命も惜しまぬ覚悟を決めている。それに見合つたことを己はしななければいけない。そのために都にいくのだ。

遠く羅漢寺の門を見続けている。ここには二度と戻つてこないだろう。この風光を心に刻んでおこう。わずかの間だけだが、ここでの穏やかな日々があつた。

真夏の昼の光に春琴の横顔が青褪めて見える。

逡巡してはいけない。立派な仕事をしたと春琴に認めてもらえることをしなければならぬ。

羅漢寺の門をなぜ見続けるのか。故郷と思つた婺州との別れを惜しむだけではない。秘かに思うことがある。春琴も門に同じ人を見ようとしているの

かも知れない。

彩霞。永遠の別れとなるのか。娘の許しは得られないままだ。それで当然である。しかし、彩霞に会っておきたい。許しは得られないとわかっている。会ってどうするのか。わからない。わからないから会いたい。

彩霞がきたならば何かが始まる。それは何であるのかわからない。彩霞がこなければわからないままに終わる。

羅漢寺の門が視界から消える。舟は林の中へと入っていく。

彩霞がくることはなかった。己は都に上っていく。

林を抜け出る。綜と春琴がしばしば釣りをしていた岩場の前を通り、広い川の流れへと乗る。

兩岸を見渡す。彩霞の姿をなお求めるのか。

それもあり、一方で、ある音を耳が求める。いま聞こえている全ての音とは異なる一つの音。それは彩霞がここに現れる以上にあり得ない。

笛の音がして、不意に、

「兄貴、都なんぞにいつてどうするのですかな」

横付けされた隣の舟に韋蘭が乗っている。

お上のために、唐土の民にためにと、いつものように言うと、蘭は大笑する。

「葉にしがみついたまま大河の流れに落ちる虫けらに余程なりたいのですな。兄貴も物好きですな。首をほんの少しだけ高く伸ばした朱全忠などと競ってどうするつもりなのですかな。そんなことよりは、こちらに移って、一緒にいきませんか」

「ほう、どこへだい」

「決まっていますな。日本よりも遠く、次は蓬萊島ですかな。鯨くんと鯨を釣る約束も果たせましような」

そのように誘われて、いまなら断りはしない。

春琴を抱え、彩霞も連れて、蘭の舟に移る。我が一族は乱れた唐土を遠く後にするのだ。それで何かいけないことがあるだろうか。

むろん笛の音はどこからとも聞こえてこない。  
我が志はここにある。